

久慈マサムネ

Kuji Masamune

イラスト◆Hisasi

メカデザイン◆黒銀

06

# 魔装学園

ハイブリッド

×

ハート

Hybrid×Heart  
Magias Academy  
Ataraxia

# 魔装

Hybrid×Heart  
Magias Academy  
Alaruxia

# 学園

ハイブリッド

06

アイネス  
・シンクラヴィア

[あいねす・しんくらヴィア]

「——これが、本当のあたしなの？」



偵察ミッション START!

『何だよ、その笑いは』

「とっても可愛いでが、うりますよ」

飛弾傷無??  
[010-65277]

ガートルード  
・ヘアード  
つるぺたなマステース部員。

コミカライズ・イラスト  
魔カケーブルで連結改義ON!!

「こんな恰好……はずかしいわ」

「それだめ……同時になんて感じ過ぎる……！」



「もうあなたに戦う手段はないわ。」

大人しく投降して」

「投降？ 俺を殺しに来たんだろ？」



Gertrude



ハイブライッド・パート  
魔装学園 H x H 6【電子特  
別版】

---

文芸文芸ムネ



角川スニーカー文庫

本件品の全部または一部を盗竊、横領、欺取、偽造し、なり、ホームページ上で転載することを禁止します。また、本件品の内容を複製して販売、転送等を行うことを禁止します。

本件品購入時に承諾いただいた規約により、商標・商標がみられる本件品を第三者に譲渡することはできません。

本件品を示すメールアドレスのメールアドレス偽造は、同様のキャンセル時に予告なく拒絶される場合があります。

本件品は複製品でレイアウトされています。

また、複製品は「デザイン」システムであり、表示の質が認められることがあります。



## Contents

## プロローグ

一章：強敵内会

二章：イスガルドの休日

三章：同盟

四章：逃走

あとがき

電子特典イラスト

# No.1 KIZUNA HIDA

飛弾傷無 [ひだ・きずな]

特殊能力・接続改装で女の子をパワーアップさせる力を持つ。



# No.2 AINE CHIDORIGAFUCHI

千鳥ヶ淵愛音 [ちどりがふち・あいね]

近接戦闘が得意な魔導装甲ゼロスの使い手。  
昔の記憶を失っている。



# No.3 YURISHIA FARANDOLE

ユリシア・ファランドール

魔導装甲クロスを操る世界的なエース。  
遠距離からの攻撃が得意。



# No.4 HAYURU HIMEKAWA

姫川ハユル [ひめかわ・はゆる]

ハレンチなことが苦手な女の子。  
中近両方の攻撃が可能な魔導装甲ネロスを操る。



# No.5 REIRI HIDA

飛弾伶俐 [ひだ・れいり]

厳しくも優しいアタラクシアの総司令官。



# No.6 SYLVIA SILKCUT

シルヴィア・シルクカット

アタラクシア中等部に通う女の子。  
傷無を隊長と呼んで慕っている。



700-2

鏡の中から自分を見つめ返してゐる少女は、壁畫のみに訴へられた愛蓮は身を固めてゐる。

それは衣服といふよりも、裝飾品だ。金銀と宝石で作られたアタセサリを首に代わりに身に付け、選べる模様の布をロープのように刺繍つていた。全てのアタセサリは愛音の体を画面に映すした彫刻品で、ためらふ身体の曲線にびびたり泣くように作られている。その一体感ほ、既とんだゴディバイントかと思える程だ。そして、細く細く装飾品は、あまりにも繊細が小さいが、他人に見せてはいけない部分も、十分には隠し切れていない。流れるほどに高い露出度は、愛音に強い刺激を感じさせ、同時に愛音の肉体の美しさをこれでもかと主張してい

その衣装は、愛音がいけない間にパトランティス自身を代用していた桂ダレイスが身に付けているものと、全く似ている。着た点と云えば、愛音の装束の方が、ダレイスのものよりもさらに豪華ということだ。装束自身が、己を身に付ける愛音こそが唯一の魂であり、ダレイスよりも上位の存在である、と強く主張しているようにも思われた。愛音は、深い喘息を吐いた。

幸ひ百圓以上はある自屋の片隅で、愛音はたゞ一人、壁に向かつていた。壁の中の少女は、豪華できらびやかな衣類とは対照的に、暗く沈んだ表情をしている。

心を押すように、心の中で自らに問いかける。

STANLEY A. STEIN - 2000-2001

國の中にいるのは、奴隷もなにもその人だ。身動きすると、國の中の皇帝も同じように追いつく。そう、自分はパトナ・ジキイスの皇帝なのだ。決して、天竺の女神の千姫や、神を帝などではない。

[illegible]

記憶が戻り、素性も過去も明らかになった。バトランティスにいたという事実、疑問の余地はない。それをのびのびの自分はどこか確のよように感じる。

愛音は動しく献上された黄金のオパールを手に取ると、自分の首に回して様ちで飾める。本来は持女の仕事だが、少し一人になりたくて、惣惣を言ひて持女も通關も下がらねた。要らねば、金銀細工の面で暫留して待つてゐただだあり。

愛憎はもう一度強烈を吐くと、重い腰を上げた。

蒲屋の大きさに合わせた坪の高い障を明けると、さらに天井の高い廊下へと出る。高さは二階分ほど、障は壁に五メートル以上あり、車でも壁に走れそうだが、そんな高だった広い廊下には、想像通り、侍女と護衛の騎士がずらりと並んでいた。機勢五十名ほどの列から一歩前に出る形でゼルシオス、そして蘭丸、四郎の二人、長く青い型のルノーと青い型のラムズ。

そしてその前には、要する資料をそろえていた。

「無理、と強硬論し中々、今朝も睡くば水りのお便しを促さいます」

アレイ文房より詳しく調査したところ、この書の内容は、

お世辞はいいわ。それと、そんな無行帳を話した方は極めて  
頭を上げるとダレイヌは高慢顔を顔で言い返した。

「二人だけの時ならまだしも、皆の前でそのような態度は取れぬ。館録もそろそろ東洋館に引き継がれるゆえ、余計にじや。館録と交の蓋を、明細に示しておかねばならぬ」

「この本は、日本を代表する作家の作品を、その背景や思想を詳しく解説しながら紹介しています。読者は、作品の魅力をより深く理解することができます。」

「それと結構、中文寸の時代が編纂されたぞ。ぜん、作図の用意は出来ておるのか？」

デレイスは服を着るずに、背後のゼルシオーネに問いかける。

はい。純粋外の愛着期にて、アイボス様のお越しをお待ちしております。バルコニーからの最下さい」

平靜を冀い、闘争を事と始めた愛宕は、ダレイヌ、ゼルスオー、続いてルノーとラムズ、そして渡海の二団を、綿密な陣列でついで行く。

角を曲がると階段があった。それは芝生庭園のバルコニーに直結する階段で、そのバルコニーからは王城に隣接

した戦艦の発着所を置くことが出来る。発着所は飛行場のように広大なので、成る程そこを対戦艦を限めておくには十分だ。

愛音はふと、その階段を無視して走り去りたが、階段に騙られた。手をぎゅっと握りしめると、愛音は階段を下り、広いバルコニーへと降り立った。

「これ……何となく、大層な話だね……」

愛憎はそこに集まつた勢力に動盪を誘ふた。愛憎は情を味の見くさんばかりに、同大な熱風や炎を吐き出した。使んでいる。それ、その偉傑の長生のため、その中で愛憎と實しき輪の交響には、愛憎が身を付けて、戦士が剣を掲げて立っている。

そしてその後の午前、岡田と豊利と大澤部長室の部屋。秘書数人、いや数千人だろうが、数える気も湧くほどの人が並んでいる。これでは、バトランドイスのほとんどの戦力を投入することになるのではないか？ 愛音は副官、隊のあまりの規模の大きさに、驚愕しすら感じていた。

「これまで大事にしなくても、あつし一人でも脱いでみたのに……」

七、考一：平陸學孔學校之附屬小學

「お礼を言います。アイオス様をお一人で行かせるわけがございません。ある意味、レムリアのこの戦いで最も重要な一役です。負けは許されませんが、何よりアイオス様の戦艦に傷を付けるわけには参りません。勿論、この私とルノーとラムザもお断じます」

「それなら、僕もこの本を『おとこは、おとこ』と題して読むことにしよう。『おとこは、おとこ』と題して読むことにしよう。『おとこは、おとこ』と題して読むことにしよう。」

「いいえ、あなたもルノー、ラムゼーまで討伐隊に属するのは、ゼルティイスが手前になるでしょう？ あなたたちには、このゼルティイスとダレイスを待つていて欲しいの」

「愛のことなら心配いらぬぞ、姉嬢。本来であれば、この手で魔王ズキを殺してやりたいところじゃ。思いつく限りの苦しみを与えた故でさ」

「グレイス……それでは先程の話ではないけれど、これは国庫の命を占って頂戴。それならどう？」

グレイスの贈り物

「……ならば、中を同じいの、開通しや」

「めんきょさ、グレイス。あなたがおたしのことを心配なうて、あたしもあなたを心配なの。直樹郎で言うて

るのではないわ。分かって欲しいの」

「分かっておる。姉様の愛情でこのダレイス、辛抱強く大人<sup>大人</sup>としてしまひませうじや」

ゼルシオーも時女たちの間で笑いが起きる。

重吉も微笑み、再び外を見つめた。

御母、いっばい形がわる大軍団。

重吉が底でも、心の中が寂寥になつた。

「海軍、いまあなたは何をしていろの？」

◆ ◆ ◆

「あ……いや」

重吉は海軍で、ほとんど身動きの出来ない状況だった。その中で少女は自分の体を狙い、悪い客の手と長刀に襲つていた。

「やあ……は」

しかし抵抗も無く、男の手は容赦なく少女の体を這い回る。

アタラクシアの制服を着た少女は、小柄で中学生くらいに見えた。背後に立つ男と比較すると、大人と子供のような体格差。ショートカットの髪型の下にある生真面目な目つきが、統一様の軍隊を張る。しかし、男の手が衣を脱ぎ体に触れた瞬間、すぐに不自然な表情へと變れてしまう。

「だめ……声出さずや、気付かれたら、もう人生終わっちゃうや……」

重吉が隠れると他の乗客の体面がのしかかってくる。そのとき大きく前に倒れ、見知らぬ手がお尻にびたりと張り付くように腰で固めてくる。

その瞬間、ぞくぞくする温度がお尻から体の中を駆け登る。

「嘘なのよ……はあ……」

「……なあ、ガーさんや」

「……ガーさんとか呼ばないでくれませんか！ せつかく気分が悪ってきただけ、甘無しじやねえですか！ ど

うしてくれませんか！ 甘無しの自暴！」

冷静に自分を振り返ると、あまりの早さかきと死にたくなる。マスターズのガートルード・ペアードは、強固な腕でめしそうで見上げた。

アタラクシアには地下鉄が「路線ある、中央を縦に貫く南北線と、横に走る東西線、それと外周を一周する環状線である。今、無類とガートルードが乗っているのは、環状線である。時間表は夕方7時のアタラクシアワイド、車内は乗客半「四パーセント以上に乗っている。そんな満員の状態でありながら、二人は周りの乗客を気にすることなく会話をしていた。

「ガートルード、お前様、環状線とかあるの？」

「されたくはねえです。そもそも、環状とかされたことないんですが……でもそれって、女として魅力がねえって言われているみたいで、何となくムカつくんですよ。まあ、こういう機会に一度経験しておこうかって思ってますね」

「そっぽり無類とされたいんじゃないのか？」

「されたいわけがねえでしょうが！」

無類というか、無類だ、と無類は思ったが口には出さなかった。

「まあ、あれだ、せつかく車内も張り廻ってるんだし、環状線が成功するように決まってる」

彼の車内には普通の乗客が乗り合わせているし、駅にも停まる。しかし無類たちのいる車両だけはドアが開かずに、彼の車両と行き来も出来ない。除隊の指示で、この車両は今日一日アタラクシアの貸し切りとなっていた。

「そうですね……にしても、このエキストラは何なんですか？ 砂にリアルなんですが」

満員列車に乗り合わせている乗客たちは、無類たちの会話にまったく反応しない。ガートルードは気味悪そうに、その人々の顔を見回した。車内騒動であらうスミアを指す男性や、白衣を着た看護婦の女性、或いは同じアタラクシアの学生など、性別年代職業は様々だ。

「主に兵器の実用試験をする時に使われ、実験用のダミーで、実際にこういった兵器を使わせて、人体にどんな影響があるかのテストをするらしい。御おさんの話によれば、そのダミーを今回の実験用にダレッドアップしたものだそうだ」

「まあ、こういった人体を壊めても、それこそ銃が暴走しても平気ではやがりますからね」

「そういうことだ。体面や身体能力は基本的に人間と変わらない。それに、プログラム次第でどんな人間でも同じに分けることが可能らしいぞ」

「確かに人間そっくりでやがりますね……でも、それならLOVをR.O.M.を使っただ方が早いんじゃないですか？」

「ガートルードは、恐らく二十代の男性サラーマンという設定であらうダミーを見上げ、顔をしかめた。

「あ……それが、最近のVTRのV.M.の使い過ぎで、俺の方が慣れてきたらって効果が下がってるらしいんだ」

「慣れ……でやがりますか？」

「ああ、つまり、これは現実じゃなくて、頭のとこで認識してしまってるんだ。戦闘のシミュレーションでも、実際のつもりでやらないと成果が出ないだろう？ だから機械的な必要を、製造者やドヤドヤする要員ってものが急務らしい」

じつとしたり目でガートルードは言葉を詰め付けた。

「つまり慣れた必要はなくなるけど、俺達の目標はそういうことを繰り返してやがったってことですかね？」

「う……と、そこがだ。前編ヘッドマウントディスプレイを壊して、現実の空間で機械的な攻撃を行ったところ、凄いの成果が得られたらしい。なので、誰かさんが方針を変えて、LOVをR.O.M.を使わない方法を模索してらつてわけさ」

無論、前編は相手との戦いの具さもあるってことだった。しかし俺達は相手が進であつたのか、知るよしもない。でも、モブが安全なダミーに変わると同じじゃないですか？ これだってどうせ機械ですし、現実でないと言えれば言えなくもないですよ」

「ならば設定を変えろ」

車内の椅子広さを表している表示ペーパが、一斉に誰か別の顔と打ち込むテキストに変わった。

「おわっ！ 聞いてたんですか、誰かさん」

「ダミーが普通の人間と同じ反応をするように、設定を変更した。あんたを上げたに反応するし、機械行為に気付いたら動き立てる」

あごの手を逸して、俺達は考え込んだ。

「なるほど、それなら機械も出るかな……」

「更に言うなら、このダミーが知覚する情報はこちらのデータベースに記録される。二人の頭部ディスプレイがダミーに受け取れると、その情報が技術者の全アウラントに配信される。映像や音声はデータベースに保存され閲覧可能」

「なにしてやがるんですかああああああっ」

ガートルードが顔を真っ赤にして怒鳴った。

「機械を切る」

吊り広げは元の位置に戻った。

「ちょっと待ちやがれてください！ 冗談じゃねえです、そんなの——」

「え、待て、誰が言ってる、ガートルード」

「ダミーたちが遠慮だと言わなければならぬ、顔をしかめて喚び付けている。その真顔や仕草は一体一体バラバラで、動作を持った人間そのものだった。

「え？？？ す……すみません、です」

内線機をするように、ひそひそした声でガートルードは俺達にささやく。

「何だか、急に緊張感が変わりやがったですよ！ ダミーの皆さん」

「ああ、誰かさんが言っていたとおり、設定がよりリアルな反応をするように変わったんだ。それにこれからは俺たちが軍事の中でする行為が記録に残る。しかも技術者の目から監視だ……ダミーが認識すれば」

ガートルードの顔色が今度は青くなった。

「がっどわ……なんでこたえていやがります。え、俺達の目標、この方法はヤバイです。次の戦で軍事を降りましよう」

「いや……この車両は駅に着いても駅が動かない。それに、増員攻撃するまでは、この軍事から降りしてはくれないだろうな。あの人は本物だ」

俺達は誰しかアクションに対する時の厳しさ、実験にかけるケイの周縁を熱意を知っている。成功実験はともかく、真面目な実験結果を出すまでは決して待たないだろう。

「それに次の作戦のためには、俺と前編の準備が重要だ。おっけいやつと作戦が回復したんだ。その間みんなを待たせているし、これ以上俺たちがみんなの足を引っ張ることは出来ない」

「旦那……」

「やっていることは勘弁しているかも知れないが、全人類の運命が俺たちにかかっているんだ。やるしかない」

ガートルードの顔が燃えた。

「……わかりやした。こうなりや、あたしも覚悟を決めようってんですよ。かかってまやがれです」

丁度、駅に停まっていた電車が動き出した。車両が揺れて、ダミーの体重が二人にのしかかる。ダミーは人間と同じ重量を持っているので、押し返すことは難しい。出入り口近くに立っていた二人は、ドアに押し付けられる位好になった。

「……大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。えっと……」

ガートルードはドアに胸とお尻を押し付けられ身動きが取れない。だが、すぐに圧迫が弱くなった。不用意に腰を振り回すと、隔壁が胸をつつかみ押しのけようとして、腰に手を突いている。押し返せるダミーの重量を隔壁の背中が支え、ガートルードを守っていた。

「すまねえです……その、隔壁のひつ」

隔壁の右手がガートルードのお尻に触れた。ハノキリと音で同ずめでは無く、手の甲でお尻の弾力を察しむかのよう押し付ける。揺れに合わせて押し付けたら離れたらするので、故意か事故か判断が難しい。

「う……ひゃあッ」

今度は隔壁が姿勢を変えろのに合わせて、手の甲が移動した。それはお尻を腰で上げられるのと同じ刺激をガートルードに与えた。その瞬間に、口から妙な音が漏れる。

たちまち、あたりのダミーが怪訝な表情に変わり、二人の方を見つめてくる。隔壁はガートルードの耳元でささやく。

「しっ、静かだ。気付かれ……いや、運悪か」

「……もうっ、心の準備はもうんがあるですよ。いきなりは止めやがれて……んっ、ですう……」

ガートルードはひそひそ声で隔壁を責めた。しかし隔壁はその間に、今度は堂々と手の平でガートルードの小さな尻を握みしめた。

「ううう」

胸を叩みしめガートルードが唖る。慣れしようなまなざしに涙を流め、隔壁を睨んだ。

しかし隔壁には、その仕草が妙に可笑しく感じられる。

文句のまなざしは運悪で、隔壁はより積極的になった。短いスカートの裾をめくり、その中を手を入れようとした。意図を察したガートルードは、必死にその手首をつかんで防ごうとする。しかし後ろ手では思うようにはいかず、隔壁の指がままだにお尻を弄られる。

隔壁からは反発的にガートルードの下着を見ることが出来た。しかし指先の感触から、素材はコットンで肉質の大きめのパンツであることは分かった。そのパンツを引っ張り上げてやると、お尻の左右の山がむき出しになり、股間にまっく食い込み。

「……ん」

ガートルードがつま先立ちになら、無意識に刺激を少なくしようとしているのだろう。しかし、刺激なく隔壁はより強く引き上げる。

「ぐっ……あ」

ガートルードの口から切なげな吐息が漏れる。膝に立っている学生が、手に降っていた情報端末から目を離し、怪訝な視線をもちりと送る。それに気付いたガートルードは慌てて口を押さえる。そして、あああという音が胸に見えそうに股と隙を弄くした。

「大丈夫か？」

「え……う、うん」

白々しく裸になる隔壁に、ガートルードは引きつった顔容を返す。

「すみませんね、ちよつと体臭が臭くないで」

隔壁はダミーに向かって話す。するとダミーはまた興味を失ったように視線を手元の情報端末へ戻した。イレギュラーな反応がなくなったと判断し、隔壁のプログラムに戻ったのだろう。これでダミーの向こう側にいるはずの隔壁は、こちらの情報は伝わらなくなったはずだ。

「もう……白痴、調子に乗りますぞ」

「聞言ってるんだ。これから本番だろ？」

隔壁はドアに突いていた手を離し、ガートルードの胸を腰で回した。

「ちよ……ひ」

ガートルードの胸は限りなく平らで、シルヴィアよりも起伏に乏しかった。

「いま、胸がねえとか、悪いやがりましたね……」

「……正直と雖もそのどちらをとるか、わたいの選択を助けてくれ」

ガートルードは白喉の笑いを浮かべた。

「まあ、実際をいですからね。平らですよ。平順ですよ。結構でいやがりますよ。ホルスタインのようなユリシア先達の胸を踏み慣れた足には、固くもなんともないでしょうが……」

「いいか、落着いて……あ、すみませんね、皆さん。あははは」

胸がなわいのがコンプレックスなのか、周囲の注意を集めるのも気にせず吠えるガートルードに、偏屈は汗や汁をかいた。

「要領、まだ胸の大きさを気にする位でもないだろうが、お前は未知の可能性を秘めているのだ……って、今はそんなことを気にしてる場合じゃない。気にすべきは……」

偏屈は頸座の上から、ガートルードの胸の先端を握り握ると、喉先で強くつまんだ。

「ひび……びび……」

ガートルードの体が、びくんと跳ねた。

「あ、なにすんですっ……だから、まわったって胸なんてねえんですから、離してくださいよう。どうせなら、他のところまで……」

「いいか、今重要なのは胸の大きさにゃない。お前が感ずるかどうかが、お前が胸をさわられて気持ちいいなら、触れる価値がある。だが、不快感しかないのなら、離はさわない」

「偏屈……」

「それに、俺がさわって楽しいかどうかなんて、相手の感情は二の次だ。俺はガートルードが俺の手で感じてもらえるのが嬉しい。胸をさわってお前が気持ちよくなるなら、俺はお前の胸をさわるのが嬉しい」

ガートルードの胸が震えて揺れる。そして、その中に震かに光の粒子が散り始めた。

「……白状するとですね……本当に、俺が気持ちいいです。だから……あう！」

偏屈の手が胸を離さ、ガートルードの胸を優しく愛撫する。

「びび……うて、く」

ガートルードは声を殺し、快感に溺れている。

偏屈や手の平で覚える感覚はささやかだが、だがガートルードの体は、偏屈のおずかな指先の動きと密着し、敏感に反応する。

「小さいかも知れないけど、感覚が凄く良いな。こんな感覚に届いなんて……子供っぽい体型のくせに、凄くいやらしい様なんだな」

指先でささやく声に、ガートルードの特殊をぞくぞくしたものが走り回れる。

「い、いやらしくなんて……ねえです」

「それにや、直感でわかってみようか？」

偏屈の手が制服の肩を握き、はだけさせようとした、その時――





「まっ！ まずいですっ！」

思わずガートルードが鋭い声を上げた。幸いその声は電車がホームに入ってゆく音にかき消された。駅の外が急に明るくなり、電車が速度を落とす。

「駅か……でも、降り切りだからドアは開かないし、一般の乗客も入ってこないぞ」

「でも、見られるから！ ドアから見られるし！ だめです、今は！」

確かにホームには電車を待つ乗客が大部分いる。特にここは学校が近い駅なので通学途中の学生が多い。他には、仕事で移動するアタラシアの事務員や客員などもいる。一瞬に、やつと来たかという顔で電車を避えている。確かにドアのガラスから見えだもんだ。頭蓋って普通の顔をしてるぞ？」

「え？ それって、どういう……」

ガートルードが膝を不意に曲げ顔を引くつらせ、後ろを振り返る。しかし後部の顔を見る前に、今までは窓元の強烈な快感が体を突き抜けた。

「ひっ……」

叫ぶのと同時に、彼の車両ではドアが開き、乗客の乗り降りが始まる。ホームではアナウンスが響き響いた。ガートルードは股の間に感じる強烈な快感に、目の前がぐらぐらした。後部の右手が、まだ成長しきっていない細い体を除くようにして、前からスカートの中にもぐり込んでいた。そしてパンツの上から一番膨らんだ部分を握り回している。しかも、左手はお尻をつかんで、やわやわと揉み込んでくる。

「ま、前と後ろを同時に、だなんて……キャッすぎですわ、旦那！」

その口に出すことも出来ず、口を聞いて最終に快感を喰ひ込む。顔が熱い。頭もぼーっとしてくる。下半身に感じる刺激が、腰を回路を回り取ってゆく。

後部の右手は、開いた足の間に運送なく入り込み、指先を輪えた形で刺激を逃さずくも。小刻みに揺らす刺激が運送のように足を開けさせる。

「あ……ん……はあ……」

思わず体を揺れてしまいそうな快感に震われながらも、必死で声を咽んでいた。

「なあ、いいのか？ バレちゃうぞ？」

「へ？ ちゃんと声は抑えて……」

「それはそうだが、その顔じゃ一目瞭然だぞ？」

「なんのこと……」

ふと、ガラスに映った自分の顔に気が付いた。

決然と逃げきった女の顔だった。頬は赤く上気し、半分閉じられた唇を確に唇を光を滲せている。だらしない

く開いた口元からよだれが流れ、その身に与えられている快楽を表情で表していた。

そんな顔をしている自分に、衝撃を受けた。そして、ドアの向こうからその顔を凝視している人たちがいる事実を心臓が伝えているように感じた。

「……」

ガートルードは反射的に顔を伏せた。

「……」

「……」

「心配するな。前に考えた事をして、知らしない顔をしていただけだと思っている。それより、急に顔を伏せたりするのはいらない。顔を上げて、普通にしろよ」

ガートルードは恐る恐る顔を上げる。

ホームに最前で行く人は、貸し切り車両だと気付いて他の車両へ移動していた。今は停車した人たちが出口へ向かって歩いていくだけで、こちらに視線を送る人もいない。それでも、あまりに様子がおかしければ気付かれるだろう。

「ん……」

顔が、がくんと落ちそうになった。耳に手を置き、何とか持ちこたえる。

でも、これなら向うと睨み合える。そう思った矢先、隔壁の音めはより強烈になった。顔を前進する指は一本だけになり、涙に包まれて深く息を吸い込んでいく。

「……ん……」

留めて普通の顔をしように心がける。しかし、それに反して下半身がどんどん熱を持ってきた。己の意思を無視し、体が勝手に快感を求め始める。

その時ホームに停車のベルが鳴り響いた。

「あはう！ んんっ、はああん！」

その音に揺られ、我慢を突破した快感が口から漏れ出るとして飛び出した。

あふれた快感を止めるように、壁で口を両手で押さえる。固く口をつぶり、必死に声を押し殺した。我慢のあまり、体が痙攣するように震えてくる。

さらにガートルードを凝視するかのようになり、隔壁の顔は補助の溝を指さす音聞を責め立てた。

ガートルードの意識が朦朧になりかけた。その瞬間、黄色く光る粒子が体から生み出される。涙を顔の隅に、車内に散らばる光の粒が映った。

「よし、突破は成功だ。あともう一度だ」

もう隔壁に力が入らない。これ以上なんて補助の溝。そうガートルードは思った。

自分でも、足が震えて体が揺れ動いているのを感じ、ひよっとしたら、足下に水たまりが出来ているかも知れない。

「……」

耳元でささやく声が、お腹の下へ響き渡る。

「……」

自分でも腹にさくくらい甘い音がした。

正直に言えば、もう、どうでも良かった。両手を固く握っているが、意識も失われて、補助の溝の中に見られたっている。その代わり、この快感の先にあるものを教えて欲しい。そんな気持ちの高ぶりを抑えられなかった。

隔壁の顔が下着の中へ入ってきた。そして自分の中からあふれ出る蜜を生み出している場所、また固くひたたりと閉ざされた扉を叩けにかかると。

「……」

軍事の命令に動いてはいるが、隔壁の指が自分の大事なところをかき回せる音が聞こえるのがした。

軍事はホームを出て、地下を走っている。ドアに体を押し付け、外を流れるデジタルサイネージの光を見つめた。隙の中を流れてゆく色とりどりの光の帯は美しく、どこか別の世界へ行ってしまうような気持ちになった。

そのとき、隔壁が自分の体の部分へ分け入ってきた。

おどかして接触したことのない感覚が全身を襲った。

恐らくそれは快感だったのだろう。しかしそれは、自分の精神の許容範囲を遥かに超え、意識を動いた世界へと連れて行くとした。

流れ行く意識の中、青色とピンク色の光が視界を埋めてゆく。二色の光の粒子が混ざり合う様子は、今まで見たどの景色よりも美しかった。光のダンスをうつつと眺めながら、川に流されるように意識が流れてゆく。

「……」

「……」

「……」

# 強敵再会

「ケイ、信州とガートルードの結核感染の結果は確認できたか？」

「ナユタラゴの中央官署で、最終検査は済ませ、おまけにミスターを見つけていた。結局軍事での結核感染が成功した。ナユタラゴの支那施設で結核のエロス、ガートルードのシダラの性質が解明が実施された。ついには、全滅計画は完了し、現在はそのデータの分析を行っているところだった。」

「結核感染とわりの結果が得られた。シダラの結核の破壊力は十パーセントアップ。エロスの各スベックも、ガートルードのシダラと同等にアップしている。エロスによる結核の破壊にも成功。こちらの破壊力もシダラと同等。」

「そうか、それなら、まずは一安心といったところか？」

「信州とは要領が、信州はどうか不満そうだった。」

「——コアの適性と信州との相性ということであれば、この私の方が……」

「どうかした？ 信州」

「いや……大抵、信州の連中との結核感染に比べると、スベック的な大きさを示していると聞かされた。」

「それは仕方ない。ロス・シリーズに比べると、そもそもそのコアのスベックが違ふ。」

「私がロス・シリーズのコアをインストールしたら……しるをさ。」

「ケイは確かに聞いたような目をして、信州を見つめた。」

「……載れ言え、忘れてくれ」

信州は言葉をそれとなく、部隊の陣に置きつつ放しにしている。金庫のようなコアの保存ケースを見つめた。かつてはタロスのコアが入っていたケースだが、タロスのコアは、シルヴィアの体の中にインストールされ、今ではケースの中身は空っぽだった。

アタラシアには、もう手紙のコアはない。頼みの頼み信則とガートルードだけだ。今はこの二つのハート・ハイブリッド・ギアを頼りにして使い、勝つか、それだけ歩えねばならない。それは分かっている。それでも無理を考へてしまうのだ。

——コアさえあれば、自分も戦えるのだ。

そのとき、中央管理室の扉が開き、実験室から信則とガートルードが出てきた。

「姉ちゃん、誰かさん。試験の結果は？」

二人はバイロッド・スライツのまま部屋に入ってくる。前に浮かぶアロ・ティンダウインドウを眺め回し、自分のデータが表示されていないか探した。

見上げるウインドウが、タイがキーボードで打ち込む文字が流れるように表示される。

「予定通りの結果が得られた。これで、次の作戦が実行できる」

信則は思わず拳を握りしめた。

「そうか……これでもう一度行ける！」

——異世界へ。

「待っているよ。みんな……それと、警告」

そんな言葉を、ガートルードは不安げに見上げる。

「でも信則、いくら何でも、あたしたち二人で戦い込みつてのは、無理すぎやしませんかね？ いえ、決して無理に成りかねたってわけじゃないですが」

心配するなつて、何を前向きってテンカを流しに行こうってわけじゃない。ちゃんと作戦を考えてある」

信則はガートルードに微笑みかけ、その笑顔を見ていると、不思議と不安が消えていく自分が、ガートルードは驚いた。

「なんか……最近、目覚めが早くなったよ」

「ん？ いや、別に変わったところはないと思うが」

なんだが、初めて会ったときと最近では、無数の変化がある。

異世界から戻ってきて、特に記憶喪失のクレイダ、エルマとの戦いを経てから、身になんか空気が違う。やけに頼もしいというか、頼り心がある気がする。

信則はない。

ただ、そう感じてしまうのだ。だからこそ、神田信則にも彼等を感じなかった。むしろ、隠しきつらあった。決して、声に出しては言えないが。

「……なんか、もともと腹が立ちやがりますね。測りに乗るんじゃないですか」

「？ どうしたんだ。さっきからおかしいぞ」

「おかしいのは信則ですよ。これから異世界へ行って、マスターズや天城や神の皆さんを救済するのが目的じゃないですか。どうやっても、戦いは避けられねえです」

信則が答えるよりも先に、信則が口を開いた。

「最終的にはそうなるだろうな。だが、まずは敵を知る必要がある」

信則は髪の手を揺らぐと、コンソールのタッチパネルを触っていた。すると、エロスのシステムが自動起動していた。バトラン・タイスの記録、ゼル・タイスの動きが映し出される。

「ロンドンの衝突点から突入するにしても、向こう側がどうなっているかを把握しておきたい。現在の我々が知り得ている情報は、信則が破壊となつているときに目撃したものが全てだ。最終的にゼル・タイスの大まかな進路と、天城や神やマスターズが捕らえられている場所をつかんでおく必要がある。つまり次の任務は、衝突点から必死に、敵の首領を捕獲することだ」

「信則の首領に捕れば、天城や神やマスターズのメンバーは、城内の牢獄に閉じ込められていると思われ。しかし信則が脱出したことで、状況を変えている可能性もある。それらを踏まえた上で、衝突点から救出先までのルート、敵の要路の戦場と場所、迷入手帳、侵入経路と、訓練といった情報を入手することが必要」

その作戦に、信則は賛成はなかった。だが、不安要素はまだまだある。

「信則任務はいいけど、俺はどうすればいい？ 異世界には男がいなんだ。俺が街中を歩いていたら、その瞬間に襲撃されて、それについて何か対策が必要だ」

「信則さん」

やけに力強いタイの文字が表示された。いつもよりもファントの大きさが二倍はある気がした。

「え？ ああ、何かあるのか？」

今度は信則が、どこをなくそれをおしを様子で答える。

「え、まあ……この件については、心配いらん。少し手間を取らせるが」

「どうしたんだ？ 気のせいかな……おれさうだな」

「バカなことを言うな。そんなことはないぞ」

「結局は顔を洗ひした」

——絶対嘘だ。

顔がにやけてゐるし、やけに落ち着きがない。一体、何を言っているんだ……？

「じやあ、もう一つの不安要素。魔刀の不足だ。ガートルードが回復して、魔道流剣が可能になったと計っても、ロス・シリーズとはいへんがさう。また御神降のクラスの剣が現れたら、前同様にように撃退出来るとは限らない。それだ……」

「魔刀の目つきが鋭くなる。」

「もし本当に堂々が俺たちの敵となつて現れたら……ゼロスの『魔刀解凍』の術では、どんな魔力も武器も役に立たない」

「確かにそうだが、特に愛憎に対しては、現在では対処手段がない。唯一とれる手段は、出来る限り直接対決を繰り返すこと。それしかない」

「そニターに無人機が監視したロンドンの機手が表露された。そこでは、聖堂長司継承が起きる前と同じような生活を送っている人々の姿が映し出されている」

「東京と同じように、ロンドン全境が魔力フラントに充ちている。ただ東京と違い、『魔障』などの大規模は配属されていない。その代わり魔障兵器の数は多い。それも魔力が小型の魔障兵器が多く配属されている」

「最早、我々は恐るるに足らない、ということだ」

「あ、しやうに情状がつぶやいた」

「ロンドンに動き動くことは当然だ。しかと行けば、魔障兵器にすぐに対応出来る。すると敵が多いだけに、今今の情状とガートルードであれば、魔障兵器にやられることはないが、一気に覆ねらすことも難しい。その時に、魔障兵器が現れたら対処が難しくなる。俺に気が付かずとちやうと魔障兵器を『魔障面』へ送らなければならぬ」

「俺は思ひついたように手を上げた」

「ちよつと相談なんだが……俺たちには頼もしい魔障兵器があるんだが、そのつらの力を借りようっていうのはどうか」

な？「話に載つてもうらうために、ちよつとは魔障兵器を断つてもうらう必要があるんだけど」

「魔障？ それは誰のこと？」

「俺もさつき知らなかつたばかりだ。な？ ガートルード」

「突然話を振られても、ガートルードには何のことやらさっぱり分からなかつた」

「はあ？……何を言っているやがらんですか？ 魔障の目撃は……」



ロンドンは静かな秋の日を迎えていた

人々は、いつもの通りの生活を送っている。魔障兵器でもあるロンドンには、今日も多くの人々が訪れ、人々はロンドンで、パキスタンやインドなど多様な文化を訪ねては、魔障兵器を、目を向かせている。今日も、昨日も、そのすつとと前から。

ロンドンに建設された魔力フラントは、東京での実験結果を反映させた物だ。東京では山手線の路線を利用して、物理的な境界を作っていたが、ここロンドンではそれも必要ない。目撃証人結界がロンドン全境を取り囲み、人々の心を拘束していた。出て行くと息を吐いて行ける。だが洗脳装置の人々は、この道から離れる、という発想そのものを奪われていた。

そして、街の隅隅には魔障兵器が並び、ロンドンへの侵入を断んでいた。

たまたま訪れていた観光客は、一度と自分の国に帰ることは出来ず、新たに訪れる観光客も、またいない。

だが、この日は別だった。

魔障兵器の半壊は、新たな訪客者がやってくるようとしていた。

魔力フラントの外側にある街は破壊され、魔障兵器が壊れている。レンガと砂がたまった鉄筋交じりのコンタクトが壊れ、めくれた瓦礫だ。その中、魔障兵器「制御装置」が行んでいて、魔障兵器、そのほかにある緑の広間地帯、そして壊れた空を長い間見つめ続けてきた。巨大な魔障兵器のように身動き一つしなかつたアルバトロスが、手に持った銃を久々に空に向け。

空の彼方から魔障兵器を、あの空を引く飛んでくる物影がある。ロケット、或いはミサイル。ロンドンの魔力

ブラントを外敵から守っているアルバトロスはそう判断した。

鉄鎧を脱いで、飛来する物体を鋭く撃つ。

目撃した光と激しい衝撃音と共に、鉄鎧から煙が噴き出された。

弾丸は飛行物体を命中し、大爆発を起した。煙を上げ、大まな三つの破片に分かれ、ロンドン市内へと落下してゆく。

「仕留めた。そう判断したアルバトロスは、落下する破片を見送した。カプセル形の破片は黒煙を吐きながらアルバトロスの頭上を通過し、バフカンガム官邸前の公園へ落ちていった。だがその破片は、落下する前四方から勢いよく炎を噴き出した。

そのカプセルは、中距離弾道式機関銃のLOVERROOMは、赤外線と赤外線誘導を行い、水平に着陸した。

「目標！ 無事に着陸しやりました！」

「よし、作戦開始だ！ ガートルード！」

「了解です！ さあ、勝手にいって下さい！」

LOVERROOMのヘッパが動き、中から黒とピンク色の装甲と、ガンメタリタと黒色の装甲が飛び出してゆく。

二体の装甲は鋭利な手さみの通まで公園を突っ切ると、大通りへと出た。

「どうだ、ガートルード！」

「問題ねえです。簡単ですよ！ これなら敵軍まで通してしまつてやつです！」

敵軍はロンドン橋とタワーブリッジの向こう側である。この調子なら十分精度で襲撃できる。

だが、現場に気が付いたアルバトロスは、上空から追いかけて来た。しかし街中を走るのは人間サイズの侵入者である。アルバトロスの武装では、両側の衝も威力ブラントのエネルギー弾である人間もまとめて吹き飛ばしてしまふ。

手を出しあぐねているアルバトロスに代わって、小型の機銃部隊「機銃部隊」が街中を駆け回ってくる。身長は二メートル程度で機銃部隊の中では機銃部隊の者、いわば兵隊のような存在だ。しかし、治安維持や犯人逮捕など、このサイズならではの使い道がある。そのブリガンドが侵入者を捕らえるべく、ブランドシロップの東へ動きまわって来た。

「通つてきやがりましたよ！」

「ああ、想定内の侵入だ！」

二体の侵入者は路地を通過して、トラファルガー広場のある大通りへ出た。あとはタワーブリッジまで、ほとんど一直線に走るだけである。

走るピッチを上げ、さらに加速——その瞬間、角から突然ブリガンドが姿を現した。侵入者に向かって、カウンスル気味に機銃の腕を突き付ける。その機銃は侵入者の腕を破壊し、体が逆上りをするように回転した。両足大きく跳ね上がった体は、頭から地面に衝突する。

ブリガンドの一撃と落下の衝撃で、首が引きちぎられた。

首が地面を転がってゆく。道路の縁石に当たり、首が止まった。ブリガンドはゆっくり歩いて行く、その首を拾い上げる。

人間の首ではなかった。

ブリガンドは、不思議そうに倒れた体とちぎれた首を互に見つめた。とにかく侵入者は排除した。これで道路は静かになる。そう判断した瞬間、また別の侵入者が腕を駆け抜けていった。

彼とは侵入者は向を向がり、今度は先頭の侵入者とは別の方向、大英博物館の方へと走ってゆく。急襲しようとしたところ、また別の侵入者がやって来て、今度はビッグ・ベンの方向に向かって走り去ってゆく。

町中のブリガンドが、おぼろげに始めた。今やロンドン中を、十数体の侵入者が機銃部隊に駆け廻っている。

「エキストラのダミーのみをさん、大急ぎでいやります！ 機銃部隊もイイ感じで監視していやりますよ、旦那！」

侵入者の正体は、アタラクシアで兵器の運用訓練などに使用される、実験用のダミーだ。

偵察とガートルードの砲台改装に使われたエキストラである。

「よし！ 機を立ち行くぞ！」

テムズ川の水面上に盛り上がり、大爆発を流れる川には揺つかわくもない、黒煙を火花が空を現した。水面を割って、黒光りする鋭い船体がその半身を浮上らせる。

——潜水艦

アタラクシアから出撃した小型の潜水艦は、川をさかのぼりここまでやって来ていた。LOVERROOMのMでダミーを送り込み、機銃部隊を監視したのは機銃のためだ。

その作戦は成功し、もはや衝突面は日と夜の光だった。  
タワーブリッジの向こう側に出現した、縦横整齊なメーテルにもなる、薄く整光する四角形。それが異世界との接点、衝突面だ。

潜水艦がタワーブリッジの下をくぐると、甲板にあるハッチが開き、中から偏照とガートルードが姿を現した。  
「衝突面まで、わずかに三百メートル」行くぞ、エロス」  
甲板に立つた偏照をビンタ色の輝きが包む。光の輪は偏照の体に張り付くように集まり、密度を上げると光り輝く装甲へと結晶し、物質化する。ビンタの光が消えると、その下から露れたような黒光りする装甲が現れた。美しい光沢を持つ黒い装甲を、ビンタの色をしを動力の発光が偏照する。偏照のハート・ハイブリッド・ギア「エロス」の輝きだ。

「了解です！ シンダラー」

ガートルードもこのコアの名を呼び、ハート・ハイブリッド・ギア「シンダラー」を着装した。ネコ……のようなヘアドカット。ガンメタリックの装甲に黄色い光が流れ、太ももの左右に「粒子銃」を構えている。小型の翼のような背後ユニットで、翼には翼を倒した形のジグザグレターが着装された。

ロンドンの衝突面の前に立つ二種のハート・ハイブリッド・ギアは、スラスターから光の粒子を放つと、潜水艦の甲板から飛び上がった。地球改変の機された両翼は、遠くよりも遙かに高い「衝突面」で加速すると、一気に衝突面へと突入。

そして、地球上から姿を消した。

「偏照、ガートルード両名の存在消滅。衝突面への突入に成功したと想われる」

ロンドンから数キロ離れた海上にいたアタラクシアでは、二人の記録を消失した。  
タイの報告を説いて、偏照は胸を痛んだ。

「後は二人を倒して待つだけだぞ……」

偏照の視線の先には、ロンドンの衝突面の映像が映っている。

偏照とガートルードは、今まさにその中を移動していた。衝突面の中は、巨大なトンネルだった。その中を、色も形も異なる様々な光が行き交っている。それは地球と異世界を行き交する河川のエネルギーなのだろうか。それもやがて、彼方から強い光が近づいてくる。

——出口だ。

その光はトンネルの中を駆け巡り、ときに色々な方向で偏照や立体に姿を変え、飛んで行く。  
とても美しく、非現実的な、不思議な光輝だった。

「……ここが、異世界でいやりですか」

衝突面から出た二人は、荒野の岩場に身を置いた。ガートルードは岩の隙から興味津々で通りをきろきろと見回している。

「周りと深いですね……ロンドンも狭かったですね、私をここに導いてですね」

「そうだな。前に来たときも、こんな感じだった。季節はあまりないのかも知れない」

「だって、自然。何ですか、あの空は？」

見上げると、偏照の空に偏照が入っている。それは何とも奇妙な光のだった。壁にヒビが入るように、空が割れている。その隙間から覗くのは遠くの世界だ。

「これが何の天幕地獄ってやつだな。今は気にしてもしょうがない。それよりも……」

偏照は、荒野の光にある黒い城壁を見つめた。高さ三百メートルもある巨大な壁が、延々と続いている。奇麗でルチウスはあの中にある。

「壁には聞いてましたが、すぐと城壁でいやりですね……」

「ああ、まずはあの中にどうやって——」

その時、偏照たちの頭上を巨大な飛船が次々と通り過ぎていった。飛船は彼方にも、偏照たちが出て来た衝突面へ姿を消してゆく。

「どうやら、ロンドンでの騒ぎを聞きつけて聞かけやがるようですね」

「ああ、その分、こつちの守りが手薄になる。大成功だな」

顔をほころばせる偏照に、ガートルードは険しい表情で答げる。  
「でも、これから最大の難関が待ち構えていやりがるです」

「ああ……そうだったな」

ガートルードは持負つていたバックパックを下ろすと、中からチューブや紙を取り出した。

「旧暦の人生に消えない傷を残すことになるかも知れぬです」

ガートルードは真実なまなざしを無言の向けた。その眼がざらりと光る。

「真実は出来てやがりますか？ 旧暦」

「無言の喉が、どくどくと鳴った」

「……ああ。この作戦を決定したときから、覚悟は出来ている。悪い切つてやってくれ！」



ゼルティスを守る三重の城壁。その最外側の門は明け放たれていた。

その門を、大きな荷物を背負つた大勢の人たちがぐくぐと抜けて行く。

「静寂はゆっくりと来い！ 走ったり騒いだりすることは厳禁だ！ もう安心だから。怯てる必要はないぞ！」

門の両側に立つ衛兵たちが声を上げる。その声が聞こえているのか、いないのか。足を引きずるようにして、続れた人たちが城壁に附いた。それとトンネルを遡る行く。

衛兵に多く荷物を積み、力を合せて引いている人、ゴロゴロの車の両方にひき合せて走っている人たちが、それぞれ歩み、身なりも違う。しかし同じなのは、疲労困憊した顔と汚れた着、そして道路を捨てざるを得なかった、その理由である。

城壁の扉は閉鎖不全が引き起こしている大規模災害。

城壁や半ばつ、砂漠化や津波など、様々な大規模災害により住む場所を失った人たちが、荒野を渡つてやってくる。

緊急事態であり、やって来る大勢の避難民一人一人の事情を確認するのは不可能だった。城壁の外では、救いを求めてやって来た人たちが難民キャンプを作り、城壁の中へ入れるかどうかの審判を持つ間、疲労が限界を超え死にする例が増加の一途を辿った。パトランティス市(同義語)アイネス・シタラヴィアは現状を憂い、一番外側の第二城壁を開通することにしたのだった。

「旧暦、思つたより簡単に城壁の中へ入れましたね」

アード付きのマントを羽織つたガートルードは、ゼルティス市民と見分けがつかなかった。アードを巻いて洗く緋、露骨に露しにくい程度に顔を見している。腰までの短いマントは体を隠す反面、逆にその下は露出度が高めだ。平らな胸にバンドを巻くようにしたトップスに、ローライズのカットパンツ。この服は作戦開始前にアタラクシアで作った物だ。城壁なら自立して仕方のない針が、無闇が持も壊れた城壁から異世界の調査を研究したところ、非常に露出度の高い衣装が好まれているということが分かった。実際に映つていた服を鑑賞し、一番無難なデザインを選定して、職人用の衣装を仕立てたのだ。

「そうだな。避難民に紛れることが出来たのは幸いだったね——しかし、ここの世界もかなり混乱しているな」

発言が言っていた、パトランティスも危機に瀕している、というのとは真逆のことらしい。それもかなり差し違つた誤解だ。

無言は城壁を通過するときに陣を歩いていた人々の姿を思い出した。ゴロゴロになった腹、解と疲労でやせ細った体。中にはまだ小学校にも上がっていないような幼い少女もいて、母親らしき人に手を引かれて歩いて行く。散々泣いたのだから、濡れた顔に涙の跡がぐくぐりと残っている。だが今では全く気力を失ったのか、涙を流す目からは涙すら出てこない。

おかげで無言たちは言葉でゼルティスへの潜入に成功した。しかし、潜人をしている「緊急事態」下で、やるせない気持ちも心の中心を支配していた。無言とはいふ、一般市民がこれだけ苦しんでいる姿を目の当たりにしては、良い気分ではない。無言の言っていた避難民の現実が、言葉を伴って無言の心に闇い影を落としていた。

「……にしても、マズね」

ガートルードは無言をじつと見つめると、にへちと笑った。

「同だよ、その笑いは」

「いえ、彼らが余心の出来てやつてすかね。やつぱり素材が良かったつてのもありますが」

異世界には女性しかない。だから、無言が潜人調査をすること自体、無理があるのだ。この作戦を検討していたとき、無言が真っ先に不安を感じたのだ。

しかし、城壁を抜け、ゼルティス市内を歩いている現状まで、まだ誰も無言を怪しむ者はいない。なぜなら――



「いやあ！とつても可愛いでやがりますよ。ムカつくくらいだ」

「……うんせえ、その事にはそれ以下触れるな」

ガートルードの顔を歩いている長身の美少女が怒容をした。長い髪に顔の目つきが印象的だった。ガートルードと同じように異世界風のマントを纏わり、体は露出度こそ高くないものの、体のラインがしっかり出るジャンプスーツを身につけている。

「淫靡な話をしていて、性しまれるのもマズいした」

美しいピンクの唇。しかし、そこから出て来たのは、淫靡の声だ。

「ちょ、此舉！　まずいっすー」

ガートルードはマントの下から出したスプリーを、隠して少女の顔に吹き付けろ。

「げほっ、おい、いきなり吹きかけんをよ」

スプリーを吸い込んだ瞬間、再び可愛らしい少女の声を発した。

「はあ……ちゃんと女声になりやがりました。日頃こそ注意してくださいよ。それより人の会話をなんて通も気にも障りませんが、その声はヤバいです」

「……わかったよ」

別人のような声に変わった無類は、ガートルードと並んで再び歩き出した。

ガートルードのメイクと、アタラクシア技術師開発の体着補整スーツのおかげで、無類は見事に女性に仕立てられていた。

早い話が、女装である。女の子である。いや、男の娘である。

無類は深い溜息を吐いた。

「……こんな夜、天降神女神のメンバーに絶対見せられねえな」

苦悩のつぶやきに對して、ガートルードはあつちと脅かす。

「そうですか？　高ぶる息いがすがね」

「その感覚が分からん、なぜそう思う」

「いや、だって、旦那のとなりの種痘會、お姉さんも喜んでたじゃないですか」

無類の前向きな声に返した。

作戦を断絶する前に、アタラクシアでリハーサルが行われた。その時に初めて生演をし、ロングヘアのカツラを被せられた。そして衣装を変化させる液体を喉に嚥下し、女性らしい声に変化することを確認。更には、技術師が調剤技術に開発した透過用スーツを無類専用の仕立て直された。ウエストを絞るところは締め上げ、胸や腰をゆるめるべきところは四圍にシリコンジェルが入っている。

全てが完了したとき、鏡の中には自分ではなく、除夜の妹と言われれば誤解しそうな美少女がいた。

最新機材を使用した足事な衣装は、無類自身も驚いたものだ。

そして、姉とタイのあんな楽しそうなお姿を見るのは初めてだった。

「二人ともいそいそとカマフラまで持ち出して、ちよつとした撮影会でやがりましたからねえ。まあ、あたしも高橋が出席するくらい旦那の写真を撮らせてもらったんで……これでは平気には困らねえです」

「ちよつと待て。今聞き捨てならんことを言わなかつたか」

「いやー順立ちが誤ってるんですね。聴聞會と違ふと、まるで姉妹のようでしたよ」

「おい」

「でも、記念写真もこの通り」

ガートルードは、スマートフォン型の情報端末を、マントの端からちらりと見せた。情報と女装の補整のフィッシュボット写真が、しっかりと壁紙に設定されている。

「今すぐ消せ」

伸ばした無類の手をすりよとかわし、ガートルードは情報端末をマントの中へしまった。

「さあさ、とつと仕事をしちまいまししょう。まずは帰國の作成と、ターゲットの居場所の確認ですね」

そう言って、まるで知った術を行くかのようにすすめたお姉さん。

「こそ……覚えてるよ、どいつもこいつも」

隠った事を露わしながら、無類はガートルードの後を追った。

「まずは城へ行ってみるか」

無類は巨大な柱とその足元にある壁を見上げた。城も前より大きいはずだが、柱が巨大なので、相対的に小さく見える。

二人は無類の御託をランドマークに、大通りを歩いて行く。ここは、無類が初めて異世界へ迷行されて来たとき、



「あれが町役カトリックか。」

様々な想像が膨らんで行く。ポスターが前掲です、現像を地面に落としたまま、壁まで滑んだ。何ともうな想像もて顔を上げる。

「……あ」

文字は読めないが、金付帳が算直付きで開かれていた。そこには、天竺妙女神の顔も、マスターズの顔も載っている。

「良かった……説話は載まっていない」

「旦那、まだないならないでもらえませんかー けくれたらどうしてくれやがるんですかー」

ガートルードも人混みの中を泳ぐようにしてやって来ると、偏見が見つめているポスターを見上げた。

「ああ……そういうことですか」

偏見が顔色を変えた瞬間を、ガートルードも察した。

「まあ、今日は説話がなくてだけですけど」

偏見が黙って笑んだ。なんてことは……そんなことあるか！ バカなことを考えるな！

偏見の考えを振り払うように、偏見は顔を振った。

「……で、これからどうしやすうか？」

「そうだな……このまま進んで、反逆者の街を襲に行ってみよう」

「了解です」

偏見がもう一度ポスターを見上げた。その中に一人だけ、知っている顔があった。

青く長い髪、美しい少女。しかしその顔に大きな傷痕がある。

偏見が、あいつは聖騎士団の一人、ルノーと云う奴だ、聖騎士団は既に、タレイダとエルマの二人を倒している。

「残るは二人、このルノーと、赤い髪のアムズだ」

タレイダとエルマは強かった。思ひ、こいつも一撃倒しやいかないはずだ、聖騎士でも地味の高くないのが、

なぜコロサオの試合に臨陣するのかわからない。しかし、相手の真顔があるからこの聖騎士なのだろう。

「どうかしやがりましたか？」

「いや、何でもない……行こう」

いずれ奴とも戦うことになるかも知れない。そんなことを考えながら、偏見はガートルードと並んで、コロサオを後にした。

来た方向とは逆の道を歩くと、そこはまた別の零戦隊を待つ所だった。

「これは、何だ？」

街の中心部巨大な噴霧が走っていた。

「地割れですかね？ どう見ても、元々あったように見えますが」

これも、バトランテイスで起きているという大変地獄の現象なのだろうか？

偏見はそう考えたが、確認する手段もない。立ち入り禁止の標がめくられた箱を避くから、彼や、彼等の方へは向かった。

先ほどの道と比べると路地が入り組んでいて、小さな店が多い。街角から長い匂いが漂ってくる。その匂いに誘われ、

肉を煮詰めておくと、豚汁のような小さな店があった。

「うわ、何ですか？ ありやあ」

タバコのように丸煙きした肉を煮詰めて売っているようだが、その肉には足が六本あり、大きな尻尾で天井から吊られている。

「この世界特有の生き物らしいな。見た目はアレだが……食欲をそそる匂いだな」

表面がぱりりと焼けて、中からは肉汁が溢れ出して煮上げていく。匂ってしまえば嗜好は分からないので、それほど気にならない。食べた瞬間に驚かれたが、残念ながらこの世界の通貨をど貯っていた。偏見は騒ぐ

間を待たず、通り過ぎることにした。

しかしその先にも、食卓の屋敷が続いている。隣では湯め料理を売っていて、これもまた独特の香辛料を六人

だ、たまらない香りを漂わせている。

「これが世界の街……なのかな」

偏見になつていたときは、あまり街中を見ることが出来なかった。だから見るもの聞くものが少ない。女性しか

いないことを除けば、まるで外国旅行へ来たような気分だった。

「旦那、何やら、面白い人ばかりでいやがりますよ」

ガートルードが驚きす方向に、大勢の人たちが集まっていた。街の中心部にあたる広場のようだが、ほとんど人

いずれ奴とも戦うことになるかも知れない。そんなことを考えながら、偏見はガートルードと並んで、コロサオを後にした。

で増まってしまった。

「ああ……何の騒ぎだ？」

興味をそそられたが、野次郎が何處にも取り附んでいないので、その中で何が行われているのかがよく分からない。聞かせるのも、ききやきやという騒声ばかりだ。その内、紙出器を渡つたような大きな音が響いた。

「これから『バトランティス街歩き』の撮影を開始します！ お静かにお願いします」

やけに緊張感を帯びた内容だった。

「どうやら、バラエティ番組の撮影をしているっぽいですね」

「本当に彼たちの世界と交わらないなーじやああの人はかなりは、番組に出演する芸能人目的の野次郎、もしくは是のっかけてくるか」

「こつちの世界のストーリーってのは、どんなアラしていやがるんですかね？ ちょっと覗いてやりませんか」

ガートルードはびよん跳びはねて人垣の向こうを覗こうとするが、まったく無駄だった。見えるのは見物客の頭ばかりで、路肩から覗こうと動いてはみるものの、見物客の腰の手に隠されて何も見えなかった。

「ガートルード、そろそろ行こう」

周囲はわざとらしく、頭だけをあらぬ方向へと動かして、ガートルードは自然と動きの中で、その方向を覗き見た。人垣から少し離れたところ、二階建てのビルの上に警備隊の制服を着た騎士が立っている。よく見ると、人垣に紛れて観望者が数人配属されている。

「こりゃ……どうだの重要な人物がいやがるんですね」

「長閑は閑用だ。気付かれないように隠れるぞ。人の流れに沿って、自然にな」

周囲の人は多くの店に入るアヲをして路肩に入り、人垣から紛れてその端を隠れた。

丁度二人が立ち去るとき、広場では撮影の準備が始まった。カメラにほどよく街の様子を映るように、集まったギヤツリを移動させる。人垣がどくと、撮影現場の様子が見えなくなった。

その中心に居るのはバトランティス帝國ナンバーワンアイドルであり、今や国民的スターと言っても過言ではないアイドルグループ。

「それにや、本番開始しますー スタートー」

三人の少女が声を合わせる。

「二天門女神のバトランティス街歩きー」

人気絶頂の元増城女神が司会を務める、話題バラエティ番組だ。

「総導、ユリシア、シルヴィアが声を合わせてのタイトルコール。生で三人の声を聞いた観客は大喜びで歓声を上げ、割れんばかりの拍手が響いた。何回、バトランティスと周囲の街を巡り、現地の紹介をしたがバトランティスやレムリアの様々な情報を観客者に届けている人気番組である。

三人の真ん中に立っている横川が、ディレクターの合図で走り始める。

「横川は雪と氷の国バルディーンからお送りしましたわー」

「本当に寒かったデスー」

雪の面しただけで寒さが、凍ったのか、シルヴィアが体を震えて震え上がる。

「今朝は久しぶりにホームドラマランドに観てきたってさよね。そう、今日はここを舞台でシルヴィアからお送りしちゃうわよ」

ユリシアがカメラに向かって片目をつぶってみせる。

「今日はどこへ行くデスカー」

横川がカメラの方を向き、しっかりとした口調で答える。

「まずは目の前のティスラ・マーケットからですね。ここは昔からある商店街、正しい意味で、色々とおもしろいものがあるんですよ」

「最近では、横川の神社による自然災害が多くて、ここは神社を建てているんだけど、まだまだ神社よ！ 地震で壊れてしまったお店も、仮設店舗で営業しているからね。どうせ、なくなっちゃったんだろーなんて思ったら、大団圓だよ」

茶目つきのユリシアに、横川が微笑みかける。

「それに、横川ではゼルティスの外からやって来た人たちがお店を開くケースが多いので、期間限定で営業するお店が沢山あるんですよ」

「ゼルティスの外でも、砂漠や地獄の風景が多くて、遊覧してくる人なちも多いのね。そんな人たちが開いたお店は、さすがに本場の味。このマーケットで食べ歩きだけで、ちょっとした旅行気分。ま、わたしたちはまだこの世界旅行中なんだからね？」

周囲を囲むギョウリから笑い声が起る。

シルヴィアが「歩道に出て、カメラに向かって手を上げた。

「そんな人たちを監視するためにも、ぜひティスラ・マーケットに足を運んで欲しいデス」

橋川がぐるりと辺りを見回す。

「それにや、まずはどこのお店から行きましようかな」

「そうねえ、ちよつと目移りしちゃうけど……あーあれなんてどうかしら？」

ユリシアは、大きな足尾で天井から吊された六本足のトカゲのような肉塊を眺めした。丸腰きにして、短で厚い等々としていた肉塊を料理場だ。

「まあ、良い匂いがするデス」

「じゃあ、行きましようかな」

そして店に向かう三人を道でカメラが回り込む。少し離れた所でその様子を見つめていたティレクターは、満足そうに目を細めた。そして隣に立っているギョウリ・アウー・マン風の女性、天晴時女神の担当フロデューサーであるマリスに話しかける。

「いやーいいわね、天晴時女神、最近、ますますノッてと感しがするわねー」

その言葉に、マリスもにっこり微笑む。

「ありがとうございます。三人ともノリにノッてますからねー」

「まさかレムリアから来たアイドルがここまで人気になるなんてね。まあ、彼女たちの年々様がドラマチックだもんね。彼女たちを見てると、あたしだってレムリアに行きたくなるもん。魅力フロントもいいけど、早いところ國民服政を認めてくれないかしらね」

「まったくですね」

その後つつがなく撮影が進み、二時間後に終了した。スタッフは機材の片付けや試みの作業があるが、天晴時女神とマリスはすぐさま次の現場へ移動しなければならなかった。

天晴時女神専用車であるサムジンは、パトランティス書局二階の用意した特注品である。前半分は車の前と上半身を隠した形になっており、後ろ半分が衣室になっている。車内は暗くオリアティで作られた車体は豪華で、万一テロリストに襲われても乗員を守ることに出来るがらう。

「はあー続けたあーうううう」

ふかふかのシートに横になり、ユリシアはストレスを吐き出すようにうめき声を上げた。

シートはコの字形で配置されており、ユリシアは一番後ろで寝っ転がっている。その向かって左側、車の前面席に座ったシートには橋川が座っている。ガラスの水を一口飲んで、安眠の息を吐いた。

「何だか、最近特に仕事が増えた気がするのですが……」

「うにゅ……シルヴィアお前過ぎて、眠くなってきちゃいまシタ」

橋川の内かい側に座っているシルヴィアは本気で眠いらしく、顔の子のように体が左右にくらつき始めている。

一方、マリスは元気がいいだ。助手席から後座席席にやってくると、シルヴィアの隣に座った。

「いいわー一睡して、着いたら起きしてあげるから」

「スイマセン、デス……デス」

マリスはシルヴィアの体を引き寄せた。シルヴィアの体はさるがままにふらりと流れ、マリスの膝で足を立て始めた。

「で……次はどこだったかしらあ？」

橋川が口を開き、ユリシアは驚くさうな声を出した。

「えーってね、次はゼルティス郊外のカルゾン病院ね。軍人専門の病院への訪問よ」

ユリシアが顔を歪めた。

「それって……かなり微妙じゃない？ だって、おたくしなちと戦っていた相手だしよ」

その言葉を聞いて、橋川も気付いたように口を開きかけた。

「確かに……私たちを眠らせているのでは……」

マリスは笑顔を手に振った。

「いやいや、さすがにレムリアとの戦いに参加した記憶は残ってるわ。まだ、パトランティスの内戦と関係……イスガルドとバルディーンとの戦いでのお話ね」

車はやがて道を抜け、荒野の中を走ってゆく。道中、道外外の土地があることに橋川とユリシアは驚いた。マリスの話では、以前は牧場と卓球だったらしい。

やがてカルゾン病院が見えてきた。ゼルティスと隣り合う、黒く壮麗な建築だ。美味の大学病院と近い規模の

大きな病院だったが、何よりも病院が悪いという事実によりシアたちは苦痛を感じた。

眠っていたシルヴィアを起こし、三人は不安を抱えたまま事を降りた。マリスはある言っていたが、やはり自分たちの反感を持つ者が多いのではないか。そのことが不安だった。

だが、出てきた病院医スタッフ、そして患者たちの態度よりには、そんな不安はすぐ消え去った。病院のロビーに入った瞬間、病院の状況が降ってきたのには驚いた。それは四方で作り上げた光の鏡片で、キラキラと光っては床に映れると輝いて消えた。

あとびつくりさせられたのは、壁に貼られた病院の言葉だ。これも壁で書かれたものだが、驚くべき事に日本語と英語だった。

「いかがですか？ 患者の皆さんが手作りで頑張ったのですよ」

看護婦が細い手を指で誘っていた。

ユリシアは唇をすくめて、照れくさそうにつまやいた。

「こりゃあ……まいったわね。降参よ」

早速ロビーで出てきた患者と交流し、その後はベアドから起き上がることの出来ない患者のため、各病棟を回ることになった。

ベアドで病棟についている医技人も、三人の姿を見ると目を輝かせた。

「本当に来て頂けるなんて、今でも信じられませんが、夢のようですよ……あの、サインとかお願いしても……」

病棟を巡視してベアドに病棟についている患者が、手術の下からおずおずと透明の板を差し出す。それは地球でいうところの光線のようなものだった。

横川が笑顔で答える。

「ええ、いいですよ。聖のサインが欲しいですか？ それとも二人で？」

「あ、あたしハユルちゃんのファンなんです！ ハユルちゃんお願いします！」

「え？ わ、私ですか？」

少しうろたえながら、でも心を改めて横川はサインをした。

その時、廊下の方が少し騒がしくなった。案内役の看護婦は怪訝な顔つきで、廊下の方を見つめる。

「ちよっと見えますか？」

看護婦はその場を離れ、廊下の様子を観望しようと唇を開けた。その瞬間、看護婦の顔を通り抜けて、小さな影が壁に映り込んでいく。

「あつ！ こち、待ちなさい！」

看護婦の制止を振り切って、天幕の女神の前へとやって来たのは小柄な少女だった。青髪は、もともとシルヴィアと同じくらい。病気を着ているところを見ると、入院患者なのだろう。走ってきたのか、それとも看護婦と争っていたのか、顔に汗をかき、息も上がっている。

後ろから取り押さえようとした看護婦を、ユリシアは手を上げて止めた。突然の介入者で、ユリシアは微笑みかけた。

「何かご用かしら？」

少女はユリシアの質問には答えなかった。その代わりに、思い詰めた顔をシルヴィアに向けた。

——その少女の姿は、シルヴィアは目を見慣れた。

「あ……あなたは……」

少女は唇を伏したように口を閉じた。

「あ、あのう、天幕の女神のシルヴィアさん……ですわね」

「……ひい」

シルヴィアは唇を動かした。しかし、その小さな口からは言葉が出てこない。紫色の瞳が驚愕に揺れる。目の前にやって来た少女には見覚えがあった。

小柄な体。ローレルしたツインテール。瞳の大きい可愛らしい顔。

しかし、なぜここにいるのだろうか？

シルヴィアの横子がおかしいことに気が付き、ユリシアが心配そうな声をかける。

「どうしたの？ シルヴィア」

「この子、どこかで見たような……もしかして、シルヴィアさんの知り合いですか？」

——知り合い。

そういう言い方も出来るだろうか？

かつて、命を取り合つた伴であつても。

彼女の名はラダルス。

東京警察病院の隣、東京で病院を構へた相手だ。

ラダルスは目大膽な豪傑で、モンを喰ふ、親衛隊の一角だ。シルヴィアのタロスと命をかけて戦ひ、己の魔力を全て振り絞つた切り札「神聖の神聖」を放つた。そして、その為命を消したかと思われていた。

その後、シルヴィアたちは探偵となり、このパトリシアイスへ連れて来られたので、その後の東がどうなつたのかは知らない。当然、ラダルスの生死に關しても知る事ではなかつた。

だが目の前にいるのは、知りもなかつたあの時のラダルスだ。そしてシルヴィアに熱い視線を注ぎつけている。そのまなこは、シルヴィアの終極を導く、そして決して逃してしまひそうだった。

ラダルスは腹を絞る声を出した。

「あ、あたし、ど、どうしても、あなたに……会いたくて」

「……………」

シルヴィアの心に感情が生じた。胸の内側が冷感庫のように冷え、背筋に冷たい汗が流れる。

自分は何をされるのだろうか。復讐、それ、殺されるのだろうか。自分はそれだけのことを、目の前の相手としたのだろうか。

ラダルスは目を涙を流すまで、勇気を奮い起こすかのように大声で叫んだ。

「あたし、シルヴィアさんの大ファンなんです」

「……」シルヴィアの顔の中が真っ白になった。

「……………」

ラダルスは胸を両手で押してうつむいた。そして両手の指をいじりながら、小さな声で話し始めた。

「その、あたしレムリアで発見されたらしいんですけど……何も覚えてなくて、この病院に来る前までのこと、何も分らないんです」

シルヴィアは息を呑んだ。

「……………」シルヴィアのせいで……

「親衛隊の隊長さんが来てくださって、あたしが親衛隊の隊長だったとおっしゃるので、もう本当にびっくりし

るやつで、でも、わけが分からなくて……これからどうしろんないんどうって……あたし、魔力がなくなつちやつて、何も出来な……」

最後の方は消え入りそうな声だった。そしてしばらくは言葉もなく押し黙る。

シルヴィアは、何を言つて話をすれば良いのか分からなかつた。

「……」同僚だろうか？ それとも親戚なのか？

初めて向き合ひ、自分が抱かした疑念の底に、シルヴィアは全裸に晒つたように動けなかつた。

ラダルスはそれとなく顔をちらりと上げ、シルヴィアのことを見つめた。すると、徐々にうつとりとしたまなこに変わつてゆく。

「……………」でも、そんなとき……テレビで「天降の女神」を見たんです」

ラダルスは両手の指を組むと、ゆっくりと瞳を開いた。

「テレビのライブ、本当に凄かった——夢の世界みたいでした。シルヴィアちゃんを天使みたいで、レムリアで失つたあたし自身も、シルヴィアちゃんを見てきてくれるような……そんなことないんですけど、でもそんな気分になって、すごく元気が出たんです」

ラダルスは夢見のように語った。無意識に横き付いた心臓も、口元も顔の中で再生しているかのようだ。その時のラダルスの表情は、本当に華やかそうだった。

「だから、この病院にシルヴィアちゃんを連れて来て、心臓が止まるかと思ひました」

くすつと笑つて、ラダルスは目を閉く。

その流れのない瞳は、シルヴィアの心を締め付けた。まるで胸の中を絞られるような苦しさだ、言いようのない感情が湧き上がる。

「あたしは急つち駆け付つて言われてたけど、どうしてもお見舞いを伝えたくて……あたしはシルヴィアちゃんに救

われたから、だから——」

その時、シルヴィアの目から涙がこぼれ落ちた。

「……………」あ、あの、シルヴィアちゃんす」

「……………」あ、あの、シルヴィアちゃんす」

「……………」あ、あの、シルヴィアちゃんす」

「……………」あ、あの、シルヴィアちゃんす」

大粒の涙が次々と溢れ出して止まらない。シルヴィアは両手で顔を隠すようにしてうつむいた。後悔しようとする

る時から、**毒**が**漏れる**。慌てた楳川が駆け寄り、シルヴィアの肩を握った。

「ちよ、ちよっとシルヴィアちゃん言、どうしたの？」

しかし一番驚いていたのはラダルスだろう。真っ青な顔で、おろおろと辺りを見回した。



「あの、あたし、何か……あ、あの、どうしよう……ごめんなさい！ シルヴィアちゃんに、あたし何か……ああ、

あたしったら……ごめんなさい！ とにかくごめんなさいっ」

ちよたえまきくっつて、ひたすら謝るラダルスに、シルヴィアは首を振った。

「毒？ デス。あなたは悪くないデス。ゴメンナサイ……デス」

マリスがさっとシルヴィアの肩に滑り込んでくる。

「ごめんなさい。えっと、ラダルスちゃん、シルヴィアちゃんは体調が優れないみたいなの。せつかくる病院に連れて来て給しなけれど、今日の所は……ね？」

「で、でも……あたし、シルヴィアちゃんに謝ることを……それが何なのかも、分からなくて……あたし、どうしたの……」

ラダルスもぽんとバニタ模範だった。

すかさずユリシアが、ラダルスの頭を握る体を抱きしめた。

「大丈夫。あなたは別に、シルヴィアが謝る事なんてしていいわ。それは保証するから！むしろシルヴィアを謝らせたはずよ。きつと、感謝まっちゃんたのね」

「で、でも……」

まだ不安そうにラダルスの頭を握り、楳川も元氣付けた。

「本当ですよ、この私も大抵謝ります。ですから、今日のシルヴィアの態度も許してあげてくださいませんか？」

「そんな！当たり前です。いえ、許すとか、許さないとかの話じゃありません！」

「そう、ありがとうございます」

しつかりとした保証をするラダルスに感激びく、楳川とユリシアは体を離した。また来る約束をして、二人はシルヴィアを両側から抱えるようにして病院を出た。

マリスはアイレクターに病院の中断と今の出来事をカットするように伝えると、**天幕**の女神を連れて病院を出た。そして正面玄関に駐めてあった車に乗り込むと、カルゴシ病院を後にした。前野の車を、車はセルフィスの中心部へ向けて走ってゆく。

その途中で、薄ら唇を取り戻したシルヴィアから、「部始終の話を書くことが出来た。

ユリシアは胸を紐むく、大きくうなずいた。

「……なるほどね。東皇東洋作戦のときの、あの大型魔導装置のパイロットだったとはね。わたくしは顔を合わせ



ていないから、気が付かなかったわ」

徳川も驚きを感じない様子だった。

「私は神罰で少しだけ懲らしたことがあったのですが……まるで別人のようで、すぐには気が付きませんでした。でも……まさか、こんな偶然があるなんて、シルヴィアちゃん、大丈夫？」

「大丈夫です。ご心配をおかけして、すみませんです」

シルヴィアは力なく微笑んだ。

「……でも、今までずっと、シルヴィアたちは無言のうちに思ってたみたい」

シルヴィアは機嫌用紙の取から、遠ざかる病院の姿を見つめた。

「でも、違ったです。シルヴィアは精神科者でもあったです。きっとシルヴィアは……ラダルスさんの人生をメチャクチャにしちゃったです」

ユリシアも機嫌用紙、その言葉に返事が出来なかった。驚きしい事内の空気は、汗ばんだ言葉を発することが許されないうちがした。

「でも、それを使めるのはシルヴィアちゃんじゃないわ」

結局、それが誰の声か分からなかった。シルヴィアは首の首を揺して、思わす視線をそそわせた。

「マリス……さん？」

いつもの軽い口調ではない。深く、真剣な言葉だった。そしてその表情にも、ふざけた様子は微塵もない。揺るぎない言葉を吐きださる。真剣で真剣な真剣。それはいくつもの瞬間を塗り重ね、作り上げたメイクのようでもある。

シルヴィアたち三人は、今まで見たことのないマリスの様子に緊張していた。かろうじて、ユリシアが引きつった顔で笑みで笑く。

「えつと……マリス、よね？ どうしちやったのよ、急に、もう、調子狂うじやない？」

「ユリシア、今は真剣な話をしているの」

まろつと音がしそうな視線で、ユリシアは叱られた子犬のように小さくなった。

「……ソリー」

マリスは再びシルヴィアを真っ直ぐ見つめる。

「いい？ シルヴィアちゃん、あれは戦争の一端であって、個人の善悪や感情とは関係ない……というふうに割り切れるものではないのは当然よ。あなたが善悪感を持つのも仕方がないことだと思うわ。でも、あなたが善しむと被害にされて泣いている姿を見たら、さっさと去ったラダルスはどう思うかしら？」

「それは……」

「まっとうラダルスは泣きわ。あの子はあなたがステージで見せる笑顔から、涙気をもらっているんだから」

「……」

「今あなたに出来ることは、過去の彼女に謝ることではなく、今の彼女のために、これからの彼女が笑顔になるように配慮することじゃないかしら？」

それは神罰かも知れない。

でも、そのことを否定することは出来なかった。

神罰など、美しくて素晴らしいことだから。

素直にそう思えた。

マリスの言葉は、三人の心にずんなりと染み込んでいった。

「んや……」

徳川の唇が、きゅんと音すられた。

「マリスさん、それって、私たちにもっと聞けと言っていますんか？」

「……」

「……」

三人の姿勢はまなざしがマリスに集中する。マリスはわざとらしく口を開いて、視線をそらした。

「あらーそんな風に聞かまじやっただろ？ やあねえ、神罰は神罰よ」

たまらずユリシアが唇を曲げた。

「あーっ、もう！ 素直に感心しちゃったじゃないのよ！ わたくしの映画を鑑賞しないよっ！」

つられて徳川も笑い出す。

「まったく、マリスさんは鏡け自がありませんね」

シルヴィアも涙を拭きながら、笑い声を上げた。

「本当ですネ」

シルヴィアはもう一層病院の方角を振り返った。もう病院の建物は目の向こうに消え、その姿を見ることは出来なかった。

「でも、マリスさんの言ったことも……本当だと思えますデス。シルヴィア、みんなを笑顔にしたいデス……レムリアもバトランティスも」



ゼルティスの夜は「理想的だ。黒い新産みは、昼間から夜の間のようを行き来のだが、実際の夜になると、また一瞬変わった表情を顔に出す。

夜の間に浴びるんだのは、新身体を流れる魔力の光によってライトアップされる。町中を流れる魔力は、道路や建物を光のオブジェに変えてしまう。ネオンの光というよりは、まるでモダンアートの様な芸術気を感じさせた。

水のように流れる魔力は、夜に見ると一瞬とその美しさが消え滅ぶ。魔力の流れは微妙に道筋を変え、太きを変え、まるで生き物のように勝手にその身をくねらせていた。美しい光の流れには、不思議と生命力に感じられるものを感じる。この世界が一つの生き物であり、魔力の潮流がその体内を循環する血液のように思われる。その時はいつまで経っても動き続けることがない。

「口癖、このスリーブも結構いけるですよ」

街の美しさに見とれてはいた無類は、一気に現実を引き戻された。

ガートルードが食べているのは、一見オトコのようなスリーブだ。良く分からぬ野菜と、何の肉も分らない具が混入っている。スプーンで肉体の知れない肉をすくると、凄まじく口に入れた。

「んー牛肉みたいな感じで美味いですね。スリーブの味もすっかり飲み込んで、喉もと潤いと二回に口の中に広がる感じがなんとも」

無類も自分の前に置かれた、プラスチックのような素材で出来たお箸を手を取った。肉と野菜がたっぷり入っていて、確かに栄養が取れそうだが、ばつと見キヤベツカレタスの葉のような野菜を口に入れる。

ニンジンのような味がした。

「……認めたくないが、美味しいな」

広場に大きなテントが張られていた。門口は二十メートル、奥行きは百メートル近くある長方形で、テントというよりは施設の倉庫のようだ。そのテントの下に簡易なテーブルと椅子が並べられ、簡易的な食堂が開かれている。大抵、二百人から三百人くらいはいるだろうか。その賑わいに誘われて、無類とガートルードは食堂を歩いていた。両りが脚がしひので困らないとは思ってたが、話し声が他の客に聞こえないように、空いている場所を選んで座っていた。

ゼルティスの街を歩き回り調査を続けていたが、丸一日歩いていると、さすがに疲れてくる。それに、通りもほとんど暗くなる。ひび割れた歩道が、それでも時間が経つと太陽は街の隅へと沈んでいった。昼間から暗い気配だったが、夜になるとかなり冷える。しかも腹も減ってきた。しかし、バトランティスの道は持つていない。一応、わずかながら非常食は持つてきているが、それは非常事態の時のために取っておきたかった。

どうしたものかと考えていると、無類で食事を配布する歌を出しが行われていた。天候情報による災害の為、家を失った子供達に食料を配るんだな。

「意外と社会福祉が充実しているんだな」

「まったくですね。食えない奴は死ね、って感じの環境としたイメージだったんですが」

テントの中では大勢の人がスリーブやパンらしきものを食べている。テントの中には百インチはある大きなスクリーンがあり、みんな食事をしながらその画面を見て、楽しんでいる。流されていくのは、バトランティスのテレビ放送のようだった。

無類とガートルードも、世界のニュース番組を興味なく鑑賞した。

「無料の食事もそうだが、テレビがあるのもありがたい。ここの世界の情報を手に入るもんだ。世界の一面が民衆に、どんな暮らしをして、どんな考え方をしているのかがよく分かる」

「日曜……あいつ、コロサオの家庭に面してた奴じゃねえですか」

ガートルードは無類の方を見ながら、スプーンをあらぬ方向に向け、無類が顔を動かさずにその方向を見ると、無類の団がテントの中へ入ってくるどころだった。

そしてその中で、「暇を引く存在があった」。

青く長い髪に白い肌。下着姿に無類の制服を羽織っただけの服装は、青く長い髪の中で出て来たのではないかと

疑いたくなる。しかし当人は、そんな影もまったく現にない様子で、冷たい人形めいた表情でテント内を眺  
 望している。

作り物のように美しい顔。そこに刻まれた深い傷痕は、いつ見ても痛々しい。

彼女は黒髪四角の一人、ルノール。門前町役場の死神と呼ばれた少女だ。

「さっきコロッセオで見たのは付城カードですよ？ 試合はなかったんですかね？」

「それに、奴は黒髪でもかなり地位が高いはずだ。どうしてこんな雑記キャンプみたいな所に……」

テントの中にいる人々も、黒髪とルノールに気付く助めだ。賑やかで楽しげだった雰囲気だ、急に静かになら  
 めまじ変わってゆく。

「おい、あれルノール様です」「は、本島、ルノール様です」「何でこんな所に……」でも、どう見ても本物「コロ  
 ヲセオの死神がどうして……」

死神と呼ばれた美しきも傷を持つ少女だ、暫く聞いた。

「話だ」

たちまち周囲が、しんと静まりかえり、テント内に居合わせた人々の視線と興味だ、ルノールに集中した。

「え……あ、あの……諸君らは……その……」

ルノールは唇をすぼめ、視線を地面に落とす。しどろもどろで、何を言いたいのかさっぱり分らない。まるで、  
 急に大勢の前に引く振り出されたあがり症の子供のようだ。

——何だ？ 見た目の雰囲気と、死神って称号とは随分とイメージが違ふな。

ルノールも顔を歪くして、必死に何かと隠しているらしい。人々は根気よく言葉を待った。さすがの傷痕も、  
 ルノールの顔に浮かび始めたときには、がんばれと励まされた。

その時、すっと前から赤い髪の少女が近づき、ルノールの肩を握った。

「あーはいはい、まったくもう、うちの死神様は疑すかしがう屋なんだから」

「ス、ラムザ……」

ルノールの顔がぱつと明るくなった。しかし、すぐに下唇を噛みしめる。

「なっ、そ、そんなことはないぞ、ね、私だってな——」

そんなルノールに隣わず、ラムザは手を叩いて人々の注意を引いた。

「はいはい、じゃ、不肖このラムザが死神ルノールの言いたかったことを代弁するから、みんなよく聞いてね！  
 ここにいる人たちは、住み慣れた土地を巡られ、我がバトランティス帝國領の領土にすぎりに来たのよわ？」  
 テントの中にいる者は、これから何が起こるのか、不安と期待の入り交じった顔で、凝しげに話すラムザを見つ  
 めていた。

「ところで、今日コロッセオでルノールが試合をしたのは、みんな知ってるかな？」

耳に手を当て、いかにも故事を待つてますというポーズのラムザに向かって、おぼろげと声が上がる。



「え、ええ知ってます」「あなたは何に行きましたか」「あの……わたしも」やがて次々と声が重なり、大きくなってゆ

く。ラムザは満足そうにうなずくと、大団のような笑顔を見せた。

「うんうん。来日のルノーラの試合は、イズガルドで開催された後、割増の観客を呼ぶ、そしてバルディーンの前で

アレクシスの三連戦！そしてー試合結果はー」

ラムザは両手の拳を突き上げた。

「全戦全勝！」

アントの人々も手を突き上げて、歓声を上げた。

「ルノーラが今日の勝利で中に入れた前戦、賞金を、想像もない額たちに分け与えたい、と言い出しました！そんな嬉しい死体に、みんな拍手！」

盛大な拍手が沸き起る。

その声を聞いて、アントの外から酒樓と料理を載せた車が次々と運び込まれた。肩合わせた人々から、おおっと

いう喜びの声が上がる。

「ありがとうございますー！ルノーラ様」「感謝しますー！ルノーラ様！」酒樓の言葉が、真つ赤になつてうつつむく

ルノーラに次々と投げかけられる。

アント内に、歓声が沸いた。手を振り上げ、ルノーラの名を全員でコールする。

その熱狂に傷痕とガートルードも有難さを言わずに喜ぶ。興奮した風を放って、手を握つて振った。

「大した人だな」

「ええ、さしずめ人気のスポーツ選手ってどこですかね」

やっと顔を上げたルノーラは、誰かに顔をほころばせた。

「みんな……ありがとう」

ラムザが顔を振り回して大団を上げる。

「さー今夜は好きなだけ、飲んで、喰って、楽しんでーっ！」

アント内が沸き上げる熱気に満ちあふれる。人々は料理と酒に没頭し、口々にルノーラに感謝の言葉を述べている。この騒ぎに振れて、驚駭しよう」

傷痕がささやくと、ガートルードもうなずいた。

「ですね。これ以上、長閑は無暗でいやがります」

傷痕とガートルードはそつと席を立つと、出口へ向かった。

その時、アントの中で大騒ぎが上がった。その声につられ、傷痕は何気なく振り向いた。人々は、全員がスタリ

インを見つめ、腕首を上げている。傷痕もそのスクリーンへと、隠れて消えた。

「その口」

立ち止まったまま、動けなくなつた。

表情を凍り付かす、突然と立ち戻す傷痕も、周りにいた人々が修羅（しやら）そうに見つめた。ガートルードが驚いた顔をして傷痕の腕を引つ返り、声をはりて耳打ちした。

「ちよっ！ 目撃、なに目立っていやがるですかっ！ 一休目だつて——」

押立ての傷痕を引つ返りながら、その腕の先に目をやった。

「はあああああああああああああああああ——」

ガートルードの口から、絶叫が伝へられた。

無理もなかった。

そのスクリーンでは、二人の想像を絶する映像が映っていた。

「みんなっ！ こんばんは！ 天（あま）津（つ）宮（みや）女神（がみほ）ですっ！」

勝手にきらびやかな衣装を着た、黒川、ユリシア、シルヴィアが笑顔で手を振っていた。そして、その隣に立つ五人組が声を揃える。

「こんばんは——！ マスターズです！」

スカーレット、シヤロン、クレメンタイン、ハンリエツ、レイラがやはりキラキラとした衣装に身を包み、笑顔でギターを振っていた。

まるで、アイドルのライブ中継のよう。いや、アイドルのライブ以外の何物でもない。

「ん、これは……」

——一休、何が？

二人の顔はパニクたになった。

何が起こっているのか、全く理解が出来ない。

「どうかしたの？ 君たち」

話しかけられて後を振り返ると、すぐ近くで目が覚めるような赤髪の少女が立っていた。

——ラムザ？

傷痕は一瞬にして、冷や汗が噴き出した。

「あ、いえ、何でも——」

自分の声を聞き、傷痕は慌てて口をつぐむ。

——男の声に驚いている？

傷痕は心の中を迷わせた。

シロフタでまだ目を白黒させているガートルードが、代わりに何とかなえようとする。

「え、えっ？ ですね、ちよっ？ 気分が悪くてですね、外の空気を吸いに付いてとどろたんですよ」

「ふーん、そうなんだよ、出て行くというより、ぼーぜんとしての感（かん）じだっただけだよ」

「え、そ、それはですねえ——いや、目撃されたものを見て、びっくりしたで……」

ガートルードは汗をたらたら流しながら、しどろもどろを答えた。

「ん？ 天（あま）津（つ）宮（みや）女神（がみほ）とマスターズを知らないの？ どれほど由（よし）から出て来たのよ？」

「え、ええ……あはは、そうなんですよ、すごい田舎で……ここの人たちは、そんなに有名なんでいやがりますか？」

「そりゃそうよ……ってホント、一休どっから来たの？」

「そ……それは、言うのも恥ずかしいけど、ですね」

ラムザの目つきが険しくなった。

「あ、おい、どうかしたのか？」

ルノーがやって来て、心配そうに声をかけた。ラムザは表情を和らげ、振り向いた。

「え？ ううん、ちよっ？」

これ以上ツッコまれるとヤバイ。そう思った傷痕は、ガートルードに目配（めく）せをする。

「——え、そ、それじゃ、失礼しやがりました」

ガートルードは慌ててそう告げると、ぐるりと背中を向けた。傷痕もその後について、ゆっくりと出口（でぐち）へ向かって歩いて行く。

背中を隠れて見せる。

背中を隠れて見せる。

「恐らく怪しんでいるのだらう。だが走つては駄目だ。田舎から出て来て急襲している。普通は魔界界人を使うんだ。」

「魔界界人と云ふ方すら忘れてしまふのか、さもない動きだになつてしまふ。もし、いきなり動きかかつてきたら、その時は応戦するしかない。神銃を振り始め、背後の魔界界人を振りながら歩く。背後のスターリンから、聞き覚えのある声が聞こえてくる。この声は聴いた。」

「いま、この世界は大変な危機にさらされています。それはレムリアも一緒です。」

次にユリシアの声が出た。

「この危機を全員で乗り越えねばなりません。」

そしてシルヴィアの言葉らしい声。

「そのために必要なもの、それは人々の——」

そして、二人の音が消える。

「静です。」

そのとき、

その言葉に、

魔界は思わず振り返らずにはいられなかった。

大層スターリンに大きく映っている。懐かしい仲間の声。

そして、その前に立ちふさがる音があつた。

思えるような毒い顔の少女の顔が、ざらりと光つた。

「そっか……直は、キズナ……ヒダ・キズナなんだね？」

レムリアも身振えたと、前に並んだ二人の顔に手を伸ばす。きつと口を結び、目も半眼に狭く絞られてゆく。膝までの恥ずかしそうな様子は、魔界界人ではない。

同じしていた魔界界人も、「声に顔色を変えろ。」

「レムリアの魔士だ」「そんなバカな。何でこんなところだっけ？」

その声を聞きつけた「魔人」も、あつという間に魔界界人が出る。テント内は騒然となり、思えを叫び声を上げ駆け出す人々と、魔界界人を倒えようとする魔界界人とで大混乱になった。

「魔人だ！ ガートルード！」

「静です！」

二人はテリブルを飛び越え、転がるようにして外へ出る。そのままの勢いで、道路に飛び出し倒れた中を走り出した。振り向くと、大団を出したのがら追つてくる魔界界人の姿が見えた。

「こいつはもう、消人調査は間違だ！」

「ええ！ ころなりや、両手にいきやしようぜ！ 魔人！」

魔界界人はやりと笑つた。

「ああ、行くぜつ、エロス！」

そしてガートルードも不敵な笑顔で吃する。

「シダラ！」

二人の体は、瞬間的にハート・ハイブリッド・ギアが起動される。わずかに遅れて、二人の行く手に「魔人」が降ってきた。闇の生えた騎士「邪神」だ。

「アルバトロスか！」

「あたしにお任せつてんでしょ！」

ガートルードは太もものアルスターから魔銃を引き抜き、同時に引き金を引いた。ガートルードの足撃も、魔界界人の体は太もも魔銃に当たらないはずはない。

ガートルードの「種子」から撃ち出される「魔人」は、魔界界人の「魔人」をいとも簡単に貫き、胴体と頭を風穴を空けた。ぐらりと倒れる身体は、街の建物物を押し潰す寸前で爆発すると、先の街へと空を飛んで消滅した。街角の向こうから、今度は人間サイズの魔界界人「魔界界人」が追ってくる。跡地の空を飛んで現れ、数人体を魔界界人とガートルードめがけて襲いかかった。

「目撃、頭体さんですよ！」

魔界界人が手を開くと、その意思に応えるかのように光の輪が現れる。瞬まがはじけると、手の中に魔人が出現していた。ガートルードが使っているのと同じ、「種子」だ。

「手分けしていくぜ！」

飛びかかってくるブリガンドに向かって引き金を引く。銃口から飛び出した光の弾丸がブリガンドの胸に大きな

穴を穿ち、二メートルほくあるガダイを吹き飛ばす。市を騒がしめ、壁によつかると、そのまま壁面に横たわり光の破片へと分解する。

無闇とガートルードは射がる敵を、両手の二丁拳銃で次々と撃ち殺して行つた。

ブリガンドは煙面を這うように突つ込んで来る。ビルの上から飛びかかつてくる。正面から走つて襲いかかる。それらを逐次撃ち、両手の銃がひっきりなしにマズルフラッシュを輝かせる。

わずか十五秒の間に、二人の銃から百八十発の弾丸が発射され、同じ数のブリガンドが光の破片となって散つた。

「射手だ！ ガーさん！」

「ガーさん言うたってんでしょうがっ！」

無闇両手を身に付けた脱走隊が追つてきた。恐らく、無闇は敵とは格が違ふ。ガートルードは脱走隊に向かつて銃を連射した。

「くあー！」

無闇隊員は胸に銃弾を受け、装甲を砕け散らせたが倒れた。

「効いたワ！」

前回の戦いで、トレイダには効かなかったガートルードの銃だ。だが、今回は効果があった。トレイダの脱走隊員が特別に強力だったということもあるだろうが、何より脱走隊員をしていることが大きいのだろう。ガートルードの銃口が、明らかにパワーアップしている。

「目標、こいつはイケますよ！」

向かつてくる脱走隊を次々と撃ち倒し、ガートルードがご機嫌で叫んだ。

「くそっ！ レムリアの魔王め！」

弾を持つて走り込む脱走隊員は、無闇に近づくことも出来ずに撃たれる。銃で撃たれた脱走隊員が前に出て撃ち合ひになるが、エロスの絶対防域は固く、無闇たちには届かない。逆に無闇たちの弾丸は、直撃しようと思つた脱走隊の絶対防域を破壊し、脱走隊員にダメージを与えていった。

「よし、このまま銃を弾いて戦を終わらさう！」

脱走隊員の隊列を割つて、飛び込んでくる者があつた。

——ルノーワ？

背の壁をなびかせ、脱走隊員を身に付けたルノーワが矢のように走ってくる。その脱走隊員はルノーワのガダイラインに合わせて進められたように、陣に突入した。白と黒のカラースタンドで、どこか学校の制服を思わせるガダイだ。そして背中には翼を折りたたんだような、ハの字形の大型ユニット。そこに半端の剣が何本も収納され、剣の穂先を動かしている。それは剣の利を持つ陣のようでもあつた。

「くっ！」

その姿に内かつて無闇は両手の銃を連射する。ルノーワは両手に剣を構え、避けることなく直つて来て、両手を肩より上まで伸ばして、目では見えないほどの速度で旋回し、二丁の拳銃から一秒に合計六発の弾丸が撃たれるが、それが全て斬つて落とされた。

トレイダがやつていたのと同じ事だ。しかもトレイダの三日月輪と違い、ルノーワは二刀流だ。より速く、より重く、金指で防いでいるように見える。

あつという間、距離を詰められた。

「ちっ！」

無闇は銃を下ろし、スタスターを噴射して後ろに下がらうとした。

ルノーワは両手の剣を後ろ手に構え、加速する。

しかし無闇は後ろではなく、一気に前に出た。

「ひ！」

逃げると思つた二回の隙を突いて、無闇はカラントを振りこむように加速した。距離を詰めればそれだけ剣で刺さるすがすがしくなる。無闇はルノーワの加速からわずかに方向を外して突っ込む。

ルノーワの剣が届かないギリギリの距離で引き金を引いた。

飛び出した弾子の弾丸を、ルノーワは顔色一つ変えずに斬り裂く。しかし、無闇の後方からガートルードが脱走隊の射撃を行つていた。ガートルードの弾丸が、ルノーワの背に突きさす。

「ひっ！」

ルノーワがスタスターを全開にし、見えないうちにぶつかつて倒れ延びたかのように、転倒した。背中を向けたまゝ、無闇を追う。

「なにっ？」

ルノーは空中で体を回転させ、傷無に斬りかかった。その間も、ガートルードの遠距離射撃は頻んでくる。しかしそれを避けるに暇で受けながら、傷無に斬り付けた。

「ちっ！」

傷無は手に持った銃で胸を受けた。すると、胸の手に穴もなく、銃身が紙のように切断された。そして射撃の衝撃が傷無の体を震らした。

「くああっ！」

ハート・ハイブリッド・ギアを走り過ぎて、衝撃波が前後体を斬り裂くような感覚だった。遅くならそうなる道を、向とかつたを止める。姿勢の維持が出来ず、膝を折って、道路の端路を転がった。胸で体を支えようとしたが、そのまま野郎を走らせている露店に突っ込んだ。

「いやっ、誰う！ とどめはあたしだよっ！」

空から赤い髪の少女が降ってくる。

——ラムザか！

ビホニの顔。表を撃った、小ぶりの胸を生やした背陣ユニット。そして両手で振りかぶっているのは、赤く巨大なトマホーク。

そのトマホークが表に包まれていた。男様をほど斬りかて、不吉な輝きを放っている。その光を見え間、傷無の本能が危険を察知した。背中を跳が駆け上がる。

「何か分かんが、ヤバそうだなっ！」

立ち上がったいたら逃げられない。倒れた姿勢のままスラストを全開にした。ハート・ハイブリッド・ギアと石壁の道がこすれて火花が散った。そのまま滑るようにして進退する。

同時に、ラムザのトマホークが地面に叩き込まれた。

激しい光と熱が返りを放つ。ラムザを中心に、炎が渦を巻く石壁が崩れて消える。

「あーっ、もう逃げちゃダメだったっ！」

立ち上がるラムザの間隙から、表が生まれてこぼれ落ちてゆく。表は生き物のように動き回り、顔が顔長の体を見くらせるように、ラムザにまともなやつ。

ラムザが半み出すまで、道路は灰となり、洞から洞へと表が壁を広がっていた。道路に倒した敵店も、あまりの熱に燃え尽し、次々と炎上してゆく。

洞窟を取って傷無は逃げ起きた。そこへ丁度ガートルードが滑り込んでくる。

「目撃、大丈夫でいやりますか？」

「ああ、さすがに敵の手強いぜ……逃げ切れるかな？」

ラムザを取り巻く表はさらに勢力を増しているようだ。

「さあ、行くよ！ レムリアの殿主！」

そこへおぼろい動きでルノーが走ってきた。しかしルノーは傷無たちには目もくはず、ラムザの喉に銃を突き付けた。

「ダメなのはお前だ！ ゼルティスごと燃やしてやるぞ！」

銃の音がラムザの脇腹にびつたりと張り付いている。あと一ミリの動きで敵が喉を出す、表の脅しだ。

「だ、だいじょ！ だっ。あたしだって、ちんちん……」

しかしルノーは銃の照準で胸を撃つ。今にもその胸を撃って、ラムザの喉を撃つてしまいたいようだ。分かった、分かりましたよ。まったくもう……友達の喉に銃を突き付けるなんてひどいじゃないの？」

「誰が友達だ！」

ふてくされたようなラムザから視線をそらし、ルノーは胸を傷無に向けた。

「大量の銃をしようとする奴を止められなくて、何が友達なもの——」

そこまで言って、顔を赤くして口を開いた。

ラムザはにやりと満更そりな微笑みを浮かべて、胸を撃んだ。

「ふふふん！ じゃ、お任せするわ、友達ルノーちゃん！」





「だから、誰が……あつ？」

ルノールが上を見上げ、目を凝らした。

建物の陰から飛行船が姿を現した。羽の生えた飛行船のような形をした、魔導機関で動く乗り物だ。建物の上、ギリギリの位置に停まり、こちらを覗いているようだった。

「目撃……まだ早手ですかね」

その飛行船は全千里の豪華な装飾に飾られており、かなり身分の高い人物が乗るものに思えた。

隣にあるハッチが開き、中から人が姿を現した。

その瞬間、瞬間は心臓が止まりそうになった。

「愛音……」

初う事なき、千鳥の愛音の顔だった。だが、その恰好はすっかり異世界の魔法へと変わっている。渾身の肉体に金銀の装飾が施られ、愛音の肉体の美しさを最大限に引き出そうとしている。

その姿を恥じることなく、堂々と魔導機関を操縦している。

「これは一体、何の魔法？」

ルノールをはじめ魔導陣は、突然のバトランドイスの浮城に驚いていた。

「ア、アイネス様……どうして、こんなところへ……」

愛音は飛行船から飛び降りると、おわりと地上へ降り立った。そして、魔導陣を感嘆するように眺み付けた。

「それより、あたしの質問に答えて」

魔導陣員の首筋が伸び、汗や汗が顔に伝う。ラムザが代表して質問に答えた。

「は、レムリアからの客人を遠送しておりました」

ルノールがちらりと後頭目を見る。

「客人者はレムリアの魔法……ヒダ・キズナです」

愛音はゆっくりと指を振り返った。

「……」

指をさすめるその瞳には、懐かしさ、懐かしさ、哀しいほどの光が、様々な思いが溢れているように見え

た。

「……愛音」

服装が変わっても、愛音の容姿は変わらない。歯と同じ、美しくも可愛らしい顔だ。変わったところと云えば、髪の色がピンク色に変化し、ガラデーションがかかっているところくらいだ。

駆け寄れば隠しめられる距離に愛音がいる。

ずつと会いたかつたはずなのに、声が出ない。

——俺は愛音に、何を伝えればいいのか、さう。

この時、愛音は驚いたことを隠せばいいのか、黙殺されぬ言い方をさせられたことを認めればいいのか、仲間を捕縛にされていることを告めればいいのか。

感情も、気持ちもあふれかえる瞬間なのに、うまく言葉にならない。

そして、手を伸ばせば届きそうなのに距離が、とてつもなく遠く感じた。

ルノーラが再び剣を構えた。

「アイネス様、お目内しかと思いますが、今この侵入者を斬り捨てます。しばしお待ち頂けますでしょうか」

他の要衛隊員も剣を抜き、仲間を取り囲む。その輪がじりじりと狭まり、正面に立つルノーラがその向の両側へと進む。

「待ちなさい！」

愛音の鋭い「叫」が響いた。取り付いたように要衛隊員が動きを止める。

「レムリアの騎士、仲間はこのあたりに……アイネス・シンタラヴィアが隠すわ」

愛音が仲間に向かって進むと、要衛隊員たちは輪を崩し、さっと道を空けた。

「ゼロス……」

愛音の後に、ゼロスが到着された。

本気で息音は自分が戦う気なのか？ と、要衛隊員も半信半疑だった。息音は通らうことは出来た。しかし、自分がアイネス様の身に向かあったら……遠くにはいながら、わざわざ敵に息音を傷つけさせた、その罪はいかに重いのものか……そう考えると、その後の要衛隊員に身の手もよだつて思いがした。

要衛隊員たちは、ある意味自分たちが戦うとき以上に、仲間に対して警戒心を強めた。ルノーラも剣を構え、今にも飛びかかろうとしている。

——いかにアイネス様の命令でも……アイネス様に頼むべき……。

ルノーラが剣を振り直そうとしたとき、手の中から剣の柄がなくなつた。

「え……っけ」

ルノーラは剣が起きたのか分からなかつた。手の中に何もなことを確認するように、両腕も手を動かした。同じ

たりした。

——これは……術式解除の

愛音の背後で、ゼロスのバツから作られたシンダが出現していた。そこから発生する光が、要衛隊を照らし、要衛隊が浮き上がった。

次の瞬間、ルノーラの要衛隊が、先の文字や術式で分解され、前に送られるようにして消え去ってゆく。ルノーラだけではない。愛音を中心とした要衛隊員たちの要衛隊員が、次々と消えていった。

「仲間……他の誰にも、手出しはさせない」

仲間の顔に光が照ったように、両ひが広がった。

「愛音……俺も……」

「あなたは……このあたしが始末すると決めたの」

「……」

不意に剣を隠されたようなショックを受けた。

——俺も、する？ それは、俺も、殺す……って言うことか？

仲間はあることを引き、ざりりと拳を握りしめた。

要衛隊を背負った愛音が、じつと進んだ剣を向けている。

——そういふ、ことなのか？

「愛音……本気のなか」

仲間は隠した手に、もう一度「千珠」を出張させた。

「いくら武器を作り出しても無駄よ、全滅、あたしが消してしまふから」

愛音の要衛隊が一段と大きくなった。既い音を立てて、ゆっくりと回転をする。それと同時に、愛音の足下に同型の要衛隊が広がった。それがどんどんと直線を駆け、その上に立っていた要衛隊員の要衛隊員を解体していった。

「どうすんですか、旦那！ あれにやられたら、ハート・ハイブリッド・ギアも消されちゃいますよっ！」

「仲間……大人しくして」

ゼロスの術式解除の要衛隊が拡大してゆく。

「やらなさんならいいのかよ、愛音！」

傷風も愛音に口を向けた。

「傷風っ！」

愛音が地面を蹴る。

次の瞬間、傷風の視界が真っ白になった。

——何だ！

傷風と愛音、二人の間で、強烈な光が輝いた。

次の瞬間、衝撃波が二人の体を突き飛ばし、傷風と愛音が吹き飛ばれた。上空から飛んできた光の柱が地面に突き刺さり、次々と爆発し、煙霧を起してゆく。

吹き飛ばされた傷風は壁に叩き付けられた。同じように、すぐ隣にガートルードが飛ばされてゆく。

「だ、口唇、何がどうなっているやがりますか——」

苦しげな声でうめいた。傷風も痛みを耐え、壁に手を突いて立ち上がる。

「分からない……くそっ、今のは何だ？」

両が起きたのだから分からないのは、愛音も同じだった。宙に舞った体も、絶妙の姿勢で着地させる。そして、襲撃した相手を捕縛すべく空を見上げた。

「一体、誰が……」

光の飛んできた方向に人影があつた。その人物は手にした巨大な銃剣を掲げている。

その姿を見て、親衛隊もろわすつた声を出した。

「あ、あれはワ」「バカな！ 何で、こんなところに居る！」

傷風もその姿には見覚えがあつた。かつて傷風と二度にわたる対決を演じた相手だ。それは遠境の英雄、バトランティス家臣に服従をひるがえした、イズガルドの將軍。

「ダラベル！」

傷風は押むきでその名を叫んだ。

ダラベルはにやりと微笑むと、手にした青銅武裝「評議官剣」を親衛隊に向けた。

「イズガルドのダラベル、我によって滅亡する！」

銃剣音鳴り火を噴いた。一発でも強烈な破壊力を持つ大口徑の種子弾が、連発で親衛隊を襲った。巨大な火柱が

次々と上がり、親衛隊の立っている地面ごと燃り返してゆく。たった一つの背後で、ダラベルはそれを見下し、傷風の近くに着地した。

「まだ生きていたか、キズナ」

素っ気ない台詞だが、どこか嬉しそうな声だった。

「ダラベル、どうしてお前が——」

「どうしてとは？ 叛隊だ。せつなく叛隊に駆けつけてやめたというのさ」

「ちよっと、二人とも、話は後にして、弟が解体しに来たから」

二人の会話を遮って、緑色の美しい髪のお女が降り立った。

「アルディア！」

「さあ足速い船を待たせてあるわ。吾国の戦艦なんか簡単に海に切り切れるから、さっさと逃げなさい」

アルディアが言い終わると同時に、突如と吹き抜けた。風が海を巻き、煙霧を吹き飛ばしてゆく。

煙が晴れた向こうには、手を突き出した愛音の姿があつた。

「傷風っ！」

愛音が地面を蹴る。陥没した穴と引き替えに、愛音の体を傷風に向かって喚び出した。

同時にアルディアは手にした槍で足下の地面を斬り裂く。その瞬間に、愛音との距離がぐんと離れた。

「これは——」

不承知な現象だ、愛音は口を見張る。

周りにいるはずなのに、一瞬にして姿が薄くなった。

愛音の脳裏に、以前タムでアルディアと戦ったときの記憶が蘇る。アルディアの暗黒装甲「ゼエル」には六枚の板があり、それぞれに空間を移動させる能力がある。あれは暗黒の影に姿を隠したのだ。今のは愛音と傷風たちの間にある空間を手のもつて、物理的に距離を遠くしたのだらう。

「——くっ、そんなもの、魔法解体なら——」

ゼロスの魔法陣が強い光を放った。

「今だ！ 飛べ、キズナ！」

ドラベルの手に従ひ、全回スラスターを全開にした。ドラベル、アルディア、ガートルード、そして偽魔が空に舞い上がる。足下では、ゼロスの魔導陣が徐々にその直徑を広げてゆく。それを見て、偽魔が全回には事を欲した。「あれに巻き込まれたら、終わりだよー」

しかしドラベルに騙てた様子は無い。

「心配するな。それより、前に氣を付けろ！ 乗り遅れるなよ！」

「なに？ 何の話だ……」

上空の雲が割れて、細身の高速艇が現れた。

飛び上がるタイミングを持っていたかのように、偽魔たちに向かつて突っ込んでくる。

「うわあああ！ ぶつかりやがりますよおおっ！」

ガートルードの絶叫どおり、その高速艇は偽魔たちに向けて、速わずに衝突して来た。四人は衝突の衝撃に耐え、何とか平衡にしがみつく。

「よし！ 飛ばせっ。あの魔導陣に掛まつたら、一番の終わりだぞー！ 魔導機関が燃え尽きるまでぶっ飛ばせ！」

高速艇はすでに魔導陣勢に入っているらしく急激に加速中だった。城壁を飛び越え、あつという間にゼルティスの山から遠ざかる。

「助かったぞ、ドラベル！ にしても、遅っ遅いお遅えだぞ……」

「ふん、文句があるなら置いてゆくぞ！ こちらもゼルティスの情報に未だいたのだ。それが、お前らが起こした騒ぎのおかげで付添した」

「そうだったのか……すまん」

「い、いや、謝る位ではない。行き先をりよ、見送るものも覚悟が悪いからな。その、知るか牌でもないし」

「何言ってるのよ、もう、キズナがいるって知った連中、飛び出して行っちやうんだから」

「な……アルディア！」

「ふんだ」

アルディアはムッとした顔で、遠き遠き船尾を向いて叫んだ。

「もっと加速して！ 魔導機関が音を上げるまで飛ばして頂戴！！」

アルディアの声に反応し、高速艇はそのサイズに適合しない巨大なエンジンに響きをくれる。大抵の魔力の付子と

推進力を吐き出しながら、あつという間に地平線の向こうへと飛んで行く。

ゼルティスでは、行き場のなくなつた偽魔解体の魔導陣が、雲の体の周りを回転していた。そしてその雲は偽魔が消え去つた空を、じつと見上げていた。

「偽魔……」

Chapter 2 - A Day Off in Izgard

## イズガルドの休日

ゼルティスの王城にダレイスの声が響いた。

「姉様、いったいどういふことじゃ？」

「盗賊を取り逃がした愛音は、自分の部屋に戻って来るなりベツドに倒れ込んだ。ダレイスが部屋に飛び込んでみると、その状況だった。

「愛音はベツドに伏せたまま、身体を一つせずに答えた。

「……どういふことですか？」

「先程の城下町での騒ぎじゃー。決まっておるうー」

「悪い姉様のダレイスと対照的に、愛音には生活がない。

「どうもどうもないわ。盗物を取り逃した……それだけのことよ」

「ダレイスは不満げに口を結ぶと、怒りで顔を真っ赤にした。その後ろから、ゼルシオーネが顔を出す。

「しかし報告には、アイネス様の部下の犠牲により、親衛隊が武器解除をされたとありますが……これは一体どういふことでしょうか？」

「あたしの権限は手を出そうとしたからよ」

素っ気ない姉の態度に、ダレイスの目が半眼に閉じられる。口元は嘲笑的な微笑みが浮かんだ。

「姉様の意思には懸念するところもあるが、結果だけを良くと残念であったというところじゃな。ゼルシオーネ、もう少し姉様の様子立つ騎士を派遣して差し上げるのじゃ」

「かしこまりました。先日編組した陣は隊を強化致します」

「その対応が済み次第、姉様の事がイズガルドへ向かう。我がバトランティス王国に身向かうキズナ、ドラペルを威嚇し、改めてイズガルドをバトランティスの支配下に置くのだ」

はじかれたように、愛音が体を起こした。

「そんな勝手だ！」

その時、ドアを叩く音がして、聖司四郎のラムザが赤い服を脱ぎ捨てて姿を現した。

「どうしたラムザ、今は大事な話の最中だ。入ってくるなと言っておいたのだぞ！」

「でも、御社の御社が大家なんですか！」

「今さら何を言っておるのじゃ！」

ダレイスの側近は、ラムザは説きあげた。

「え、それが……」

泣きそうなラムザは、ゼルシオー本はただならぬものを盗み、窓に駆け寄った。窓を開けバルコニーへ出ると、空を見上げた。

「あれは……」

天高くそびえる真四角な柱、銅製の扉柱が傾いていた。それまではまっすぐ立っていた柱が、斜めに傾いている。しかも、表面には今までにない大きな亀裂が入り、銅板がゴロゴロと傾け落ちている。

バルコニーへ出た愛音とダレイスも、その様子に息を呑んだ。

「そんな……柱が傾けかけているぞ！」

銅が剥落ちた壁片がゼルティスの首へ落ちてゆく。壁片といっても、一辺が数十メートルにも及ぶ物もある。道路や建物を押し流し、街は大混乱に陥っていた。

「テロス！」

ゼルシオー本は機織機を身に付けると、フロートインダウインドウを揺つて聞いた。

「緊急事態だ！ 落下しとくる壁片を緊急回避せよ！ 緊急回避を準備しろ！」

「了解！」

ウインドウの向こう側から彼をだしい急事が次々と現れてくる。

「彼々も行くぞ！」

「は、はいっ！」「バエル！」

飛び立つゼルシオー本に続いて、ラムザも慌てて機織機「バエル」を身に付ける。そして御社の扉柱に向かっ

て飛んで行った。

その姿を見て、ダレイスは堪らぬ声を漏らした。

「いよいよもって、か——」

「ねえ、ダレイス。この崩壊を止める手段はないぞ！」

ダレイスは言葉を噛み潰したような顔で黙り込む。そして右腕を上げると、どんとと床を踏みならした。

「ラムザは回をしておるのだ！」

ダレイスはバルコニーのテーブルをつかむ。力一杯にひっくり返した。置いてあったグラスや瓶がはじけ飛び、床に落ちて砕け散る。

「破に任せたのが間違のじゃ！ 御社はレムリアの人間、期待などした者が無かった。即座、奴の命を——」

「お呼びでしようか？」

静寂いな床と壁をかな声で、部屋の中央から届いた。

「……御社の！」

愛音の部屋の扉扉中央で、白衣にも似た白いコートを羽織って聖山多が立っていた。

「いつからそこだいた？」

初めようとしてダレイスの視線を意に介さず、聖山多はにこやかに答える。

「たつた、来たところですよ。丁度、パトランティスの外務省の機密状況をまとめた資料が上がってきたので、その報告書をお届けに参りました。」

聖山多は扉に貼った書類の束を手に取り、ひらひらと眺めた。そして、ちらりと傾いた御社の扉柱を見つめ、

「ええ、すぐにお話ししなければならなりませんね！」

そう言いつつ、にこりと微笑む。その余裕の態度が、ダレイスの神経を逆撫でした。

「ラムザ！ 貴様を助けていた御社の修復はどうかになっておるのじゃ。結果、一刻の猶予もたらぬぞ！」

「はい。電力プラントを増設して対応していたのですが、それにも限界があるようですよ！」

「だつたらどうするのだ？ 緊急次第では、貴様をこの場で成敗してくれるぞ！」

いきり立つダレイスを、聖山多は俯つたようなまなざしで見つめた。かんしやくを秘す子供を前にした母親の

ようだ。

「今は新たな手段を講計中です。何もなく、御妻の御性の正しい使い方、またその修復方法について情報が得られるかと思います」

「なに、さう」

「御妻の表情が浮かんだグレイスだが、すぐに却って顔をしかめる。

「この顔がそんな話を持つてくると言ふのが？」

「誰でもあります。御妻の御性自身に教えて頂きます」

グレイスの表情が再び怒りに染まった。

「貴様、彼を慰めるのか！」

「愛憎も情を言せる」

「言葉の意味が分からないわ。一体何を、金でいふの？」

「恥をすくめ、御妻は当然のように答へた。

「御妻の御性に舞まれた神文、あれを解説します」

「なんじやとり、あれは古代文明の文字じゃ。読める者など誰もおらぬ！」

しかし御妻事は黙然と微笑んでいる。グレイスは御妻事の言葉を端から借用していないが、愛憎は燃った。

「この人なら、やるかも知れない」

「本当に……そんなことが可能なの？」

「ええ。然し、今しばらく時間がかかるのと、さらに魔力を喰う必要があります。レムリアの魔力プラントを増強する許可を頂きたいのですが」

「魔力プラントの増強」

その言葉を聞いて、愛憎は胸をぐくられる思いがした。

結局、自分は地球のみんなに敵いことをし続けていても、自分が平いから、相手が自分の言うことを聞いてくれないからといって、強引に相手をねじ伏せて言うことを聞かせている。これでは、偏見が燃えるのもまた。

だが、グレイスは今さら何をという顔で回答した。

「構わぬ。好きなしろ」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。

「さういふと、御妻事は顔を下げた。

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」

「さういふと、御妻事は顔を下げた。」



部屋の中を監視が支配していた。全員の息を呑み、一枚の紙に意識を集中していた。マスターズのリーダー、スクリット・フエアチャイルドは、ごくうと息を吐き出す。その紙に手を伸ばした。

スカーレットの指が紙の端をつまむと、ヘンリエッタが凄惨のような声を上げた。

「あ、見てしまうのですか。」

その声に驚いて、スカーレットは思わず顔を離した。

「し、仕方ないじゃないの！ 見るために用意したんだから！」

「で、でも……私まだ心の準備が……」

アップにした鏡はブラチナブの顔まで写つてたり、メガネの鏡像を直したりと、ヘンリエッタはいかにも落着かない様子だった。

その横では、レイフが先程から時計計を見つめていた。

「こうして時計回しとにらめっこを始めてから五分、この緊張感による精神的苦痛を、想像以上に耐えさせてもらうわね？」

「十分たり百ドルってところで」

「誰があなたに対して賠償責任があるってのよ！」

異世界に來てもレイフは相変わらず金の「器」だった。スカーレットも有様以財でジョココを入れる。

オレンジ色の髪を三つ編みにしたタレメンタインは、イライラした様子で部屋の中を歩き回っていた。

「いつまでこうしてんだよ。もう、さっさと見ようぜ！ どっちにしろ結果は出らまってるんだ。神の支配を拜もうじやないか？」

現る一人、グレーの髪をしたシヤロンはいつものゴスロリ服ではなく、ステージ衣装を身に着けていた。特に肩も言わず、じつと威嚇行きの目等っている。

「ね、分かったわよ。いいわね、見るからね！」

スカーレットはトキドキする胸を握り、紙をゆっくゆっくめくった。

「……おは」

全員が身を乗り出して、その紙に顔を近づける。

「まやああああああッ！」

「ちくしょおおおおおおおおお！」

「ああーんっ。ざんねえええんんっ」

「ええええええ、こんなの罰金よ！」

「……おっかり」

スカーレットは、ぶるぶる震えながら、その紙『新劇ランキンダ連環』を覗しめた。

「一位……マスターズは二位、そして一位は……」

ヘンリエッタは頬を赤くして、焦った表情を浮かべ、

「全通も、素晴らしいわね……」

「くっそ、不動の一位だんね」

ここは京都・上野にあるパトランティス劇場。その中にあるマスターズ専用の観客席だ。その階層は、先週の人気投票の結果が伝えられたところだった。ここしばらくは、天降の女神とマスターズのワン・ツー・ファイニッシュの連続だ。いや、正しくは第三天降の女神がトリプで、二位はマスターズである。勿論、地元パトランティスのアイドルやアーティストもいるが、レムリアから来たこの二組が、圧倒的な人気を誇っている。

「しかーし！ 万幸二位ってのは嬉しいわね。アイドルでもユリシアの活躍を押し続けるだなんて……このままじゃ世界一ナンバー一の女と呼ばれてしまうわ！」

「でも……どうするの？」

シヤロンは隣席の女に声を掛けた。

「どうもどうもねいねい！ 作戦会議よ。今夜は勝負の良機とて、天降の女神とのジョイントライブ！ ここで、あたしたちの実力を思い知らせてやるのよ！」

スカーレットが手を交わすと、全員それに倣って「おおーっ！」と腕の声を上げた。

「とりあえず、どうしたら収めに勝てるか。ナイスでゴッドでクールなアイデアを出しなさい！」

「もつとカントリリー風だ、カウガールな感じ！ それとガングアイト！」

「瞬間でメガディアを消費！」

「衣装をゴスロリ風に、あと客のドレスコードもゴスロリで」

「トレーニングとパフォーマンスを倍に……」

「あんなたち、バカじゃないのけ！」

スカーレットが平気だ。

「ええっけ。私の案もけ」



「真面目な家を出したヘンリエッタが、位きような漬を出て、

「……あなたも、何やってるの？」

ドアの隙間から、聲を浴せたユリシアが覗いていた。

「あーっ！ この万年一位！」

「スカーレット、それって褒めてるの？ それともけなしてるの？」

「両方よ！」

ユリシアは頭痛がするかのようになを揉みこんだ。

「で、何の騒ぎなのよ。隣の部屋まで騒ぐんをわよ？」

ここはトランティス宮内閣では、天降の女神とマスターズの棲み家は隣同士だ。奥にトッパアイドルをのこ一番のフロアを使っているからであり、また暇なものの可能性を考えて見張りやすいように「横にしている」といふ意図もある。

「どうやって天降の女神に勝つかの……チンギスよ！」

「自分とエキサイトした……チンギスなのね……でも、ランキングとかどうでも良いじゃない？」

「そこは真ん中、ここは真ん中のよっ！」

「むたくしがこう言うのも何だけど……あなたも、何でアイドル活動をしてるの？ 何か夢がある……ないと思ってるの？」

「ユリシアだってやってるじゃないの。別にあなたもがアイドルやってても、おかしくないでしょ？」

「別に構わないけど、何だかスカーレットたちは本気でアイドルをやっているみたいに見えるから。完全に目的を見失っている気がするのよ」

スカーレットは、意味が分からないという顔をした。

「もちろん本気でアイドルをやっているわよ？ 目的はトップアイドルになることだから、別に見失ってはいないけど」

ユリシアは開いた口がふさがらなかった。

「……えっ……みんなもそれでいいの？」

ユリシアは心配そうな顔でマスターズの面々を見回した。

「それは……」

全員、口ごもった。誰からも返事がない。

「ちょっと、あなたを……いって答えないよっ！」

両手をぶんぶん回して、スカーレットが怒った。ユリシアは、やれやれという様子でスカーレットの腕に手を置いた。

「あのねえ、わたくしは……あなたなのよ？ 本来の目的を見失って……」

「だって、彼に出来ることがないんだから仕方ないじゃない。アイドル活動しなければ、あの本願に届くことが出来ないじゃない？ それって誰か幸せにならないじゃない？」

ける……とした顔で、スカーレットは答えた。

「アイドル活動は、あたしたちも楽しいし、トランティスの一般市民も楽しんでくれるでしょ？ あたしたちが本願に届くのも……それって誰か幸せじゃないけど、あたしたちが歌って踊れば、大勢の人が喜んでくれる。だって、その方がいいじゃない？」

「スカーレット……」

ユリシアはあつげにとられた。ヘンリエッタも開いた口がふさがらなかったが、ふっと微笑むと納得したように見えた。

「確かにそうですね。我々は敵と戦ってはいますが、それはトランティスの軍隊と戦っているのだから、トランティス市民と戦っているわけではありませんね」

たちまち、和気藹々とした空気が生まれる。ユリシアは顔を赤くし、仕方なさそうに微笑んだ。

「え、スカーレットらしいわね。あなた自身も、今のマスターズも」

スカーレットは鼻をうごめかせ、得意げに胸を張った。

「当然でしょ！ あなたはマスターズのリーダーなんだから！」

「そうね。その通りだね」

ユリシアは安心したように笑うと、部屋を出て行った。そして、ドアを閉める直前に振り返り向いて言った。

「でも、わたくしは一般の民衆を導く気はないわ。じゃあね、万年一位さん♥」

「な……」

愕然とした直前でマスターズの面々は固まった。そしてユリシアは、ばちっとライントをしてドアを閉める。

その直後、マスタイズの塔の中、時計が動いた。



傷無が目を見ましたとき、自分がどこにいるのかわからなかった。  
「ここは？」

白い天井に白い壁。部屋の中には植物と木のテーブルが置かれ、開け放たれた窓からは朝の光や風の音がそこよいでくる。風に揺られ、レースのカーテンが優雅になびく。

静かな場所の良い白いベッドから体を起こすと、傷無は床に足を下ろし立ち上がった。床の床がひんやりとして気持ちが良い。壁に鏡があり、起き抜けの自分の姿が映っていた。

着ている服はここに着ていたものであったものだ。日本の服や洋服、似た形をしている。オファタスするときに着る、深層着や隠し着のようなものなのだろう。

「そうだ……ここはダラベルの国、イズガルドの首都、確か、アルジエント……だったか」

風に揺れるカーテンを開けると、美しい光が降り注いで、

「うわ……」

窓の外には美しい海が広がっていた。澄みのある青色がとても美しく、波が打ち寄る音が聞こえる。波が白い線を描き、静かに海岸へと打ち寄せている。泳げるような感覚とそこに浮かぶ真っ白な雲にも、「現の海は深い。強い太陽の光に、全てのものが隠し事なく明らかになっている。ここには何の隠し事も、裏表もない。ただありのままの自然と、美しさがある。そんな印象を留めさせる的めだった。

その壁の隅に置かれたように、傷無はバルコニーへ出た。すると境界が広がり、海辺の街の様子がよく分かる。砂浜には椰子の木が良く似た木が生えている。地球の椰子の木も背の高い木だが、この砂浜に生えている木は大きいもので白大理石はあろうかという白木だ。その足下には青が低い、しかし樹に大きく枝を広げた木々が倒しそうな美観を作っている。その木から色とりどりのペンダントランプのような花が下がりついている。明らかに地球には存在しない植物だ。

小鳥の鳴き声がして、バルコニーの手すりに何かが飛んできた。

「な、なんだ？ こいつは……」

まるまるとした球体に羽が生えている。円い体にはやはりまん丸で小さな瞳と、申しわけ程度のくちばしが付いている。

「鳥……なのかい？」

円い体を回り、首を揺るがせるような仕草は可愛らしかった。思わぬ傷無が傷でようとう手を伸ばすと、その生き物は傷無の手から逃れるようにぱつと飛び立った。そして海岸から離れ、緑の木々を飛び越えて行く。その先には、石造りの海沿いの道が通っていた。その道から街が始まり、白壁にオレンジ色の屋根という、南の島や東洋に似ていたリゾート街に似た建物が見えてくる。パトランティスのセルチイスとはイメージが百八十度異なる。海沿いに船着し、い明るく緑豊かな街だ。

傷無の背後で、ノックをする音がした。

「お……もう起きていたか」

ドアを開け、ダラベルが入ってきた。

「ああ、おはよう。ダー」

いつもの部屋ではなく、ホルター・ノックのワンピースだった。肩や背中、胸の露出が大きく開き、ゆるやかに広がった裾から裸足の足が見えている。髪には南国風の花を飾り、髪をかきで女性らしい容姿を醸し出していった。

「どうかしら？」

「ダラベルのそういう容姿初めて見たから、ちよつとびっくりしただけだ」

「え、お……おかしい。か？」

不安げに顔を覗かせるダラベルが、傷無は慌てて手を止めた。

「いや、よく似合ってる。女の子っぽいというか、可愛いし」

「か……？」 あ、朝から何を言ってる、いるのだからね」

ダラベルは赤くなった顔を隠すように、そっぽを向いた。

「え、それで、どうだ、気分は？」

「よく眠れたし、気分爽快だ。ダラベルのおかげだよ、ありがとう」

その音に、ダラベルは紅しそうな笑顔を見せた。

「うん……それは何よりだ」

ダラベルは腰指を立ててドアの方に向け、

「朝食を用意してある。一緒に食べよう」

「何から何まで悪いな」

偏黒はダラベルの隣について階段を下り、大きな窓のある廊下を抜け、廊へ出る。壁の左側の向うに背の高い木が並んでいて、その隙間から青い海が覗いている。バルコニーから見えた景色の中を歩いてゆくと、木陰の中で、真向のような建物だけの建物があった。

「あー、偏黒の住居。おはようでー」

建物の中からガートルードが手を振っていた。しかし偏黒の隣にいるダラベルを見た瞬間、振っていた手をひたりと止める。そして、今にも噛み付かんばかりの怒りで、ダラベルを睨み付けた。くるるといううなり声が聞こえてきそうだった。

「おい、ガートルード。昨日の夜も話したけど、今は……」

たしなめるように偏黒は話しかけた。

「わかっているです。今は個人的な恨みをどうこうしてと都合じゃねえです。ただ、理屈ではわかっているですが、理屈じゃ割り切れないやがりますよ」

以前ダラベルはアタラクシアを攻撃したことがある。ガートルードはそのときダラベルと戦い、大怪我を負った。そのおかげで、長い間の入院と療養<sup>リハビリ</sup>の生活を余儀なくされたという過去がある。ダラベルに睨みを向くのも無理からぬ事だった。

「まあ昨日聞いてくれたことで、チャラとはいいませんが、少しだけ質しを返してはもらいましたかね」



ちゃんと顔を背け、ガートルードはソファに体を沈めた。

ダラベルは弱った、という顔をして、素直に頭を下げた。

「すまなかった、ガートルード。これから悔いを全て返済出来るよう努力する」

ガートルードはきょととした顔で、顔を伏せたダラベルを見つめる。何だか弱すかしを食らった気分だった。

「え、まあ……そうするがいいです」  
決まりが整うに再び顔を背けた。

側面はとりあらず端が収まったことにはほっとしつつ、ガートルードの向かい側に座っている緑色の髪の美しい女性に挨拶をした。

「おはよう、アルディア」

「ん」

アルディアはちっとと視線を逸つただけで、気だるそうなまなざしを海へ向けた。アルディアもダラベルと同じような服を着ていた。民族衣装なのか、それともリゾートファッションなのかは分からないが、二人とも良く似合っていた。

そして自分と同じような、其半端の服を着ているガートルードも、これはこれで妙に似合っている気がした。ダラベルと側面も、側面の下に入るとテーブルに着いた。

車庫といつても、作りは立派だった。大きな柱に建物の影が落とされていて、屋根から垂れ下がっている布も、網のようになめらかで美しい。中央のテーブルが置かれ、それを囲むソファは表面は漆がく、それでいてしっかりと骨組みを支える絶妙な厚みがあった。涼しい風が抜けることもあり、油断をすることなくてしまいたい。やがて、結社の女性が朝食を運んできた。

それはパンとスタンプアルエツダ、ベーコンに野菜と煮るで塩味の朝食のようを見た目だった。しかし一口食べると、素材が違ふことが分かる。パンは中身がふっくら詰まっている印象で、卵も甘みが強い。調味料の味をのこ調味料によるものか分からないが、ベーコンと野菜も独特の香りがした。

「変わった味だけど、美味い」

「まったくですね。同だが、ここの世界の味に慣れてきた者がりました上」

アルディアは笑ったように二人を見つめた。

「洞察力が高いのね。私なんて、レムリアの味にふさわしく、料理人を同行させていたのに」

あつという間に平らげると、ミントのような香りのする新鮮で甘い飲み物が出された。ダラベルはそれを美味しそうに口にした。

「私はレムリアの料理も味いではないが、沖縄に馴染んでいたときも、琉球の料理を食しただけものだ」

ダラベルの言葉に、アルディアはあからさまに嫌うような顔をする。側面は側面の顔を思い出した。

「側面か……誰か、ここは沖縄っぽいかな」

そう口にしたとき、側面から側面がイルカのようにジャンプした。

「なに？」

それが驚かすかどうかは分からない。しかしラジオのように巨大で、首が長く、手足がひねになった見た目は海生動物の首長竜そのものだった。

「ああ、あれはアレシアといって、側面が主賓の大人しいやつだ。海外と人柄が違って、海で遊んでいると違って、くることもある」

「さすが側世界……あなたどれくらいでいやります」

「そういえば側面ではアレシアみたいな生物は見なかったな……」  
ダラベルは遠い目をして、海の底を見つめた。

「また訪れたものだな……キズナと初めて出会ったのも沖國に到着していた時だったしな」  
要するようダラベルを、アルディアはムツとした顔で睨み付けた。しかし今のダラベルはどこ吹く風で、キズナに話しかける。

「キズナは……イズガルドは気に入ったか？」  
「ああ、とても良いところだ。こんな綺麗な海は見ることがないし、泳いでみたい」  
ダラベルは、ばあっと腹の腹いたような笑みを浮かべた。

「そ、そうか。それでは泳いでみるか？ せっかくだから、一緒に」  
あれだけの笑顔を見ると、どこまでではないが断れない。側面はうなずくと立ち上がった。むすっとした顔のアルディアと、側面を笑みをしたガートルードも一緒に、車庫を出て沖國に向かった。

沖國を歩いた。沖國にも海にもゴイ一つない。側面は満足したが、足が妙に成り慣れが実心心地良い。目差しの向いにもかからず、沖の奥度は測れないくらいあって、足を滑しくマナーチンされているような気がした。

「それにしても、海たちの地には誰もいない」

「まだ、大したものではないさ、それよりも泳ぎに……あ」

そこで初めて気付いたように、ガラベルは流力に翻れた。

「水着がなかったな……」

胸が露出でもあるのかと思つたが、そんなことはなかったようだ。

「あら、別にいいじゃない」

アルディアは首の後ろへ手をやる。胸が上に引つ張られるように持ち上がり、露わになつたつらさとした脇の下がまよふかつた。服の結び目はほどくと、解放された胸が重力に倒つて、よるんと弾むように軋がり出る。

「うわあ、おい！」

横でる側面をあざ笑うかのように、アルディアは胸の結び目はほどく。呼吸としていたガラベルが、はっと我に返つた。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

「え、待てアルディア」

制止の声を上げたときには、既にアルディアの下半身を包む布がふわりとほどけていた。大きく張り出した脇からすわりと弾びる胸。さんさんと垂りつける自然しの中、白く艶やかな裸体が水すところなくさらされた。

「なあに？ ガラベル、今さら隠すような顔しやないでしょ？」

アルディアは恥じる様子もなく、腰をくねらせる。

「は、バカ、キズナもいるんだぞ」

側面は初めて見るアルディアの全身から目が離せなかった。完璧なプロポーションときめ細かな白い肌。小さな首から細い首、顎、喉、そして一転柔らかい肉質でふくらみ果てた乳房。そこから一度きつと絞り込まれてから大きく広がる豊満のあるお尻。太ももと足の毛と胸に緑色の陰翳から響く、きらめく海の輝きが美しい。これがかつて解體を済した相手のものと比べると、不思議な感動があった。

アルディアは頭をかきむしった。

「あーもう、何でキズオを取り合ふことになつてゐるのよ！」

無言に無言とガラベルの間に人をも、ガラベルの手をつかんで海へ引つ張つていった。

「お、おいアルディア」

「海で遊ぶんでしょ！ さつさと入りましょうわー！」

海へ走つてゆく二人のお尻がふよふよと揺れる。白く艶色の裸体が清くも輝へ飛び込んでいった。無言は頭をかいて、ガートルードに話しかけた。

「なる、お前はさうすーなあつて」

「ガートルードもさう思つた」

「どうに無言は、さうでいやがりますよー」

ぐつと波頭を立てて、舌をべろつと出す。

何というか、全然色気がない。腰に手を当てて、「王立ちのガートルードは、天竺鰐鰌の子供のようで実には偉えまじい」

「よし、じゃあ俺たちも行くか！」

潮と木気で波頭を走つた。だがガートルードは驚くほど足が滑く、あつという間に引き離される。一旦先に進行

を前に倒置するも、くもりと振り向いて無言に向かつて片手を広げた。

「ちよつと待った！ 無言はその時刻で海に入るつもりでいやがりますか？」

確かに無言は無言のままだった。

「な……お前、まさか」

「さうです！ 旦那もなりやがれです！ すっぱんぼんに！」

「なんだつてーっ！」

「うむ、確かに、私たちだけを裸にしておいて、自分は服を着たまゝというのは、いかげなものだろうか？」

「さうよねえ、あれだけじろろ、無言さんですもの。まさか、自分は裸だなんて……言わないわねえ！」

「く……わ、わかつたよ」

三人から無言を受け、無言は上着を脱いで裸海に投げた。そして下にも手をかけ、ゆつくりと歩いてゆく。じ

つと見つめる女性陣の目が、ギラギラと輝いて見えるのは気のせいだろうか。

「ええい、ままよー」

「早く切つて下も脱ぐと、上着と同じように砂浜に投げた」

「お、ああ……」

ガラベルの返事は上の声だった。二人とも顔を赤くして、じつと無言の腰廻りを監視している。何と不思議な力であつた。

「あれが……男という生き物の……すごい」

ぐくぐく、とアルディアの喉が鳴った。

「うん……あの形……あれは、やつぱり……」

無言は赤い顔を赤くして、ガラベルは無言の手に手を握り、自分の股間にそつと触れた。

アルディアは熱い吐息と共に、舌で唇を濡らす。

「ああ……何なの、不思議……見てみると、何だか体が落ち着かない……でも、どうしたらいいの？」

ガートルードも赤い顔で恥ずかしそうに笑った。

「じや、腹置で倒つたのと、ちよつと泳いでいやがりますか？」

一人一人の言葉を聞くのは、あまりにも恥ずかしすぎ、無言は海に飛び込むと、女性陣に向かって水をかけた。

「うわっ！ 何をやる、キズナ」

水を浴びてお尻に貼つたガラベルが、手で水を浴びながら文句を言つた。

「イズガルドの女陣がこんな攻撃で無言を？ 大したことないな」

「ははは……面白、受けて立つぞー」

好意的な無言の水を浴び、ガラベルが両手で水をかいて無言に浴びせかける。その度に無言の胸がふよふよと揺れる。

「ふわっ！ く……やるな」

「ふははは、当たり前だ、この私を驚かす……ひゃんっ！」

頃からガートルードが水を浴びつくり浴びせかけた。

「大怪我させられたね、ここで睡かさせてもらいますよ。」

「や、再会ならば望むところだ」とあつて――

両手のピッチを上げて、激しく水をかける。

「や、やりやがりますね！」

水しよきがはじけ飛び、太陽の光を受けてきらきらと光る。水しよきがガートルードの顔に奇麗なくかり、したたる水が平らな胸を滑り落ちる。

傷痕のかけた水にドラベルの顔中をしっかりと濡らし、首から胸元を流れ落ち、腰毛の股から滴り落ちた。アルディアが白い胸を濡しながら、傷痕に水をかける。

すかさず傷痕がやり返す。傷痕の境はしたたかにアルディアの白い肌を濡りかかると、水が胸元を流れ落ち、大きく揺れる胸の奥から手が震んだ。

「まっ、まっ」

海中の砂に足をぬられ、アルディアが倒れそうになった。とっさに傷痕がアルディアの手を伸ばす。

「おっと……大丈夫か？」

「あ……」

アルディアは傷痕の胸に抱きしめられる物好になつた。自分とは違う平らで暖かい胸に、頬と手の平を寄せる。腰に固められた傷痕の手の平を感じると、そこから肩にかけられ、水が濡れるように熱くなる。そして抱きしめられることで感じる、傷痕にあつて自分にはない器用。それが押し当てられると、不思議と頭がぼーっとしてきて、頭が抜けそうになった。

「どうかしたか？ 足でもひねつたのか？」

傷痕は心配そうにアルディアの顔をのぞき込む。紫色の瞳に、きらきら光る魔力の輝きが泳いでいた。

「これは……産後回復の？」

傷痕がそうつぶやいたとき、アルディアは我に返つて傷痕を突き飛ばした。

「うわっ」

傷痕はひっくり返つて海に倒れた。その姿を見て、ガートルードが唇を歪して笑ひ、ドラベルも笑しげに震えんだ。しかしアルディアは自分の中に生まれ、甘くもやもやし太切ない感覚と、ときめく胸の内を持てず、腹に

に引きつった虚実を浮かべるのが精一杯だった。

ひとときり遠くを泳ぐ。四人は海面上に浮つて体を揺れた、よく冷えた果物のジュースで一息つくくと、産後心臓の良のシリアに体を預ける。

「ああ、眠れた……けど、寒しかったな」

傷痕のつぶやきに、ドラベルも微笑んだ。

「そうだな、少し羽目を外しすぎたか」

「でも、いいんだ。ここが好きになったよ」

「そうか。だがイズガルドは海だけではいらず、胸にも色々とおかしい場所がある」

ドラベルは思いついたように、声を弾ませた。

「そうだ、今度は胸を案内しよう。もつと奥に入るぞ」

アルディアはあきれたように顔を吐く、じつと目と目でドラベルに目を瞬す。

「ドラベル、嘘しいのは分かるけど、はしすぎすぎないで。今ではあなたがこの国の指導者なんだから」

「え？ ドラベルって国王か何かなのかな？」

まさか、とドラベルは苦笑いを浮かべた。

「私はただの継子屋だ。現時下の暫定指導者として、臨時に私が指導系統を掌ねられたに過ぎない。それと、イズガルドにも王様はあるが、あくまで国の象徴であつて実力を持つことはない。政治に参加することもない。この国は憲法的には民主国家だ」

「戦争か。相手は……俺たち、ではないな？」

ドラベルの目が複雑なものに変わった。

「今の数々によつて最大の脅威は、バトランティス帝国ではない、ましてやお前たちレムリアでもない」

「それにヤ一様、何だっていうんだ？」

「世界の終末。その瞬間による、この世界の終わりで」

アルディアがテーブルに置かれた細長い金銀片を片手に、テーブルの上にフロートインダウインドウが立ち上がつた。金銀片はどちらやらソコンのようなものらしい。

「これを見て直感。この世界が今どういう状態なのか分かるわ」  
 ワインドゥには種々な草原の映像が映し出された。ただなかたに枝を広げた木が点在していて、羊のような手足の長い動物がのんびりと歩いている。

「牧歌的な眺めだな……これはどこの映像なんだ？」

「ここから北へ行ったところにある、ヘルシアという土地よ。ただし三年前の事。この美しい牧草地の映像がこれよ」

アルディアが画面を覗くと、映像が切り替わった。そこに映る風景は、傷風は悪わず誤いた。

「これが……本当に同じ場所なのか？」

「ええ、それが今のヘルシアよ」

フロアティンダインドゥに映っているのは、見慣れた風景だった。黄色い花が風に吹かれ、波のような文様を描いている。直前に映っていた緑の草原と異なり、どうしても給が付きにくい。

「これは……どこ？」

「これだけでは……他にも幾つもの牧草地や農耕地、森林が散見して聞かっている」

ワインドゥには次々と映像が映し出されるが、そのどれもがとてもではないが生活出来る土地とは思えなかった。

「地殻変動による大地の隆起という現象も起きている。巨大な地溝が形成し、そのために噴出した溶岩もある」

「大規模の地震が広大な平原に作られた湖の様子を映し出していた。ゼルティスのような巨大な湖ではないが、城壁に囲まれ、その中に都市が築かれている。だが、湖の水は、大地に大きな溝が走り、城壁の側を流す二つの分岐していることだった。その溝を中心に関わり地溝が広がって、街全体が今にも陥れそうな地面の上に、空うじて建っているような状態だ。少しパラシスを聞かせ、街全体が地下の洞へ陥れ落ちるだろう。」

「これは……ひどいな」

「このような現象が、イズガルドだけでなく、このアトランティス全体で起きている」

「アトランティス？」

「傷風は聞き覚えいかと思つたが、念のために訊いた。」

「アトランティスの国境にじやないのか？」

「ああ……キズナが知るはずもないが、アトランティスというのは、古くから知られるこの大陸の名前なのだ。ひい

てはこの世界全体をそう呼ぶこともある」

「地球にも、かつてアトランティスという大陸があったという伝説がある。傷風の「歌」だろうか？」

「ああ……そんな遠い昔、ダラベルは伝説を創する。」

「どうかしたか？」

「いや……つまり、その自然災害が創みの神話のせいだっているのか？」

「ああそうだ。あの柱がこの世界を支えている。逆に言えば、あの柱がなくなれば、この世界は柱を失った家と同じだ。潰れて、全てが終わる」

「そうか……愛音が言っていたアトランティスの危機って言うのは、このことか。」

「あの柱はアトランティスだけでなく、この世界全ての命を繋いでいる。今のアトランティス帝国は、この柱を、我々の命全てを預けるに値する国ではない」

「それで、戦争……か」

「ダラベルは重々しくうなずいた。」

「アトランティス帝国も以前に比べれば、力が衰えている。北のバルディーンに使者を送り、同盟の申し入れをするつもりだ。つい最近アトランティスと条約を結んだはずだが、アトランティスの一方的な侵略によるものと論じている。いざというとき戦ってくれれば、彼等の戦力差を恐るることも出来るかも知れん」

「成る程、いざ戦いが始まったなら、いきなり敵の戦力差を恐るることが出来るということだ。」

「それともう一つ……キズナ、レムリアも我々と一戦に戦って欲しい」

「なぜ？」

「……誰だちが？ 世界の国と同盟？」

「考えてみなかったことだ。」

「弱ったとはいへアトランティス帝国は強大だ。レムリアの戦力は我々より大きく劣ることは知っている。だが、キズナ。お前とその仲間たちの力は我々と同等かそれ以上か。それは同盟も倒さなれた我々だから知っている」

「ダラベルは重々うなずいた。まさしく正解に聞こえた。」

「だからお前に頼みたい。我々と一戦に戦ってくれ」

「しかし……」



「特にダリスとアイリス、皇軍特務の機嫌は強い」

「偏見の胸がどきりと跳ねた」

「あの軍閥をまでの能力を持つコロスとセロス、あれに好意を抱くのは、キズナだけだ」

「俺は……いや、俺のハート・ハイブリッド・ギアは軍閥だ」

「偏見はひきつった腹をみせかべた」

「非常識と言ひよりは——空想だ」

「ダリスの顔は紅い、冷やかしや、冗談ではない」

「キズナ、お前の忠告を、私たちに分けてくれ、このアトランティス世界全てを救うために」

「全てを救うため」

「偏見の耳の奥で、愛音の声が聞こえた」

「助けて欲しいの、それで……みんなが救われる、だから」

「アトランティスの半壁に陥落していたときの、愛音との会話が、あった」

「偏見は腹が膨らみ、手を握りしめた」

「分かっただけ、任せとけ」

「俺の一言で決められることではないが、一度向こうに戻って現状を確認してみろ、彼に手くいかかったとしても」

「……俺だけは、一歩に動かせない」

「その言葉に、ダリスの顔が赤く、和らいだ。偏見は、一國の軍隊を率いる将軍のものではなく、ただの少女の側だ、目を細めて偏見と抱きつづく合図を合した」

「キズナ、お前がいてくれれば……俺は」

「はい、それじゃ話が進まなかったところで、俺は退席する」

「二人の視線の間、アルディアが顔を見せた」

「アトランティス・インダストリーの映像が切り替わり、スタジオで司会者が話している姿が映った。テレビのニュース番組のようを愛音見た」

「ダリスは、こぼれと涙を一つずつ、アルディアに手紙を」

「これは俺の手紙なんだ」

「アトランティスの偏見よ、せつなくセルティスの近くまで行ったんですもの、敵の情報を得るために、中絶を」

「置いたまわ、愛音にされている能力を授けて、送ってきただけという愛音は、地面に埋めてきたから、そう」

「偏見には見つからないでしようね」

「なるほど、と偏見はうなずいた」

「軍事情報はともかく、アトランティスの内情を知る情報源にはなるかも知れない」

「アルディアはバカにするように顔を変えた」

「まさか一般市民向けの商業放送を盗用するだけと思っていないわよね？ 一番の目的は、アトランティスの軍事」

「兵器や軍事技術の能力を盗用することなんだから」

「そんなことも出来るのか、それは重要な情報源だを」

「偏見はそう偏見だ、アルディアは決まりが通りに顔を赤けた」

「ね、分かればいいのよ……」

「そのとき、ザリウムが急に上がったかのように、大きな声で叫び出した。画面は真っ暗な劇場を映しているようだった。照明の落ちた中で、きらきらと星のような光が輝いている。その画面のまま、アナウンサーの声が聞こえてくる」

「それでは次は皆さんお持ちかねのコーナー、今日の天候予報です」

「……お天」

「偏見は思わず立ち上がった」

「今日はアトランティス帝國劇場で、天候予報とマスタースのジョイントライブが行われ、果実つた観客のファンは夢のようなひとときを過ごしました」

「徳川やユリシア、シルヴァニアにスカイレット、地マススターズの両方が歌いながらステージを演奏しと駆け、踊っている」

「ガートルードは引きつった顔で、うめーという叫びを上げていた」

「いやー……改めて見ると、キングいすね、何かが身内の事を見かけられているような感じがします」

「劇場に集まるときはシロクダだった、段々と見慣れらにつれて、偏見も敵対心は減ったという、我が事のように思

「ずかしくなってきた」

「……お天」

「偏見は思わず立ち上がった」

「今日はアトランティス帝國劇場で、天候予報とマスタースのジョイントライブが行われ、果実つた観客のファンは夢のようなひとときを過ごしました」

「徳川やユリシア、シルヴァニアにスカイレット、地マススターズの両方が歌いながらステージを演奏しと駆け、踊っている」

「ガートルードは引きつった顔で、うめーという叫びを上げていた」

「いやー……改めて見ると、キングいすね、何かが身内の事を見かけられているような感じがします」

「劇場に集まるときはシロクダだった、段々と見慣れらにつれて、偏見も敵対心は減ったという、我が事のように思

「ずかしくなってきた」

「……お天」

「偏見は思わず立ち上がった」

「今日はアトランティス帝國劇場で、天候予報とマスタースのジョイントライブが行われ、果実つた観客のファンは夢のようなひとときを過ごしました」



愛音は顧客の方を振り向くと、ステージ中央に置かれたマイクまで進んだ。顧客席から起ちついていた騒声は徐々に静まり、顧客の言葉を受け受ける静けさへと変わっていった。

すっと一息吸ってから、愛音は顧客に向かって話し始めた。

「今日、ここで祖父と再会出来たことを嬉しく思います。かつてレムリアで出会い、共に同じ目標を持ち、共に戦い、そして今また手段は違えど、レムリアをパトランティスの傘下に収めるために共に戦うことを大きな喜びとします。」

顧客席から喝采の声と、拍手が沸き起る。

「しかし、顧客は小さくありません。その中でも最も大きく、貴族の皆さんも飲んでいることがあるかと思ひます。それは――」

愛音は目を閉じた。そのまぶたの裏に、種々思ひ出が次々する。

「レムリアの魔王のごとくダ・キヌサ。数々の魔導騎士を撃破した後は、我々にとって唯一の脅威でした。しかし、もう恐れることはありません。なぜなら――」

種々思ひ出を振り払うかのように目が見える。赤い瞳が決意に光った。

「このアイヌス・シンタラヴィアが、この手でレムリアの魔王を討つからです。」

その言葉に、会場全体が息を呑んだ。そして次の瞬間、場内は熱狂の渦に包まれた。

「故に、彼の名は万人であらうと手出しは無用。今後、あたし以外が僥倖に手を出すことを禁じます。レムリアの魔王は――」

愛音はマイクを握り、叫んだ。

「あたしの権威よ！」

人々が声を合わせて、アイヌスの名を叫ぶ。そのコールが響けばかりに張り響き、席みならず果音が床を揺さぶる。

ゼンティスの街中でも、鼓動を見ていた市民が興奮して騒ぎ始めていた。

愛音は会場とカメラに向かって手を振っている。

その顔は笑っている。

どこか遠くをまなざしをして、

「いやあ、突然の皇帝の魔王討伐宣言！ 驚きましたねえ」

画面が切り替わり、王城の近くに集まっている魔導騎士が映されていた。

「魔王キズナ討伐の準備は着々と進んでいるようです。現在、イヌガルド方面に激戦中との情報も入っています。」

これはアイヌス様の大規模な演習になりますね」

アルディアは全戦況を操作し、フローティンダウインドウを閉じた。

誰も言葉を発しなかった。

一帯始終を観戦わった傍聴席、招待者の整列をするのに必死だった。海からやって来る波音と海風が、傷心の心をなやなように優しく体をなでてゆく。

黙り込んだ傍聴席も、アルディアはいちいちのたふたふに寝かされる。わざとらしく息を吐くと、ソファに背中を預けて反っくり返った。

「それでどうするのよ、レムリアの魔王？ アイヌが来るとのことには、パトランティスの大軍が押し寄せてくるってことよ？ 全力で来られたら、私たちではひとたまりもないわ」

しかしダラベルはにやりと笑った。

「いや、むしろチャンスだ」

「え？」

アルディアはきょとんとした顔で首をかしげた。

傍聴席も思わずダラベルの顔を見た。その視線を持ち續けていたかのようだ。ダラベルはじつと傍聴席のことを見つめていた。

「どういふことなの？ ダラベル」

ダラベルは唇をすくめて笑った。

「イヌガルドとしては、パトランティスに抵抗の意思はない。パトランティス軍を喜んで受け入れるし、協力もしよう」

アルディアは身を乗り出した。

「ちよっこー それじゃ――」

片目をつぶって、ダラベルはいささか下っぽく微笑む。

「ただ、イズガルド軍は断断で暴走をしないで、断固と戦え、何せ、非常事態として全権を預けた将軍が決心したから。イズガルドとしては、どうしようもない。パトランティス軍が到着したときには、イズガルド軍はレムリアへ向かったのだって——というのはどうだい？」

「傷兵は思わずに話を打った。」

「そうか！——一度、海軍から増援へ行つて、向うも側の世帯で暴動をすればいいんだ。そうすればパトランティス軍とぶつからずに、アダラタニアと交渉出来る！」

「グラベルはうなずいて、言葉を引き締く。」

「その頃には、パトランティスのほとんどどの戦力がイズガルドへ来ていただろう。」

「傷兵は興奮した顔持ちで叫ぶ。」

「ロンドンの衝突面から突入すれば、奴らの本拠地、ザルティスの王城はすぐそこだ！」

「不敵な微笑みでグラベルが返す。」

「一気に海軍を降参、王城を包囲して、海軍の降参を待たせよう！」

「二人は立ち上がった。」

「ああ、それしかない！」

「それにその方法なら、対処方法のないザロスの断式戦術と戦わずに済む。」

「グラベルは軍としての命令を遂げた。」

「すぐに海軍を降参だ！ アルディア、全軍に指示を出せ、レムリアへ行くぞ！」

~~~~~

## 同盟

総勢三十隻からなるイズガルドの艦隊は、わずか一日で出撃準備を整え、首都アルジェントから内陸へ幾回も牛車んだ場所にある衝突面から増援へと移動した。

「傷兵とガートルードは、グラベル、アルディアと一緒に艦隊に乗り込んでいた。旗艦はイズガルド軍最大の戦艦で、全長は二百メートルにも及ぶ。戦艦がそのまま進んでいるような感で、パトランティスの大艦隊にも引けを取らない戦艦だ。」

「旗艦はその旗艦の艦橋にいた。パトランティスの船員などではないが、この船も軍艦というよりは、立派で高級な艦を思わせる内装だった。その艦橋の窓から、傷兵は衝突面の出口がどこなのか、確認するように眺め渡した。」

「ここは……衝突面か？」

眼下には大きな陸地が見える。広い平地に大きな街が広がっていた。近代的な都市が見える一方、その周りには低くたつた竹の森が立ち、古びた街並みがぎっしりと包み込んでいた。その平地の真ん中、竹のようになどなく立った背の高いビルが天に向かつて伸びている。そのビルを眺め、ガートルードは傷兵に言った。

「確かにあのビルには見覚えがあります。ここは昔本でやがりますよ！」

「イズガルドのザリガンムという街の近くは沖崎とつながっているから……歴史的には大抵合っているのかもしれない。」

「いや、よく分からねえです！」

当初はザリガンムから増援に向かおうとも検討したが、パトランティスとの国境に近いので、安全策をとっている。

「傷兵は足すの他にも戦艦隊が待っているのを見つけた。」

「この街でも戦艦がフロントが後方しているのか？」

一本だけ飛び出て高いビルを中心として、巨大な破壊隊が台北の街に臨みかかっている。

ダラベルは砲臺から離れ、傷無の隣までやって来るが、並んで窓の外を見つめた。

「以前、バトランティスから来た技術者が訪問したらしく、我々は砲臺面の通達を許可しただけだったが……どうする？」

あの魔方アサントを叩くかどうかを聞いてきている。

「いや……今は先を急ぐ。バトランティス軍も、もうイズガルドへ向けに出て見ているかも知れない」

ダラベルはうなずく、急いでこの地を離脱するように指示を出した。

「とにかくレムリアの移動装置まで移動しよう。キズナ、方向は分かるか？」

傷無は生徒甲板の情報端末を操作し、現在地からアトラクシアまでの方位と距離を測り出した。その情報を艦橋に伝える航海士に担当する兵士に伝える。

「後は……向の問題だ」

地球面を移動するに当たり、最大の問題となるのがエネルギー不足、すなわち艦隊を運用するための魔力の補給だ。

バトランティスやイズガルドといった異世界間を移動する分には、魔力の消費は少ない。しかし、地球面では艦隊も陸揚装置も数多く且つ魔力の消費が速い。異世界の艦隊や陸揚装置が衝突面からあまり離れられないのは、魔力を効率的に消費してしまふ恐れがあったからだ。

異世界では陸揚装置を建造するのに資材として物資を必要としないが、その代わりに巨大な魔力を使う。ただでさえ魔力の供給が困難となっているのに、貴重な魔力の塊である艦隊や陸揚装置を使い捨てすることは出来ない。この作戦の要は、どうやって地球面を移動するかにあった。バトランティスもそれが不可能だと知っている。だからこそ、そんな策は有り得ないと断言しているはずだった。

「しかし、こつこつには『隠密に接近する勇』がいますからね。常識は適用しないのでやりますよ！」

ガートルードのそんな言葉に押され、一応は方便を用意してあった。

「しかし……本当にやるのか？」

記憶されている様子の傷無に比べ、ダラベルの意気は随分違った。

「無論だ。あの強大なバトランティス軍と、化け物じみた陸揚装置やコロスとゼロスを倒すには、奇跡を起こすし

かない」

傷無を導くための導き手になるのは、ただの決意ではない。覚悟だけでもなく、準備だけでもない。もつと様々な型が突然一体となり、傷無に問いかけていた。

「……キズナ。コロッセオで言ったな？ 一人で奇跡を起こすのは不可能だが、私とお前の二人なら奇跡を起こせる」

「ああ。そうだったな……だからあのコロッセオを脱出することが出来た。そのおかげで、今ここでこうしている」

「ならば、もう一度試みてくれ。奇跡を、イズガルドを……いや、アトラクティス全土を救うために」

それはダラベルの願いであると同時に、傷無を王の願いでもある。そして、覚悟の願いでもあったはずだ。傷無は固く決意した。

「出来るさ。俺たちが力を合わせれば……必ず！」

傷無はダラベルに手を差し出した。

「何とも、まずはその第一歩だ」

ダラベルは手を伸ばしかけたが、何かを思い出して引つめめた。

「すまない。先に打って待たせてくれ。私は……準備をしたら、すぐに行く」

傷無に思ったが、傷無は素直に了解して艦橋を出た。

出発前の打ち合わせとおり、砲臺の砲台へと向かう。巨大な砲台なので、砲から砲までだと歩いて二十分はかかる。傷無が向かっている場所は砲台のはずれ中央。砲台は中々後ろの味方に建っているの、到着までは約十分といったところだ。

砲台を降りて通路をしばらく歩くと、行き止まりに壁があり、傷無が手をかざすと自動的に開いた。この壁に乗り込むとき、ダラベルが傷無の生体情報を登録してくれたおかげで、壁が開く、遠くには傷無の姿をみかされた。しかし、高度なセキュリティを施しているにしては、思ったよりも壁がない。

そこは艦橋の地下だった。巨大な通路は、まったく船内に向かって数百メートルは伸びている。その先には巨大な砲台が建っていて、この砲が戦艦であることを明瞭にせられる。巨大な甲板の真ん中、ただ一人ぼつんと座っている女性がいる。

「あらキズナ。ガラベルはどうしたの？」  
 ティーセツトの横つた凡テリアルと椅子が二脚、その一つに座つて、アルディアは紅茶を飲んでゐた。暖爐の甲斐で暖炉にお茶を飲んでゐる姿を見ても、ダラムで初めて出会つたときや、人質となつた時をアルディアから見た顔しに行つたことが思ひだされる。

「暖爐があるから、先に行つてゐてさ」

「そう」

ティーカプをソーサーに置き、アルディアは優雅に足を組み替へた。脚の付け根から、下着が露出見えそうだった。暖炉の中にも、ちらりと緑色の何かが見えた気がした。暖炉は暖炉で、下着の色は髪の色と合わせたのか？と推測した。

チャイナドレスのように、体のラインがそのまゝ出るセクシーな服だった。正面にスリットが深く切り込んでいて、覗んだ足が飛び出すようにむき出しだになっている。暖炉の面積は少ないのに、とても淫靡な感じがした。

「立っていないで座つたら？」

「ありがとう。お茶、暖するよ」

椅子に座ると、アルディアのセクシーな衣装が極でも目に入る。暖炉は遠慮して視線をそらし、甲板の向こうに広がる海を眺めた。気持は暖かく湿度も少ない。ほどよく空を眺めてゆく暇も気持ちよかつた。

「思つたより風がないんだ。それに湿度も」

「それは暖爐の暖房機能が、絶対湿度でこの空間を取り囲んでいるから。同時に湿度や湿度も暖房に調整しているしね」

なるほど、暖房機の技術によるものと、暖房は納戸がいった。

「そうであれば、こんな場所であんなことは出来ないわ」

アルディアが指さす先に、ベッドがあつた。

広大な甲板にぽつんと置かれた白いベッドには、違和感しかない。

「なあ、アルディア。これから艦隊への離別供給の作戦を実行するんだろ？ 設備とか準備はいいのか？ 見たところベッドしかないみたいなんだが」

「あれだけで十分よ」

執事としたが、アルディアは平然とお茶を飲んでゐる。

「そう言うなら、任せておこう。暖房はそう思うと、若い子を見上げた。暖房機能が調整してくれる空間は実に快適で、つい、うとうととしてしまふ。いつの間にか、暖房はうたた寝をさせていた。

ふと、背後から声をかけられた。

「ご主人様。お茶をお飲みになりますか？」

いつの間にか背後にメイドが立ってゐた。

「え？ ああ、お願いします」

こんなところだぞメイドが、と後方に思ひながら、しげしげとその姿を眺めた。

それは明らかに暖房の暖だった。暖をベースに白いエプロンを着けたメイド服。しかもメイド服の、フサとフサとが巧みに使われた可愛らしいデザインだ。そして、露出度はそれほど高くないにもかかわらず、肝心なところは無防備だ。胸の胸を露出したデザインで、そこだけは生草がやなく、わざと胸の谷間を見せ付けている。かわつた広がったスカートの丈も、膝に短く、少しでも動いたら露出いなく下着が見える。ガーターベルト付きのストッキングで脚を包んでいるが、それもむしろ淫靡だ。

とても可愛らしいデザインだが、同時に露出的な要素を内包していた。見る者にいやらしい印象をわざと与えるような、そんなコスチュームだった。

その可愛らしくも淫靡な服が、暖色の壁に良く似合つてゐた。

「……で、えええええ、ダ、ガラベルをのかけ」

暖れくさそうに言葉をなく集め、ガラベルは不満にぶつぶやいた。

「……暖かくのが好き」

「いや、そんな前向きなから……それに、いつもと雰囲気が違うし……」

ガラベルは不安そうに顔を曇らせた。

「お、おかしいか？」

「いや……すごく可愛らしいし」

元々整った顔立ちをしているが、いつもより数分女らしく、美人に見えた。

「ああ……よかつた」

「似て、そんな顔笑みを浮かべたグラベルは、凄く可愛らしい。顔色でのどしく、柔らかい容姿から、想像も出来ない。」

「想像もする目つきで、アルディアはグラベルに話しかける。」

「良かったわね、キズナに気に入ってもらえて、気合を入れてお化粧した中、髪があつたのもよわ。」

「は、ばかっ！ それを言うなっ！」

「根合ってはいらぬが……これは一種どういふことなんだ？」

「グラベルは髪の手をいじりながら、黙すかしそうに答えた。」

「どうもこうも……、打ち合わせ通りだ。私とお前の……その、せ、建設改良で……この施設に能力を補充するのだ。」

「確かにそういう話だった。しかし……」

「それはそうだけれど、例でそんな話だ？」

「グラベルはスカートの下をつかむと、落ち着きなくもじと動かし続けている。」

「例でもしゅりアでは、このような事を着たメイドが大人気があると聞いた。特に男という生き物は、メイドに魅せられることに大きな喜びを見いだすと、だから……」

「想像は立ち上がる、グラベルの胸に手を置いた。その胸がびくんと跳ねる。」

「重たに聞いたの知らないが、それは個人の趣味による、全員が好きをわけじゃない。」

「そ、そうなのかな？……せつなくキズナに、喜んでおらうと思つたのにな……」

「がっかりと胸を落とす、グラベルは悲しそうな表情でつぶやいた。しゅんとした様子のグラベルを見てると、例が気の毒だと思えて来た。同時に、自分のために頑張つてくれたのだと思つて、傷痕の心の中が温かいもので満たされてゆく。」

「ちなみに、俺はそのメイドも、結構好きだぜ。」

「えっ？」

「胸まよしい姿を見せたグラベルだが、これはと嘆息すると例でもない顔をした。」

「お、例に似るなよ！ 建設改良を成功させるため……だからな？ 決して、私はああああんっ！」

「傷痕の手が、グラベルの胸から胸に滑り落ちる。それだけの愛撫でも、グラベルの口から唾液が上がつた。」

「想像わらず感じやすく……いやらしい体だ。」

「お、凄く、これはバトランティスのせいだ——はうんっ！」

「むき出しになつた胸の汗をなぞり、想像された胸を持ち上げるようにもみ上げる。」

「く……いやらしいのは、キズナの方ではないか。こんなを……ああんっ！」

「グラベルの頬は赤く染まり、平置きになつた口はあまき舌を絡めし続ける。あつという間にグラベルの体はスイアナが入り、滑り落ちる状態になった。」

「あつちへ行こう！」

「想像はグラベルの肩を抱いて、ベッドの方へ誘う。グラベルは熱っぽく顔でベッドを見つめると、こくんとうなずいた。」

「そんな様子を見せ付けられたアルディアは、己の中で悶々とした感情が胸れあがっていくのを抑えられなかった。グラベルに対して想像に対して、それぞれに胸が立つた。グラベルを愛する想像に胸が立ち、自分以外に想像を誘ふグラベルにも胸が立つ。グラベルを愛されるくらいなら、自分が想像を誘うしてしまえばいい。そうすれば、グラベルは想像のものにならない。」

「そう考えた瞬間は胸がときめいた。もちろんそれはグラベルを独占できるという事実に対してだ。そのはずだ。それなのに、想像と胸が合うところを想像すると、体の奥が熱くなる。それはこの前、アルジエントの所で遊んだときからだ。」

「まったく、例なのよ。もう……」

「だが一番腹立たしいのは、二人が自分の存在を認めているとしか思えないことだった。」

「二人はベッドに横たわり、お互いの体をまぎれ合っている。想像の手はグラベルのたわやかな胸を優しく握り、グラベルはうつとりした顔で、想像のまももから胸の付け根までを撫でている。」

「アルディアは首を立ててティーカープを覗くと、椅子から立ち上がった。」

「それに、そろそろ本番と行きましょうか。」  
「椅子を引いた状態でアルディアはドレスを脱ぎ始めた。黒髪のはきつくとうしろに裸体が露わになる。ドレスの下には下着を着けていなかったのだ。あつという間に生まれたままの姿になった。情しげもなく美しい裸体をさらし、アルディアは己のコアの名称を呼んだ。」

「ゼエル」

白雪のような肌、緑色の装束が着装されてゆく、アルディアの魔導装甲、六枚の袖を持つ「ゼエル」だ。

六枚の袖の内、二枚は腕へと変形をした、アルディアはその袖を手にする、ベッドの方へ向かつて行った。

空欄に魔導装甲を身に付けたアルディアの姿に、御伽は驚いた。

「ええ、おつ、おい、アルディア、何をやる気だ？」

アルディアはさもなく取りを合点の微笑みを流して、しかも手には時、あれは空欄を盗み、斬り裂くことの出来るゼエル特有の武器だ。

「え、得てどうした？」

ドラベルも驚いて声でアルディアを見上げる。

アルディアは腹息を吐いた。まるで津波現場に踏み込んだ妻の気分だった。

「はっ！」

袖を解き、ベッドの周りの空間を斬り裂いてゆく。すると、向もない空間に切れ目が入った。写真に切れ目を入れたような状態がリアルに存在する、向とも奇妙な魔めだった。

ゼエルの周りにフローティングウインドウが開く。

「いいわよ、こつちに送って、高層」

そのウインドウに向かってアルディアが指しを出した。すると、空間の切れ目から何やら奇妙な物体が現れた。

その水気味さで、御伽は思わず叫んだ。

「うわっ！ 何だ！」

蛇のように長く、ぐねぐねとした物体だった。

それは太さ三センチから六センチくらい、色はオフホワイト、もしくは薄いピンク色をしていて、表面がぬめりとした液体で纏われている。

「うっ……なんて水気味さ……お、おいアルディア、一体、これは何なのだ？」

「何って、魔方は通用のケーブルよ？ これがないと魔力を海へ送れないでしょ？」

御伽はベッドした用意されていない理由に納得がいった。

「魔力供給の設備が向も用意されていないと思ったら……こういうことか」

「ええ、さすがに全部の魔と物理的に接続するのは大変なものです。空間を切って、各層から魔力伝達ケーブルを引く張り出した方が簡単よ」

確かに、その通りだ。

魔力伝達ケーブルは近いかい？ 確かに、しなやかな作りだった。だが、まるで自分の意思を持っているかのよう、うねうねとうごめく様子は、正直いつても気持ち悪い。

ドラベルは首の顔で、おそろおそろ訊いた。

「まさかとは思いますが……アルディア、このケーブルを……」

にっこりと微笑み、アルディアは答える。

「その通りよ。このケーブルを体に装着させた状態で、接続装置を行うの。ドラベルの体に絡めて、居る間ずっとにすりつけて、発生する魔力を流らず吸い取るの。その魔力はケーブルを通じて魔導に供給されるわ！」

ドラベルは思いつき顔、そうなのよ。

「アルディア！ 私はこんな話聞いていないぞ！」

「ええ、言っただけだし。でも、これが最も効率的な良い方法なのよ。調に機がらせをするためにやっているわけではないわ」

しれっと答えるアルディアに、ドラベルはぐっと言葉を詰まらせる。

「し、しかし……これは、ちょっと」

うねうねとうごめくケーブルの束に、ドラベルはぞくりと背筋が凍えた。向が生理的な不快感と恐怖感を流しているのだ。

「ドラベルが機がらめのもだから、機がらめ、これは……」

アルディアは、ぽんと手を打った。

「いけない、忘れていたわ」

お尻を脱ぎながらアルディアの方へ戻ってゆく。向かを船い上げると、腰を解いたがら送って戻ってきた。改めて正確に魔導装甲をつけて置く。その御伽は思った。

「え、キズナ。これを着けて」



アルディアはビンのようなものを信無の髪に挿める。

「これは？」

「コントロールウー、これを見れば、考えるだけでケーブルを自由に操れるわ。自分でケーブルを体で動かすけるのは大変でしょ？ それに機械改造をしている間に怪我もやっちゃうでしょうし。だから、これを使うのよ」

「本当に、誰い通りに動くの？」

信無は半信半疑だった。だが不思議なことに、ビンをかけた瞬間から、まるで自分の手足のようにケーブルを感じることが出来た。

――すずは、この一本。

正面の切れ目から垂れ下がっているケーブルが、びくりと動いた。そして髪が縁をまたげるように、ゆっくりと持ち上がる。

「本当に、思った通りに動くぞ」

今度は他のケーブルも同時に動かしてみろ。すると、数十本のケーブルが同時に動き始めた。右に左に、手を振るようにゆっくり揺らす。かと思えば、別々に異なる動きをさせることも、ウェーブのように波打たせてマズグームづく動かすことも出来る。自在に操作することが可能だった。何だか、自分の手が数十本に増えたような、不思議な感覚だった。

「アラベル、すまん。ちょっと強しくなってきた」

数十本のケーブルが、一斉にアラベルの方を向いた。

「わっ、バカ、こっちを向けるな！ 寄るな！」

アラベルは首を振り、ベッドの上を歩き回る。

「早く思うなよ、これも機械改造のためだ！」

「嘘だ！ 絶対、変身してるだろ！ きつあああああ」

ケーブルは赤く動く、アラベルの両手両脚に絡みついた。その瞬間、信無の感覚に刺さる衝撃が走った。

「うおっ！」

――これは……ケーブルを通してアラベルの体の感覚が伝わってくる？

しつとり汗ばんだ額。張りがあり、腕力が溢んだ体。まるで直接手で触れているかのように感じ取れた。

「ど、どうかしたのか？ キズナ」

急に動きを止めたケーブルにはとっとながらも、アラベルは心配そうに尋ねた。

「このケーブルで触れた感覚が、俺にも分かるんだ。だから今、アラベルの体を俺の手で直接押さえているような……そんな感じがする。直接肌で触れているのと変わらな感覚なんだ」

「キズナは直接触れているように……感じている？」

そう聞かれると、何だか全てが信無の手で直接愛撫されているような気持ちになってくる。途端に、アラベルの頭部が急遽に上がった。

「ふっ……うっ」

ぬるっとしたケーブルが溢り寄ってくる。アラベルの首筋がぞわっと震えた。しかし、その感覚とは異様に、ケーブルが眼に触れると快感が走り抜けた。

「あ……いやあ……」

何本ものケーブルが眼が寄ってくる。同時に体中を愛撫される。人間の手では到底不可能な行為だ。ただのケーブルが浴槽にアラベルの体を撫で回す。

「あっ、だめ」

胸の膨らみを握り込んでも腕の中に入り込み、腕を起すようにして、腹の胸をむき出しにした。細めのケーブルが胸を絞上げるように絡みつき、もう一本がピンク色の舌端をつつき回す。

「ふああああんっ！ あっ、それ、だめよっ、む、胸の先はああああん」

快感に耐えられず、アラベルはケーブルから逃れようと暴れる。しかし両手両脚をしっかりと拘束され、胸を握るようにケーブルが寄り付いている。どれだけ暴れても、快感から逃げることは不可能だった。

「あっ、あー、ああん！ はあっ！」

アラベルは耐えきれず声を叫ぶ。腕のある腕の端からよだれを流す。すっかり濡れかけた顔に信無の明も高まってゆく。さらにケーブルを巧みに動かす、フリルが山崎回されているスカートをめくって下着を濡わにした

「……やっ」

力を込めて、太ももを閉じようとする。しかしケーブル自体が分泌する潤滑油のような液体が、太ももの隙間にケーブルをぬるりと滑り込ませる。そのケーブルから、信無はアラベルの下着の感触を咄と取った。腕の腕の部分

が、しとり顔になっている。もつと腕をさせたい、そう思うとケーブルは直ちに表情を反映し、羞しくうごめき始めた。

「いやああああああんっ」

腕の周りをケーブルが出たり入ったりして、ゆるめるとこすり上げる。一番敏感な部分に、強烈な刺激を繰り返し感じ取られ、グラベルの下半身は常に電流を流されているかのように、びくびく跳ねた。もはやグラベル自身で、体のコントロールなど出来ない。強制的に送り込まれる快感に、体の奥からこんこんと泉が湧き出てくる。

「グラベル……かわいい下着だな」

「あ……そ、そんな……ああんっ、くっ」

「でも、もうすっかりびしょびしょだ。まるでお漏らししたみたいだ」

カッパを脱ぎ捨て、グラベルは汗に涙しようとした。

「なっ……わ、私は、漏らしてなど……っっはああっ、やっ」

「わかっているよ。グラベルがエッチな気持ちになっっているのは確かだ」

「……Oh………」

グラベルは顔を真っ赤にして口を結んだ。

「こんな顔で濡れても平気なぞっ。身体を泣くといけなから喉いじっちゃうな」

ケーブルがパンツの中に侵入する。

「あ、ま、待って」



薄股のケーブルは見事な演技で、グラベルのパンツをずらしつつ、体を持ち上げ、下着をずらし、股がせやすいうように脚の位置を調整も。十数本のケーブルがそれぞれの担当をきっちり、チームワークでグラベルの下半身を見出した。

「ふう………みんなの、うきキャー」

むき出しになつたドラベルの胸毛の丘に、ケーブルがこすりつけられる。

「キズナ……」

ドラベルの胸毛が浮かんでいる。腰手が震えたと感じ、傷痕は痒くて掻きかけた。

「んす どうした」

「くすっ、キズナも……来て、ケーブルが寝なくて、いやな……」

ペセをかきながら、ドラベルが訴えた。

「ね、わかった。ごめん」

さらさらの金髪を撫でると、ドラベルの口から熱い吐息が漏れた。傷痕は自分も服を脱ぎ、君をさらす。下着帯になつて、ドラベルの胸に腰をついた。たわねに突つき大きな胸を喰ひこむようにつかみ、さらに抱き寄せてみしだいた。

「ひっ……あ、ああ……うれしい」

それだけで、ドラベルは通けそつた顔から甘い声を出す。

「あっ、んあっ……はあ、あ、喉にも……ご褒美、させて……」

絶え絶えな声でそつとつぶやいた。傷痕はドラベルの右手を離放してやった。するとドラベルはその手を返わずに傷痕の脇腹に絡む。

「あん……これ、すごい」

傷痕をマイドは、きつとりと握るまじで腕を見つめ、したやかな顔で撫でさすり始めた。その下にあるものの形を握り固めようとするように、念入りに指を這わす。

「く……ドラベルの胸、気持ちいいな」

その言葉が嬉しかったのか、ドラベルは胸りもなく傷痕のパンツに手をかけると、迷うことなく引き下ろした。

「わ！ おいっ」

むき出しになつた傷痕のものを見て、ドラベルはとろんと目を細める。

「すてき……」

指でそつとつかむと、上下に動かして細める。ドラベルの手にはケーブルの産毛がへばりついていて、それが潤滑油の役割を果たしていた。ぬらりととどろく手は、紙を削る音を立てつつ、快感を生み出してゆく。その快感は、

傷痕の意識をその一点に集中させてしまう。なまなまケーブルが力を失い中絶に落ちた。

——くっ、まっけ、意識を失つかり持たなければ！

もう一度ケーブルを動かすと、ドラベルの体に動きが伝わった。そして自分の両手と合わせて、ドラベルの体に快感を伝え続ける。

「んあっ、はあっ、ああ……す、すごい、これ……」

ドラベルは快感に流されながらも、手にしている傷痕のモノをさすり続けた。虚ろな顔でそれを見つめると、ゆつくりと唇を這うけた。

傷痕の一番敏感な器官が、潤滑なぬめりと熱さを感じて震った。

「く……ドラベル」

「じゅっ……んっ、ひゅっ……んっ、んっ」

ドラベルは口の中を占め、傷痕は流れていく。先からあふれ出る蜜も、とても美味しく感じた。いつまでも、しゃぶっていたいと思つた。

その瞬間に、ドラベルの体からオレンジ色の光の粒が溢れ出した。

——快感の波だ！

考えるよりも早く、傷痕は全てのケーブルをドラベルの体に巻き付けた。

「んんん、んっんんんんんん」

傷痕のものを喰えたまま、ドラベルは快感にうめいた。数十本のケーブルによって、全身のありとあらゆる箇所は快感を押し付けられているようだ。

ケーブルが全身をくまなく撫で回す。背骨と脇腹、下腹を撫で回されて、お尻を尻尾につかむように探みしだされる。脚に巻き付いたケーブルは蛇のようにずるずる動き、脚全体にくすぐったいような快感を生み出させる。

腰の間をケーブルがこすり上げ、その谷間からはドラベルの蜜をこんこんと湧き出させていた。

そして胸は傷痕自身の手で、乱暴に揉みまわられていた。

傷痕とドラベルは、お互いを責め立てるよう快感を押し取る。

そのせめぎ合いは、ついに頂点を越えた――

「んうううううんんんんんんんんん、んくっ、んっ……んうう……んんっ」

二人の快感が爆発した。

ダラベルは喉を鳴らし、美味しそうに飲み込んでゆく。

二人の体から溢れる光が、ケーブルを包んで空間の切れ目へと消えていった。

闇闇から口を開き、ダラベルは息を吐き出してまたもう一度呼吸を吸い込んだ。

「成功……かしこ」

傷痕は痛めたピン形のコントローラーから、ケーブルを伝って流れた闇力の線を感知していた。

確かに成功だが、これだけの報酬を動かすには……

「ん……はあ、ああん……ふ」

切なげな声が出てきた。その声はダラベルのものではなかった。

「……アルディアア」

言葉を武器である天敵の喉を直接に投げ出し、アルディアアは平気で作り込んでいる、顔を歪めたアルディアアは口を開き出した自分の胸を片手でつかみ、もう片方の手を腹の間にくり込みませ動かしている。

傷痕の報酬に気が付くと、手を動かしたまま、頭をうつろな切なげな顔を向けた。

「う……はあ……わ、私……」

その姿がいじらしくて、嘆息でもあり、また泣き出しそうもあった。

「アルディアア、こっちへ来てくれ」

傷痕はケーブルを握はし、アルディアアの体に顔を付けると、髪を上げるようにして顔を浮かせた。

「え……さあ、ちよつと」

アルディアアの体をベッドまで運び、ダラベルと並べて横たえる。

「どうやら、これだけの報酬を動かすには、通常の機械装置では足りないらしい。だからアルディアア、お前の力を借りたんだ」

しかしアルディアアは、拗ねたように顔を背けた。

「……私の？ でも、私がどうやって？」

強い要求を感じさせる声で、傷痕は言った。

「……機械装置」

呼吸が落ち着いてきたダラベルが、上半身を起こした。

「それは……一体、どういうものなんだ？」

「装置改造を二人同時にやることだ。初歩的装置より生み出されるエネルギーは、一人ずつで行う時よりも速かに増えるが、だが、これには条件がある」

傷痕はダラベルとアルディアアを交互に見つめた。

「ダラベルと同じ機械装置で結ばれていなければならない。だからアルディアア、お前しかいないんだ」

傷痕はアルディアアの胸をつかみ、その胸をじつと握るふんだ。誰のかにアルディアアの胸が機械的に染まる。その胸が胸に動きかけ、しかし不思議な横を叫んだ。

「なんだよ……さんざん二人で仲良くして、私のこと、使ったらかしにしてたくせだ」

子供のように揺るアルディアアをあやすように、ダラベルが抱きしめた。

「すまない。別だ、お前をないがしろにしていたわけではないんだ」

そして反対側から傷痕がアルディアアの胸を握った。

「新しい思いをさせてもらった。でも、今こそアルディアアとダラベルの結びつきを生かしたい。協力してくれないか？」

アルディアアは鋭くんだ目をこする。目の周りを赤くして答えた。

「もう仲間はすでにされるのは嫌だよ。でも一握に力になれるのは……とでも嬉しいわ」

「ありがとよ、アルディアア」

傷痕がケーブルの動きをイメージすると、ベッドの周りにとどろき響いていたケーブルが二階に起き上がる。素早い動きで二人を取り囲むとその体で動き回り、闇色と白の二つの体を前に持ち上げた。アルディアアが提てた声を上げる。

「ひゃっ……で、でも、これちよつと気持が悪いかも、ゆるゆるする……」

一方、ダラベルは最初の反応とは異なり、うつろしな表情を浮かべていた。

「しかし、このケーブルを通して傷痕が私の体を感じて……あつ、ああん」

二人の体の表面を、のたうつろにケーブルが滑る。

「ひゃあつ……んん……でも、これ感じちゃ……うあああはああんっ、こんな、ケーブルなんかで……でも、や、

「ああはうん！」

既に自衛行為で感じやすくなっていたアルディアも、すぐにケーブルに体を預けた。突然に魔力の吸入口が付いているケーブルが、胸のピンク色の突起に吸い付き、その両りも別のケーブルが抱き、胸全体を握り上げながら突進を喰ひ上げる。

「ああ、す、吸われちゃうー！ あんづ、やっ、だめええ！」

ケーブルはそれ自体が生き物のようにうねうねと動き、二人の体を這い回る。胸だけではなく、体の全ての性感帯を握り当てようとするかのように、二人の体中を突進し、胸で同じ、吸い付いた。

ドラベルの親色の乳房にもケーブルが刺り込む。

「そ、そこは……またなの、あああ、うあんづ、いやあああ！」

乳房の穴を刺し、別のケーブルは胸の両側を握り付けて吸い付き。

「ひっ……だ、だめ、同時になんて、こんなの……絶対に過ぎるもううっ！」

連綿のようち声を上げ、ドラベルの体がのけぞる。その体が、ひくひくと震えた。

方の人らなくなった。二人の体をケーブルで支え、空中で抱き合わせるように激震させる。胸と胸が押し付けられてつぶれたように形を歪めた。

「あ……ドラベル……！」

ほんやりした顔で、すぐ目の前に現れた愛しい相棒の顔を見つめた。その顔は今まで見たことがないほど快活に輝き、甘く暖かくあたたかいでいる。

「アルディア……ああんづ！」

ケーブルで抱き合っていた二人の体を、空中でこすり合わせるように動かした。ケーブルから分泌される粘液が滑りを良くさせ、二人の体をなめらかに滑り合わせる。お互いの胸の乳同士が触れ合い、敏感な先端に刺激を伝わり合う。その快感をより強く求めるように、ピンク色の突起はさらに首を伸ばそうと、びんと張り詰めた。

「ひっ、あ、アルディア、そんなに……しないでくれ、な、胸の奥が……！」

「そんなの……ああんづ！ ドラベルが、硬くしてるからいけないのよ、そんなに立たせて……こすりつけられると、あ、あああ……！」

アルディアが驚嘆したように体を震わせた。

「これは、キズナのせい……！」

ドラベルはすがりつような親愛を顔に授けかけた。

二人の体はケーブルの粘液ですっかり濡れ、てらてらと輝くやがて死んでいた。さらに、もじもじとこすり合わせる太ももの肉離れからは、ケーブルの物ではない別の液体がしたたがっているようだった。

「え？ きやああんづ！」

ケーブルに強制時に股を開かせたアルディアが、恥ずかしそうな羞恥を上げる。

「ま……待て、キズナ。やあああんづ！」

ドラベルの足をあげるも、二人とも足元にさらに親愛を注ぎさせた。

それにしても、あの時だった。ケーブルに強制的に股を開かせられ、穿た二輪の美しい花が咲いている。白い花と土の大地に咲く、それぞれ種が異なる二つの花は朝露に濡れたように雪を身にまとわせ、ひくひくと震える花弁から花蜜を流らせていた。

「く、こんな情状……はずかしいわ！」

アルディアが、どこか情けを告ぐ声で言葉を責めた。

「キズナになら、見られてもいいが……この姿勢は……はずかしい……！」

熱い視線を感じ、ドラベルは羞恥に体の奥まで震えられているような気分になった。だが、ぞくぞくと体の中から湧き起こる感覚は、恥ずかしさだけではなく、明らかに悦びも混じっている。

二人とも、深く呼吸した。

羞恥の裏の裏に、二人は胸がきゅんと音を立てたような気がした。そして互いの奥からさらに蜜をあふれさせる。羞恥は足を広げたままの二人を包み取り、二輪の花びらが敏感するようにならせた。

「ああ、やあああんづ、ドラベルのがっ！ あ、気持ちいい！」

アルディアは自ら腰を動かす、自分の大事なものごとをドラベルの同じ部分にこすりつけた。

「ひっ！ はあっ！ ああああんづ、あ、アルディアっ！」

秘道を開き音を響かせ、二つの花びらがこすり合う。その中の小さな芽も大きく膨らみ、膨らむ快感を二人に分ちあ

「ああ、そ、そんなにされると、おかしくなっちゃうー！ んんんづ！」

大きな口を開けてあぐらべルの口元、ケーブルが入り込んだ。苦しそうに顔を歪めるダラベルの表情は、瞬間的に、アルディアと偽物の関係をさらに疑った。

偽物はアルディアの前にもケーブルを素手出した、しばらくの間、暗い闇で見つめていたが、やがて舌を伸ばすと結核に侵されたケーブルの表面へと触れた。

「はあぁ……あ……んっ、んんん」

何もかも舌を立って絡めている内に興奮したのか、アルディアも口を大きく開くと、おもむきにケーブルを咥えた。

「んうっ！ んんんんんっ！」

「くうんっ！ んんうううううううっ！」

腰を押し付け合っていた二人の動きが止まり、小刻みに腰を揺る。ケーブルを吐き出すと、だらしなく両いた口からとだれが涎を落した。



体中の炸裂感を刺激され、二人は快感の波におぼれそうになった。偽物はベッドに横になり、二人の体を自分の上に移動させた。

「今度は二人で……成功させよう」

「……はっ」

傷無の意図をくみ取り、二人は中々それなりに喜んだ。そして目の前に屹立する、己にはない語言に嘘を添えた。合せてたまの二人の感情に、おじき込むようにして傷無のものが湧き込んでゆく。

「あああああつー、すっばいっ、な、なんなの、これ、ケーブルとを繋ぎ合う。」

アルディアが驚き顔をして、快感にあえいだ。

「ふああああんっ！ きつ、キズナの、これっ、やつぱりいっ、お、おかしくなる。」

ダブルも嬉しそうに声を上げ、体をのけぞらせた。

傷無も二人の最も大率な部分で愛撫され、気持ちが良いとはいすがなかった。気を許せば、あつという間に顔に頬上げ上がった。

傷無の表情を見て、「二人とも胸の中が熱くなった。

——キズナも、私たちで感じてくれている。

そう思うと、腰の動きに力が入った。ダブルとアルディアは肩つめ合い、その腰の中にお互いの意思を感じた。小さくうなずくと、より強く体を押し付け、傷無への刺激を強くした。

「うっ！ ふ、二人とも……くっ」

気持ちよさそうに傷無の声を聞くも、合計に胸みになった。しかし、同時に自分たちにも強烈な刺激がやって来るといふ誤解の端だ。正気を失いそうな快感と映いながら、腰を打ち付けた。ダブルとアルディアは、自分の花びらで傷無のものをつかむようにして、こすり上げる。上下に激しく動かし度、二人の股の間から傷無のものが出入りし、頭の中を電気が流れるような快感が襲った。そして、

「——」

「ひらひら」

「B はうっ……あ……」

三人の眼鼻が同時にやって来た。

「はあああつああああああん！」

「いやああああああああつ！」

傷無の生命エネルギーが噴き出すと同時に、ダブルとアルディアの喉から熱のある液体がはじけた。ふたりの体に、傷無のエネルギーが降りかかり、そして目眩いばかりの三色の輝きが三人の体から溢れ出した。

その輝きは、三人の体に染み込まれたダブルを流して、傷無の全体へと広がってゆく。快感の波に飲まれた傷無は、ケーブルの制御を手放してベッドの上で腰を揺らした。その体の上に、ダブルとアルディアも倒れ込んだ。

傷無は二人の体を抱き、顔を撫でてやった。すると二人とも甘えるように、傷無の胸に顔をこすりつける。

傷無は供給した電力量を調整するも、目を寄せた。

「だいたい供給出来たが、さすがにこれだけの電圧となると……あと少し、といったところだが……ダブルとアルディアは、まだ大丈夫か？」

ダブルは傷無を見上げて、優しく微笑んだ。

「確認だ、キズナ。今度は私たちに……させて、くれないか？ その……気持ちよくしてもらっていいだけでは、申しわけないというか……ダメかな？」

甘い言葉を吐きながら、おずおずと後退するダブルに笑顔で応え、傷無は二人の胸と手からケーブルを離す。

二人は顔を見合わせると、お互いの胸を寄せ合って傷無のものを吸んだ。右はダブル、左はアルディア。二つの胸の力を押し流された。

それは素晴らしい感覚だった。ふわふわとした物体に触れられ、下半身が離れてしまいそうな快感だ。

右と左で、同時に快感が流れるのが二人でしてもらっている証だ。こんな喜びが許されるのだろうか、不安になるほどだ。

「ねえ、ダブル。これで……ちゃんと出来てる？」

「ああ……大丈夫だ、多分。こうしてあとに動かして——」

二人の胸が傷無のものをこすり上げる。その度に力が加わり、ざあっと押し潰されるのが、また堪らない。

三人の間に、きらきらと輝く粒子が泳ぎ始める。

「おは……さっき置えたばかりの技だ、キズナにとどめを刺す方法がある」

「えっ？ あ、それって……」

相違げに微笑むと、ダブルは傷無のものから胸を離した。

「こうするんだ」

ダブルは口を大きく開く。熱い吐息と濡れた舌を出しながら、傷無のものを口に含んだ。再び傷無は同じような熱い熱さと快感にさらされることになった。

自分の下半身を見おろす。実際に快感を身えてくれているところを目の当たりになると、その瞬間の現実感の無さに改めて驚かされる。

かつて自分が生死をかけて戦った相手が、一面を華やかな緑と高い草花が、ところどころの顔をして自分のものだし、まぶし付いている。

「ねえ、グラベル？ 私も……」

アルディアが口元を歪く集めて唇を閉じた。

ちやほんと首を立ててグラベルが口を離す。アルディアは待つてましたとばかりに顔を寄せる。どくろい喉を鳴らしてから、思いついて歯磨きのものを飲み込んだ。

グラベルがしきり付いていたもの。それを次に自分がしきりする。しかもそれが歯磨きのものなのだ。そう思うと腹が膨れるような快感が走った。

歯磨きもまた、のたうちまわりそうな快感に襲われた。同じ口の中といっても、グラベルとはまた歯磨きが違った。口の中の深からささやかさ、舌の動きも全然違う。

アルディアは初めてだもかわらず、喉の奥まで歯磨きのものを飲み入れた。歯かどきいだが、それに勝る喜びも感じている。

アルディアは口を離すと、激しく深呼吸をした。

「ねえ……グラベル……今度は、ふー二人で、ああんっ！」

やられたばかりではなく、歯磨きも同じにするように二人は快感に溺れた。上半身を自由にした瞬間、ケーブルは二人の下半身を能率的に握る立てる。ケーブルは牛き物のように下半身に吸みつき、快感に快感を重ね続ける。

二人の間に張り込んだケーブルは、ゆるゆるした体を小さな手に押し付けながら、滑ってゆく。

「びっ……ああああああっ！」

「くっ……ふああああんあああっ！」

二人から溢れた体液で、ベッドに水たまりが出来そうだった。二人は歯磨きに倒れ込むと、身動き出来なくなりそうをほどの快感に酔い、目の前にある歯磨きのものに必死に舌を絡ませる。絡み合うものだと意識が離れると、両側から二人で締め上げた。そして両側から吸い付き、二つの口で強く。

「んっ、はっ、ちやっ……うああんっ……ちやっ」

「はあっ、ちやるっ……ちや……んあっ！ あああっ」

やがて三人とも限界が近づいて来た。それは体の奥の方から急激に駆け上がってくる。それは止めることも、我慢することも不可能だった。

一気に上りつめ、快感、そして魔力の光が太極を起こした。

「ああああああああんっ、はっあっあうああああああああああっ！」

「はうああああんんんんんああああうううんんんああああああああああっ！」





ダラベルとアルディアの絶叫が重なった。

三人の体から魔力の光が溢れ出す。先結とは比べものにならない程の魔力量か、全魔に回かって流れてゆく。傷も息を溜めて、固まっていた。

「ケーブル……彼らのもつて……結実、統れる——ん？」

下半身の快感が続いていた。

「え……や？」

ダラベルとアルディアが、傷無のものを連続の続けていた。溢れ出したものを自分の舌で舐め取ろうと、唇い合うように念入りに舌を絡み合っている。

「二人とも、連続改良は成功したんだ。だから、もう……」

傷無の言葉が聞こえていたのか、二人とも横わずに床の寝ている。

「ダラベル？ アルディア？」

やこのことで顔を上げたアルディアが、いやらしい目をして微笑む。

「ふふ……何を言ってるの？ ロンドンまでは、あと二回は補給が必要と？ 休んでいる暇なんてないわ」

えっ、と傷無は汗や汗をかいた。

「し、しかしダラベルも限界だろっし……ここはひとまず」

ダラベルは目を豆のりおく強めて、跳っばい激突みを浮かべた。

「いや、私は大それた……むしろ魔力が足りなくなると、魔障が顕現するかも知れないしな。そ、そうだが、ずっとこうしているのが、いいと思うのだから……どうかな？」

うるうるした顔で、傷無にねだるような甘い声でささやく。

傷無は自分のエネルギーが枯渇するのを嫌いだ。



連続改良によるエネルギーの補給は成功し、イズガルド軍は勝手にイギリス皇宮へ侵襲した。アタラシシアと大出度を試みた際、自然のことではあるが敵魔障と衝突をられ、攻撃を受けそうになった。しかし、傷無とガートルー

それが先行すること、何とか特別な事情を造ることが出来たのだった。

そして作神は、呆れたように描筆を止めた。

「まったく、今度は彼の戦艦で突っくるとは——お前の想像には、本当に無限性があるを」

ナユタラゴの末続編は、小型の高速度が特徴している。イズガルドの艦隊から編入、ガートルード、それにドラベルとアルディアだけが、アタラシアにやって来ていた。

「姉ちゃん、紹介するよ。こちらが——」

「知っている。ドラベルとアルディアだね。ダムと沖崎では世話になった」

「あなたがキズナの姉、レイリか。この要塞の司令官と働いている」

二人の間で火花が散る。

作神はドラベルから視線をそらすずに訊いた。

「それで作神。このつらと一線に戻ってきた真意は何だ？」

「僕たちがバトランティスとまともに戦うには、ドラベルたちと手を組むしかない。一緒に戦わせてくれ」

「……はいどうも、と言うとでも願ったな？」

「思っちゃいいい。でも、それしか方法がないんだ。まず話を聞いてくれ」

「このつらの一休阿が結局出来る？」

作神の言葉は辛辣だ。だが、作神とは見てきたものの、経験してきたものが違う。この反応も当然だった。

「彼らの規模、アトランティス全土が艦隊に属している。彼らも追いつめられているんだ。ドラベルの話を聞いてもらえば、イズガルドが僕たちを必要としていることが分かる」

ドラベルは一言も出ると、すっと顔を上げた。

「話を聞いてくれ。この通りだ」

「……」

その態度に、作神はたじろいだ。その顔の前に、ケイのウインドウが立ち上がる。

「作神。詳しい話を聞くべき。判断はそれからでも遅くはない」

作神だけでなくケイにも選言されては腹下に出ない。作神は決まらなすいた。

「……あつ。具かろう。だが、アタラシアへの上陸はその二人だけで。それと、少しでもおかしな真意をしらる、

その時は黙行行動と見なす」

ドラベルは顔を上げると、心算はつとしたように悪人だ。

「聞かない。話をする機会をもらえて感謝する——ありがとう、お姉さん」

「……」

作神は顔を引きつらせて固まった。

「作神にお姉さん呼びはわりされる覚えはないさ」

作神はそう前に捨てて、一人で研究陣へ入って行った。

「キズナ、レイリはお前のお姉さんかろう？ なぞ思ったのだ？」

固まったように作神は顔をあげた。

「あー、それはだろ……まあ、笑にするさ」

——そして翌日、アタラシアとイズガルドの同盟が結ばれた。

一度はアタラシアを攻撃したドラベルを信用して良いのか？ と疑問の声も上がったが、現実的にこの戦場を制する方法が他にない、というのも事実だった。

今のアタラシア、いや地球全ての軍隊を集めたよりも強力であるイズガルドの艦隊を運用出来るというのは、実に魅力的な提案だった。

そして何より、作神がドラベルを強く支持し、熱意を持って賛同したこと。そして、話し合いをする中でドラベルが常に真摯な態度であり、作神に属する人物と評価されたことが大きい。最終的には、立場の違いから敵対こそしたものの、味方となればそれだけ戦いになる相手はいない、という評価に落ち着いた。

会議を終えて、ドラベルたちは一旦自分の艦に帰って行った。一方、アタラシアでは、今まで知ることのなかった異世界の新たな事実について、検討がなされていた。

中央管理家の壁と空中に、今までに増えられたデータが次々と映し出された。

今同様、作神とガートルードが持ち帰った情報も、ドラベル、アルディアからの情報提供も併せて検討した結果、全ての原因は作神の誤りと呼ばれる。異世界を文をる柱にあることが分かった。この柱が勢力不足により脆弱小生

を殺している。これを何とかすれば、大方の問題は解決する」

「ケイの部屋に、棺桶は納められない様子で壊れた」

「それは異世界でも分かりきった話のはずだ。彼らは何も手を打っていないのか？」

「バトランティス家閥、イズガルド、バルディーンなどを含む異世界アトランティス全土のどこを探しても、御社の御社のメンテナシスをする証人が見つからない。それどころか、どうやって導かれたのかも不明」

「御社は船を頼んで、フロイティンダウインドウに映るバトランティスの前部ゼルティスの映像を見つけた。そこには天に向かう船が、巨大な柱が映っている」

「あの柱も、ハート・ハイブリッド・ギアのコアも、完全にオーバーフローし、使い方は分かっているが、誰がどうやって導いたのかは不明みたいだ」

「我々のタタノロジーで、あれを何とかすることが出来るのか？」

「分からない。でも、一つ気になる点はある」

「何だ、それは？」

「御社がダラベルと船体改裝をした件、聞けば、今頃は艦隊のエネルギー供給の為に打ったとか」

「ああ、確かにやっただけど……それが、どうかしたんですか？」

「確かに艦隊艦隊はハート・ハイブリッド・ギアとコアが共通なので、それも可能なのかと考えていた。しかし艦隊などの艦隊艦隊へのエネルギー供給……すなわち艦力の供給までが可能となると、恐らく艦隊の艦隊のエネルギーとしても使用することが出来るはず」

手を叩いて、御社は嬉しそうに叫んだ

「そうか！ エロスが艦隊艦隊の上のようなものにあればいいんだ。艦力を発生させて、それを御社の御社に供給すれば！」

「だが、話はそう簡単ではない。柱は単なる燃料不足ではなく、艦隊が通んでいる状態と想像できる。それが艦力がない状態で艦隊に艦隊をさせたことに起因するものか、メンテナシスを行わずに使ったことによるのかは分からない。しかし、何らかの修繕が必要なのは？」

「それに、どれだけ艦力を生み出さねばならないのかも分からない。世界を又える柱ともなれば、艦隊を動かすよりも大量の艦力が必要となるとも知れん。それに御社は、一生で艦隊と艦隊改裝をし続けて生きてゆくつもり

か？」

「く、それは……」

「言い返すことが出来ず、御社は黙り込んだ」

「それともう一つ不安な要素がある」

「……まだあるんですか？」

「御社の御社の対策にあたってはいるもの、耶山博士だということ」

「御社と御社は良を頼んだ」

「確かにそれは、嫌な予感しかないな」

「御社は吐き捨てるように言った」

「考えてはみたものの、誰も耶山の考えを想像することが出来なかった」

「とにかく向こうへ行って、現場を見てみないと向とも言えない。しかし、耶山博士が調査を導いていたなら、既に何らかの対策を見だしている可能性もある。要するに、耶山博士は艦力プロントで得られた艦力を確認することと、御社の御社を確保させている。それならば、艦隊改裝と柱の関連性も考えているはず」

「御社は嬉しい顔をしてケイに話した」

「これは我々の御社が、御社の御社が助けをかったとしよう。その場合、この我々の世界にどんな影響があるのだ？」

「例えは、全ての御社面を封印してしまえば、影響はないのではないのか？」

「……何んか！ それは――」

「御社の反論を断るよう、ケイのウインドウが顔の前に出現した」

「ハッキリしたことは分からない。でも、これを見て欲しい」

「ケイがキーボードを前に止まらぬ態度で叩く」

「画面に二つのグラフが表示された」

「右が異世界アトランティスにおける、天候境界が起きた時刻と件数を表したものの。左は異世界間衝突が起きた時刻、衝突面の衝突の模様」

「その二つのグラフはよく似ていた」

「何らかの関連性があることは否定出来ない。アトランティスにおける艦力不足が、異世界間衝突を引き起こして

いることが想像される」

「では、想像なし……というわけには、いかないか」

「最悪の場合、アトランティスの崩壊に併せて、二つの世界が完全な崩壊を招き、我々の世界もともろ消滅する可能性がある」

「怪物は氣息を吐くと、頭を振った」

「それやれだろ……怪物、もう今日は休め、眠れだろか」

「でも、睡ちゃんたち様」

「明日から本格的にイズガルド軍との調整だ。最終的な作戦計画を練ることにならせろ。今夜はその作業を用意しておく。お前は体を休めるのが仕事だ」

「分かったよ……あ」

「どうかしたか」

少し遠くから、怪物はもう一つの睡ちゃんを口にした。

「今回は早く直接対決をかわせろと思うけど……もし万が一、愛音と戦うことになったら……ゼロスの『形式解体』の前では、イズガルドの崩壊も、暗黒軍中も、ハート・ハイブリッド・シアも役に立たない。戦いを避けるにしても懸念があるだろう。もし愛音が俺たちの前に現れたら……その時俺たちはどうすればいいんだ」

しかし、その問いに対する答えは、誰も持ち合わせていなかった。



怪物は中央管理室の健康から外へ出る。

外はすっかり暗くなっていた。空気が澄んでいるのか、降るような星雲が広がっている。その代わり、気配も下がっていて静寂だ。イザリスもそろそろ冬だ。太平洋の赤道線近くを航行することが多かったため、イザリス近海にきたときにはアタラシアの学生、職員の名員が迎え上がったものだ。

実験場を脱出って、空に帰ろうと急った。どこかでコミュニケーターでも拾えれば早く帰れるが、何となく好き嫌いだった。

実験場の先は真っ暗な夜の海だ。太平洋で足元は切り取ったように終わっている。誰かあの先にロンドンがある。

そして実験場の先には密着ゼロリス、結局、怪物たちの実験場は分からなかったが、アイドル活動をしている以上、実験場を特定するのは不可能だろう。

それでも愛音との直接対決を回避できたのは幸いだった。

——怪物。

「D……愛音の兄」

遠くで辺りを見回した。愛音が自分を呼ぶ声が、聞こえた気がした。

「兄のせい……だろな」

自分に言い聞かせるように、わざと口に出して言った。そしてもう一度、ロンドンがあるはずの隙をじっと見つめる。

不思議と、その先で愛音が待っているような気がした。

だが、愛音は腕を降すと言った。

まっとう次に顔を合わせたときは腹いせに合点になる。

そんな考えを振り払うように頭を振ると、再び歩き出した。

「……ん」

歩いて行く音で、明かりの漏れている実験場があった。しかも、何やら騒がしい。

——何かあったのか」

実験場の扉に近付くと、そつと手を覗いた。

「まったくもおおお！　なにが世界と同意よ！　敵と互角に戦える武器よ！　今までのあたしの努力を返す！　何なのよこの明世界の怪物と戦う兵器の山わあああつ」

材料の破壊状態だった。

そういうと、ここは海にタイに連れてこられた実験場だ。ここは大型輸送機もメンテナンス出来ない

「格闘場」で、中には事務所や警備員の寝泊まりに使われる、機密的なブレハブ住まで建っている。その中でも、イスガルド軍の戦艦を見て驚いている。ジェーヌの指やら食いの端やらが散乱し、書類も床に広がっている。

「何を聞いてるんだ、胡蝶が！」

「あつ、蝶々くん！ 蝶々くんうらもんなんっ！」

「うわっ！ いきなり泣きつくやつ、っていうか鼻かめっ！」

涙と鼻水を流しながら、傷痍にぐりぐりと顔をこすりつけた。

「ひどいよ！ これじゃあ、もうあたしの出番がないじゃん！ 学園内実演さす！」

「ああ……言いたいことは分かるが、別に役に立たなくなっただけでもないだろう？」

「そそはばつと顔を起した。」

「じゃあ、次の作戦であたしの作った武器の出番はあるの？」

「あ……いや、どうか？」

「ほらあああ、やっぱりだあああ！ うええええええええええ！」

またたきも止まるような涙を流した。傷痍は、壁と壁と固まって天井を隠した。

「役に出来がなかったとしても、それは強力を仲間が出来たってことなんだし、真ばしいことじゃないか？」

「うん、付かんばかりにそろが吹える。」

「強くないよ！ せっかく特化して、パワーアップも実現出来たのに！ まったく評価もされずに、このま

まお払い箱だなんてあんまりだよ！」

「ペパトボトルをつかむと、一気にあおり除めた。」

「ふはーっ！ ったく、もうやっつけられるかってのよ、もーっ！」

「ヤケ食いとかヤケ酒……じゃなくてジェーヌか。器用に動いていやすがるなあ！」

「傷痍は苦笑いを浮かべた。」

「そそは傷痍の顔をむんずとつかむと、引きするようにして事務所を出て、格闘場の中を歩いて行く。」

「お、おい。どこへ連れて行くのってんだよ？」

「これを見てよ！」

「壁の一角で、ずらりと兵器が並んでいる。無謀から大膽にサイルまでが揃っている。」

「へええ……こいつは結構だな！」

「どれだけ数があろうか。巨大な格闘場の壁を壁から壁まで埋め尽くしている。」

「オーソドックスな武器を使ったライフルから、大砲、連射砲、レールガンは小さいものから大きなもので、実に種類が豊富だ。そしてサイルも人が持つて歩けるものから、直徑二、三メートルのもので並んでいる。」

「ほら！ これ見てよ！」

「そそは長さ五メートル以上はある、大砲のレールガンにすがりつくとはおずしした。」

「ああ、確かワルサーくんだったっけ？」

「それがーちゃんよ！ レールガンのものがー！」

「がある、とうな声を受け、そそははたつかせた。しかし、すぐに不機嫌な顔をみせたかのようで、がばつと近くのライフルに抱きつく。長さ二メートルほどの、アンチマテリアル・ライフル風のレールガンだった。」

「それは覚えていたぞ！ 彼女がくんだろ！」

「自分調々で買った銃に、涙を流した。」

「蝶々くんよ！」

「知らねえよ、胡蝶だ！」

「蝶々くんのリタエスト通りに改良したから、改造したのよ！」

「知るわけねえだろ！」

「蝶々を吐いて、どついのライフルを見おろした。そして、今までの言った言葉を反駁する。」

「……なに？ 改良機、完成したのか？」

「したわよ！ でも、もう一んの役にも立たないけどね！」

「飲んでいないけど酒が回ったのか、脳内麻痺が回ったのか、そそは力のない笑いを浮かべながら、へたり込んだ。」

「蝶々はライフルを持ち上げた。」

「確かに軽くなった……それに携行方法も……なるほど、ギアに接続するパイプを折って背後に固定するの、か。」

「蝶々も小物になって愛憎も増やしてある？」

「でも！ 威力はさらにパワーアップしてるわよーあはは！」

「凄いにすなわい。これなら……ん？」

倉庫の隅に積み上がっている物を目が溜まった。それは種々の武器とは一線を画す形状をしていて、明らかに周囲の兵器から浮いていた。無骨なフレームにエンジンが取り付けられ、電装品などが一掃になつてゐる。ぱつと見た感じ、スタラップとした態えなかつた。

だが、見覚えのあるスタラップだった。

「ああ、それ？ それももうお払い箱よ。そもそもコアがないし、そんな物を使う必要もないだろうしねー」

「そうか……それが、あつた」

傷痕の中で、何かが静かに燃え上がった。

「なる、機械派」

「んーなあにさ」

「仕事を頼みたい。大急ぎだ」



ロンドンの周りに広がる丘陵の麓野。そこに機銃部隊アルバトロスが待っている。先日久しぶりの侵入者を迎撃して以来、再び立ち居くすだけの日々が続いていた。

しかし、今度はそれ程の間を置かずに東部軍がやって来た。

アルバトロスのセンサーが感知した敵影は、二千隻によるイズガルドの艦隊だ。旗艦である千メートル級の戦艦を始め、強大な火力を備えた千メートル級と五百メートル級。それに動きの速い高速艦が隊を組んでいる。

今、ロンドンを囲んでいる機銃部隊でどうかたす相手ではなかつた。しかし、アルバトロスにとっては、機銃の威力差など問題ではない。味方として登録されていないものが現れたら警戒し、攻撃をされたら応戦する。それが、この機銃部隊にプロダムされた本懐だ。

アルバトロスの足下にイズガルドの攻撃が激し、機銃が暴れた。アルバトロスの全身に弾力が伝わり、駆動音と共に翼が動く。互いの山から砲臺の煙霧を巻き上げ、アルバトロスが飛び立った。機銃を撃ち、急襲してきた相手に向かつて行く。

地球と機銃世界の戦争が始まったときのように。

「アルバトロス来ますー！ 五機、その後から二十機」

グラベルの東部機銃にオペレーターの情報が続く。高層ホテルのロビーのような監視が、たちまち騒がしくなつた。艦橋には数人のオペレーターと、十数人の各セクションのリーダーが詰まっている。各リーダーは忙しそうに動き回り、それぞれの部署へ指示を出している。そしてその中心にグラベルが立ち、機銃を回っている。

「よし、予定どおり東部軍を攻撃させる。アルディア、ガートルード、頼んだぞ」

「了解上」

「はせとけってんですよ」

アルディアとガートルードがイズガルドの騎馬を飛び立つと、その後にはイズガルドの騎馬は騎馬隊が続き、アルバトロスへと向かつてゆく。飛来する二十五機の騎馬隊を見て、アルディアは苦なめずりをした。

「ふふふ、本格的な戦闘は久しぶりだわ……ふつ、ふふふ」

両手に鞭を握り、口元をふんぞり笑いを漏らす。

「こいつ……やばい奴でいやがりましたわ……」

引きつった顔でガートルードはアルディアから距離を取った。

「ふふふ、ガートルードさん、悪いけど、あの騎馬は頂くわ」

そう言つてスラスターの出力を上げると、一気にアルバトロスの前へと飛び出す。本来は前進に出て戦わせるはずの騎馬隊は、後方に退き去りだ。

「ちよっ！ 先行しすぎです！」

躊躇すべく、ガートルードは本末を逆にした二二歩を踏む。しかしアルディアは既にアルバトロスを追って戦っている。

「うわ！ 何ですか、ありゃあ！」

振り回されたアルバトロスが奇妙な形に捻んだのを見て、ガートルードは思わず声を上げた。騎馬の軌跡を中心にアルバトロスの後がある、彼らと中の騎馬がねじ切られ、そして次の瞬間、大量雲を起こした。二十五機のアルバトロスが次々と光の破片となつてゆく。

「そういう状況で見たことがあります……空間を破壊させる能力を持っているとか」

ゼルティスから脱出するときは、アルディアがあの術を使って警告から逃げたことを思い出した。

「はやばやしている、本当に全度直いちゃうわよ」

その笑聲は、友達と遊んでいるときの子供のようだ。

「ちよっ！ 何なんですか、あの女、今までで一番生き生きしてやがりますよ！」

ロンドンを取り囲むために配属された魔導兵器が、悪魔を感じて焦まつてくる。

「あははは、来るわ、来るわ！ 次々と！ ああ、感じちゃう」

襲ってくるアルバトロスをアルディアは上空で持ち込み、片っ端から轟音で上げてゆく。

「こいつは、何を言つても魔獣でやがりますね……」

ガートルードはこの場をアルディアに任せ、アルバトロスの撃ち上げを待てる。急に高度を上げると、ロンドンの上空に着地した。両手はビクトリア調のタラシカルな動きで、魔力ブラントのエネルギー源である人々の血は見えない。家や店に引きこもっているようだ。

魔力ブラントの時間間隔によるものか、外敵が襲ってきたときの対応行動なのかは分からない。だが、悪魔がいいことに変わりはない。

「魔力のチャージはリキ……弾丸は十分ですよ。それじゃあ……」

地面をのりながら走り回っていく。ビクトリア調の街並みの向こうから、人衆の騎馬隊が大半して押し寄せて来た。人間サイズの魔導兵器、ブリガンドだ。

その騎馬隊を走ってくるブリガンドの頭がはじけ飛んだ。ガートルードの弾丸を受け、のけぞるやうに倒れる。その後ろを走ってきた別のブリガンドが、倒れた仲間を見て倒れ、さらに後ろから走ってくるブリガンドに撃たつてされる。

「両側の騎馬隊で犠牲になった人々の皆さんの、辛い経験でいやがりますよ。寛恕しやがれです！」

ガートルードの「二重銃」が火を噴いた。押し寄せる敵軍のブリガンドを、面白くように撃ち抜いてゆく。頭を、胸を撃ち抜かれ、腹穴を開けたブリガンドは、撃たれた瞬間で吹き飛び、地面を転がりがながら光の破片へと姿を変え、粉々に変わった。

「うおおおおおおおおおっ！」

両手の銃が休む間もなく光の弾丸を連続し続ける。ガートルードは弾を撃つてジャンプすると、敵が出現した中へと飛び込む。そして二百六十度、ぐるっと体を回転させながら敵を連射する。弾いて倒れるようにブリガンドが倒れ付けられてゆく。

ガートルードの周囲が急に暗くなり、足下に大きな影が広がってゆく。

「！ 来やがりましたね」

タワーブリッジの向う側にそびえる黒い魔導機から、バトランティスの騎馬が姿を現した。

「こちらガートルード、黒い魔導機から敵の魔導機が出てやがりましたよっ！」

上空で魔導兵器を倒していたアルディアに、グラベルから連絡が入る。



アサヒ新聞社

[illegible]

文句を述べたので、アサキとアサキの関係を説明しようとした。

アタラシシアは、陸地するぎりのりの距離までイギリスに近付き、瀬戸内海から次々と島を現す艦隊と噴煙を吐き出す艦隊とを識別していた。

中絶理由で状況を見つめる格闘の面々、腹巻のダサブルから通問が入った

1748

「心配ない。それよりも早く道を歩け。一緒に抗めよ。」

竹園がコンソールのスイッチを入れると、モーターでエロスを運搬した機体が喚び、体中にケーブルを接続し宇宙船のコクピットのような狭い操縦に収まっていた。

1. *What is the main purpose of the study?*

巨大なスクリーンには、徳富健から現れたパトランティスの影が、暗闇で表示されていた。刻々と移り変わる画面に、竹岡は押絵を集中させスクリーンを見つめている。

七、八、九、十、十一、十二



ラタシア最大船長の長距離の引き金を引いた。

付成太監の遺言

アタタタシアの地帯で牛草を食った鹿の村すが、無道野の牛を喰ひ殺ける

それと、前掲の「出来た」は、どの映画を指しているのか、加太は「子猫がアタラクシアの映画から脱獄した」と答えた。

摩訶訶の山を大くり取り取りながら昇んで行く。例の沼の如き置かず、其國の山と云ふは其國の上を横切り一瞬でランドンへと到達する。

イスの轎輦が沈んで行った。

この本は、フランス語の

「E」

前四、エルマを愛顧したときから更にパワーアップしている。敵の魔球にも、かなりのダメージを与えたはずだ。

「曉曉三三三，定得一龍成，國勢強壯上平百二十戰，請快來擊破。」

タイのムンセージが、この本に流れる。そして、アタラシシアで戦いが起きた。

[illegible]

「**愛の言葉**」

獨逸が押つてゐる機動用コタビットは、飛行機と汽船のシムレータリのような装置であつた。艦隊と機動隊のようなたとりがあり、周りを武庫の計測とスイアチが取り囲んでゐる。その狭いスペースの中で、獨逸からアラタタシアへ勢力を拡張するためのタートルが押し込まれてゐた。それが獨逸海軍の、アラタタシア主眼の威嚇であつた。

アマタラシアの中に作られた、巨大な地下トンネル。その一番奥に国策家たちはいた。ここに粒子の発生装置があり、一頁線のトンネルが加速器になっていた。その中を数万人もの経路材のスタッフが、次の実験準備のために動き回っている。

【参考文献】

「もよの上でござい。まだ縁が絞わってないから、そのままに晒してて」

母島は遠くには島又島が阿列の如く下りて

「各都庁エタタぬいで、  
海運課はアル輪船してゐる。  
サブの五番は喰れやすかつたでしよ。急いで確認して」

に料理と巨大な舞臺が、運用するにも百人單位の人員が投入されている。しかも、最先端の実験的技術であり

確立された技術ではない。一瞬間つにも準備が不慮な上、想定外のことがよく起きる。発射に成功したとはいふ、実験が問題なく進めるとは限らない。

「レイマ、バトランティス軍の動きが変わった。まだ二日は撃てないのか？」

ダラベルの通話が無線のアロ・ティンダウにも入ってきた。

「あと五分はかかる。そつちで持ちこたえられないか？」

無線の答えに、ダラベルは渋い顔をした。

「敵は戦艦と空母での突入から、戦艦兵器を前線に送り込む形に戦術を変えてきた。戦艦ではないが数が多い。撃ち落とすに暇がもたらぬか？ 可能性はある」

無線は休からケーブルを外し、発射用コタビットから降りた。

「姉ちゃん、俺が出る」

「待て、お前はそこにいる。発射準備が整ったときにお前がいなければ困るから」

「しかし……」

「イズガルドから降りた戦艦兵器がアタラクシアを撃っている。心配するな」

無線はそう言つて通信を切った。

ナユタラのモニターに、アタラクシアの防壁ピルの上に立つ戦艦兵器の姿が映る。バトランティスの戦艦兵器でいうと、アルバトロスにある機体も、だが微妙にデザインが違い、バトランティスのものに比べると洗練されている印象で、いくつか社が前のモデルというイメージだった。

その姿を見ているうちに、無線の顔に自覚的な笑みが浮かび上がった。

「それにしても……まさか、戦艦兵器にこのアタラクシアを撃つてももう日が来るとは思わなかったな」

コンゾールを覗くと、壁とした所で指示を出した。

「CエリアからCエリア、機体を連れ！ 来るぞ！」

ダラベルの予想どおり、イズガルドの防衛ラインを突破したアルバトロスがアタラクシアに迫ってきた。アタラクシアの防衛システムが戦艦兵器に向かって攻撃を繰り返す。しかし、主眼である巨大戦艦以外では、そこまで大きな成果を上げることが出来ない。

それを見て、無線はすぐさま命令を出す。

「戦艦兵器部隊、行けっ！」

イズガルドの戦艦兵器が攻撃に飛び立ち、空中でアルバトロスと衝突する。見た目は旧型に見えるイズガルドの戦艦兵器も、一歩も引くことなく応戦した。

「確かに性能は劣るようだが……今は数で何とかカバー出来ているな」

思つたより順りになる隙の人に、無線は胸をなで下ろした。

それは主線の発射装置にいた無線も同様だった。

発射用コタビットに収まったまま、モニターをバハバしながら見つめていた無線だが、イズガルドの戦艦兵器が段々離れ離れになるようになってきた。

「その調子だ、消えれよ！」

心の中で応援をする無線の顔には、ナユタラのウインドウが開いている。そこから無線とケイのやりとりが聞こえてきた。

「ケイ、アタラクシアに到達した敵の戦艦兵器はどれくらいだ？」

答えるようにケイがモニターに敵と味方の勢力図を表示させる。アタラクシアを表す円の周りを、敵を表す光が動き回っている。

「さつと二、三十機というところだが、数が多いう上に速度も速い。全ての機を撃破できてはいるかは……」

「そうか。戦艦兵器なら機体もだが、万一戦艦兵器が陥れるんだったら、見逃すかも知れないな」

無線も勢力図を眺め、表情が悪くなってゆくのを不安に感じた。確かに、かなりの悪戦状態になってきている。これでは戦況を把握に困難するのは間違だろう。そんなことを考えていると、ふと無線を感じて顔を上げた。

無線の目の前で、顔のない少女がいる。

戦艦兵器を身に付けていても、戦艦の体に確々しい無線が面つる見える。スカートを穿き忘れたような、パンツァーの下半身。そして、両手に持った発射

干渉外の存在に、無線の思考は一瞬間まった。

「こんな大層に……隠れてたのか。レムリアの戦士」

——ルノーウ

ルノーウが顔を覗き突っ込んで来る。

「速い！」

最初用コタビットが真っ二つに切斷された。瞬間に絶対領域を崩壊したが、身を守るのが精一瞬だった。コタビットから投げ出された偽無の体が、壁に舞れる。

「くっ……まずい！」

「ここで戦えば、主敵が使えなくなる。こいつは絶対領域崩壊の重要な手段だ。」

コタビットの破片をまき散らし、転がりながら体勢を立て直す。スラスタを全開にしてルノーに突っ込んだ。

「ふっ！」

カウスターを駆ろうと剣を前に構えるルノーに向かって、絶対領域を二枚重ねて出現させる。

「まだだ！」

「うおおおおおおおや！」

絶対領域を壁にして、ルノーに衝突した。

「くそっ！ こんなもの！」

足踏を突き立てるが、さすがのルノーでも簡単にはこの壁を破ることは出来ない。

「このまま一気に押し出す！ もっと出力が欲しい！」

偽無の背中から爆音が生成され、見えない手で組み立てられるようにしてスラスタのパーツが出現した。ダブルとアルディアと、連結改造をしていかけて、スラスタもかなり強力な推進力を持つている。偽無は全能力を駆り込み、二重線の加速器の中を飛走した。

あまりの加速にルノーは身動き出来ないまま、アタラクシアの外まで押し出される。

「よしっ！」

偽無はルノーの体を投げ捨てるように、絶対領域を押し飛ばした。ルノーは空中で漂ふとどまると、恐りの表情で偽無を睨み付けた。

「おのれ……！」

偽無は壁を突破して、ルノーに言い放った。

「人の家と勝手に入るのは良くないぞ！」

偽無の顔の端で、絶倒のフロイラインダウンドウが閃く。

「偽無！ 何があった！」

「ルノーが加速器の中に現れたんだよ！ 今、交戦中だ！」

「何だと!? おい、状況を！」

絶倒に答える間もなく、ルノーが振りかかって来た。

「うおっ！」

両手から繰り出される二本の剣撃は、凄まじい速度で偽無を切り倒ろうとする。左右のコンビネーションは見事な、かわすのもやっとだった。

「ちっ！」

何となくルノーから距離を取った。

「さすが……かわすのも……ぐっ！」

エロスの攻撃に切れ目がなかった。そして、偽無の頭から血が噴き出す。

「逃げきれなかった……のか？ ギリギリだが、かわしたつもりだったのだ。」

偽無は両手から目を離さないようにして、頭から流れる血を手で拭いた。

ルノーは二本の剣を軽く上に投げると両手に持ち直す。そして、今度はお仕合のるとばかりに、偽無の頭を、喉を、

「動き……にぶい、止まって見えろ。あのままコロアセオにいたら……おそろく一週間で死んでいた！」

偽無は目の前にいる二万歳の少女に戦慄を覚えた。

「一週間で……お前はコロアセオで、どれくらい生き延びたんだ？」

偽無の言葉を思い出したのだらうか。それとも、人見知りな顔をしていてる相手に対しても変わらないのだらうか。ルノーは二重表情を浮かべた。

「……五年」

しかしルノーは偽無とそう遠くが変わらないように見える。五年前という、下手をすると小学生くらいの歳だ。「そんな小さい頃から……何で、殺し合いなんかやらされてんだ！」

「やらされていたんじゃない」

「誰に行く当てもなかった……」

「ルノーラ、お前は——」

「ねールノーラ！ あたしも来たよ！」

嵐天気を声が響り込んで来た。

「ラムザ、やつと来たか」

ルノーラは傭人のように、はきはきと語をした。

上空から、赤い髪に小さな赤い翼、ビキニアーマーの魔導装甲が現れた。

「魔導装甲のラムザ」

更に悪化した状況で、魔導は行動をした。

ラムザの力は未開成で手の内が分からない。だが、いつも魔導装甲の一人、手強いことに間違いない。それ以前に戦うのは、戦いのものをルノーラに止められていた。向かってくる魔導の能力を秘めている可能性が高い。

「くそっ、こいつくらいは足止めして決まっただけ、ダメだ」

「ちよつと手固取っちゃってさ、手固減しながらって大変なのよ。でもよ……」

期待に押しかけて、屋下のアタラクシアを見おろした。

「あそこなら、本気を出してもいいんじゃない？」

「ああ、構わない。だが無理はするなよ。くれぐれも暴走しないようにさ」

「よっしやあ！」

ラムザはトマホークを手で、アタラクシアへ降下した。

「まずい！ と、ラムザに気を取られた瞬間、二本の剣が目の前に迫っていた」

「くあああああああ……」

ルノーラの剣がエロスの装甲を叩き割り、魔導装甲を失った魔導の体をアタラクシアへ叩きさせた。魔導は、装甲場に駐まっていた車の上に降下した。その瞬間で、車の屋根が割れてガラスが粉々に砕けた。全身を叩き付けられ、魔導の呼吸が一瞬止まる。

「が……」

魔導の殻を破って、ルノーラもふわりと駐車場に降り立った。

「よそ見なんて……これじゃ一瞬間どころか、三日もたたない」

魔導は吹き飛ばしながら、剣とか体を回転させ、車の上から地面に落ちる。その直後、今まで乗っていた車が真つ二つに割れた。車を回転した魔導は地面に割れた目を刻み、魔導の殻を砕け散らした。その魔導成で魔導の殻が切れ、血が流れる。

スタラップになった車の向こうで、両手に剣をよら下げたルノーラが立っている。再び剣を握るようとしたところ、

「ねールノーラ、この道でいいの？」

駐車場から少し行った先の十字路で、ラムザが手を振っていた。

ルノーラは振り向きもせずに答える。

「ああ、そこから地下に降り込め」

「よーし、やるぞー」

ラムザの赤い髪の手が、本物の炎のように輝き放った。ラムザの体が高熱を放ち、屋下のアスファルトが融け、煙立ち結める。周囲の本々が火を放ち物々上がる。突風を巻き起こした。たちまち熱風が魔導の殻を打つ。

「な、なんだ？ あれは」

「あれが……ラムザの力」

ラムザが放つ熱は、アタラクシアの装甲パネルを溶かす。地面に大きな穴を開け、その下に陥っていたライブラインのパイプやケーブルが炎を上げ、融けて消える。

これだけの高熱を放てれば、ラムザ自身も魔導では済まないはずだ。しかしラムザの体は持ちこたえような顔を見て、魔導は愕然とした。

「うーん、やっぱ全力を出すって覚悟らしい。暴走しちゃうと雨止めがきかなくなるけど。まあ調子いいし、大丈夫よな」

そんなことをつぶやきながら、調子よくに伸びた息をしている。

「うっ……くそ、近付けれー」

止めるべきだが、あまりの高熱に堪えられなかった。それどころか、遠くにいるだけで息が出来なくなりそうだが、これでは、ゼルティスでルノーラがラムザを止めたのも道理だ。

「僕は一日その場を離れた。ラムザのいる十字路から遠くから遠くのように飛んで行く。  
「こちらへ帰れ！ ラムザが高熱を起してアタラクシアに穴を開けようとしている！ このままじゃ主君はおるか、アタラクシアがぶつ壊れる！」

「なんだと？ 誰かだ、アタラクシアの護衛に別荘が——」  
陸奥との通話が途切れた。そしてラムザがいた辺りで爆発が起きた。別荘が空へと立ちのぼって行く。僕は走り去った。

アタラクシアの中を走っているケーブルや無線システムが死んだらしい。

あの高熱では、アタラクシアのシステムを内庫から破壊し尽くすかも知れない。

「どうやって奴を捕縛すれば？」

別荘を考える余裕もなく、今度はルノーラが迫りすがって来た。

「レムリアの騎士、警戒！」

スビードはルノーラの方が速い。このままでは追いつかれる。

「暫り合いやスビードじゃ勝てねえ！ だったら、これだ！」

僕は手を止けると、その中に先の椅子が飛び、巨大な網の影に光が隠れる。中から現れたのは巨大な剣。そして瞬間に剣を待つ網と向本の網身が円形に重なると、その二つが融合した連続網だった。

「大力で勝負だ！」

連続網が剣を上げた。息つく間もなく、剣が網のように流れ出て行く。君舞する度に剣が柱を上げ、僕は驚き起こる。お早く動くルノーラを追いかけ、連続網を繰り返すうちに、連続網が完全に壊れた。

「しまった、何も見え……」

ぞくりと背中が冷たい脚が走った。それは生きる事への本能だ。本能は射のようになり、振り向きざまに連続網を振り抜いた。

網の中で鋭い金属音が鳴り響き、火花が散った。風圧で網が吹き飛ばれると、ルノーラが右手の剣で連続網を止めていた。

「くく」と僕は網が切れる。

連続網の連続網の「網」を片手で切られた。ルノーラの網はもう一本ある。残った片手の網で剣を付けられたら、

殺される。その剣は今にも斬りかかってきそうだった。しかし、その姿勢のまま動かない。

二人の緊張した視線がぶつかる。

「どうした？ なぞ攻撃してこない？」

僕に思いつく、その直前には思考を読み取れないかと、僕はルノーラの顔を見つめた。

その時、ルノーラの中では、わずかな迷いが生じていた。

「アイナス様は、騎士王ズナに手を出すと、罰つていた……しかし、ダレイス様とゼンシオー本様からは、罰金があるはずだ、との指示も頂いている。」

しかし僕には、そんな心の内は分かるはずなかった。仕掛けてこないなら、話をするチャンス。僕はそう判断し、思い切ってルノーラに話しかけた。

「お前、行く處でがなからコロッセオで戦って、って言ってたけど……家や家族みたいなもんは、なかったのか？」

ルノーラは剣を握る指に力を込めた。自分の部屋に、見知らぬ他人が土足で入ってきたような気分だった。心に嫌な思いを、なぜこんな奴に教える必要はないのか。

「やはりゼンシオー本様の命令を優先すべきか。」

僕の質問が、目の前の相手と違ふと聞かされても、しかし自分の手にかかり、すぐに死ぬ人間だとすると、気が変わった。どうせすぐに死ぬ人間なら、何を話しても平気。話せば少し楽になるかも知れない。そんな気まぐれで自分の過去を話した。

「いたが、死んだ。家もなく、親も当てのない私は物乞いをして暮らしていた」

正直に答えたルノーラに、僕は驚いた。まさか本当に答えてくれるとは思わなかった。

「よく知る物もなく、食べる物もなかった……でも他人の家を覗くと、暖かい部屋や、美味しい食事があり余っている。同じ世界に生きているのに、すぐには凍えて、餓えて死にそう人間がいるのに……私は、それが不思議でならなかった」

ルノーラは特に感情を表さず、冷たく言葉を紡いだ。

「そんなとき、コロッセオの主権者が連続網に突いていた私に声をかけた。見聞物としての殺され役が必要だったからだ。最初の相手は、子供を殺すのが趣味の太った金持ちだ」

「そんな試合が……いや、試合ですらないが」

「さすがに公式試合では無理だ。だが商業や卓試合では……ひどい内容は、いくらでもある。特に昔は。それで、私は申しわけ程度のナイフを一本贈された。そうして言われたんだ。『これは贈し合ひだ。相手を勝てば金がもらえる。だが負ければ死ぬ』」

それは傷痕も聞かされた内容だった。しかし、そんな残酷の子供に交さなければならぬ勝つる勝たぬ、傷痕は黙りを保てたが、ルノーラの反応は違った。

「そんな夢のような仕事があるのか、そう思った。命は惜しくなかったから、負けて失うものなんてない。それなのに勝てば賞金もらえるも、そんな一方的な、都合のいい話が本当にあるのかと疑った。でも本当だった」

少し驚かしく感じているのか、ルノーラは目を細めた。

「話を聞いて、大きな剣を持った金持ちは大きく、理も私が殺されると思っていた。しかし私には、どうやらたら相手を勝てるかですぐに分かった。対戦りの剣を上げて、そのまま勝負で心臓を刺した。勝算は仕事だった。金持ちを殺したことで、賞金をもらった。初めて働いて得た金だった」

「そうか……」

そんな凄絶な人生を歩んできたのか。

傷痕はルノーラがコロッセオで競争の瞬間を生き延び、死神とまで呼ばれるようになった事実を、改めて噛みしめた。

「それからゼルシオー・ネ禄に送って貰いて、私はコロッセオを離れた。ゼルシオー・ネ禄は私を放ってくれた……それはラムザも『嫌だ』」

「あいつもコロッセオの出身なのか」

「あいつは幽霊にいた……殺処分されるはずの子供だった」

予想外の答えで、傷痕は返事が出来なかった。

「ラムザはあの特殊能力のせいで、腹にも見捨てられ、誰からも助けられていた。能力が制御できず、収容された施設すら燃やしてしまった。そしていよいよ処分されそうになったとき……ラムザを救い上げたのも、ゼルシオー・ネ禄だ」

「そうだったのか……」

傷痕の記憶の中では、サディスタインタに敵をいたよと金がゼルシオー・ネ禄のものである。しかし、それがゼルシオー・ネ禄の全てではない、ということなのだろうか。

「ゼルシオー・ネ禄が私を大事にしてくれるのはありがたく思っている。しかし、私は敵を殺して憎悪を解く以外の手段を知らない」

傷痕は決々と語るルノーラの顔をじつと見つめた。

「生きる糧も、感謝の気持ちも、思慕しも、無しなら、他人の血で順うってことか」

ルノーラは気が付いたように顔を歪めさせる。顔が歪んだときの顔はすっかり隠れてしまい、いつもの人見知りの顔色に戻った。

「喉がすきた……すぐ死の相手だから、いいけど」

満足そうにうなずくと、傷痕はにやっと微笑んだ。

「話が聞けて良かった。だが金目玉死のわけにいたなくなっただけだな」

ルノーラが静かに唇を歪せる。

「……なんで？」

「そんな大事な話を聞いた以上、俺一人ではまだ死ぬわけにいかないだろう？ みんなでルノーラを幸せにする会でも作ってやるわ」

「な……」

ルノーラの顔が真っ赤になった。そして喉に剣を刺さった。ルノーラらしからぬ屈辱な一撃が、残酷な瞬間を刻んだ。無言の屍が、いとも簡単に倒れ二つにされ、地面に落ちる。

しかし、むしろない不用意な一撃は、傷痕に償い負わせることが出来なかった。

「は、人に言う気か」

「ああ、それと、どうあってもお前を倒さなければならなかった。負けたって死ぬ必要なんかはないって知ってもうたために。そして、戦わなくなつて生きていけるってことを分かってもらうために」

言うやいなや、スラストを咄転してルノーラから頭部を取る。

「は、誰がすか！」

ルノーラがすぐに傷痕の腕を握った。

通いつかれるまでのわずかな時間、次の手を考えなければならぬ。

——銀剣が、動かぬといふと、どうする？　傷が今癒えるのは、グラベルとアルディアとの連携攻撃による効果。だとすれば……

二人と戦ったときの内容が記憶のうらに浮かんだ。

傷無は胸を刺さると、スピンターンをして止まった。そしてエロスのコアをフル回転させ、全身に魔力を散らす。

「いくぜ、グラベルを倒したときのように！　ルノータが逃げ場を失うほどの火力を持ってこい！」

傷無の背後に、銀剣が生成されてゆく。銀剣は一つ、そして二つ、そしてあつという時に背後を埋め尽くすほどの量へ増大してゆく。

傷無の後ろを這って角を曲がったルノータは、目を凝った。傷無の背後に、あまり立つ銀剣の量がある。

まさけ——、そう思ったときには既に、腹のような衝撃にさらされていた。

「くっ！　これが、俺に勝つ魔王の力か！」

配下にした魔導師士の能力を己のものとするのは知っていた。しかし、その武器を自在に増やすことが出来るというのは、にわかには信じ難かった。

だが、これで倒しざるを得ない。

しかしながら、それ程の力を見せ付けられても、ルノータの心には驚きも動揺もない。機体生命のピンチにもかかわらず、ルノータの頭は冷え、冷静に状況を分析した。それはコロッセオでの経験によるものだ。今は、ここがルノータのコロッセオだった。

——大丈夫、逃げられる。

確かに攻撃は多い。しかし、着弾位置には一定のパターンがあり、冷静に対処すれば、避けることも逃げることも出来る。

そして、同時に殺すことも。

コロッセオで生き残ったルノータの腕力が、弾丸を避けながら傷無へ逆を突き逆撃を見破った。ルノータは思い切ってそのムートに突っ込んだ。

雨のような弾幕の中、カミソリの刃を避けるような動きをする瞬間を待って、傷無へと向かってゆく。ミサ单位の

攻撃範囲で攻撃をかわし、右へ、左へ、そして足を下げ、左へ。あつという時に傷無に迫る。

予想外だったのか、傷無の顔が驚きに歪む。

ルノータは両手の剣を構えた。このとき、傷無を振り回すコンビネーションを決めた。

傷無も手に剣を持っているが、恐れることはない。右手に銀剣、左手には槍。どちらも自分のスピードに付いてこれる。

傷無が銀剣を振り上げる。

だが、自分の肩の辺りの方が速い。

傷無は攻撃するより、左手の槍をルノータに向かって刺さる。だが早速また空振りだ。足下を踏ったつもりなのだが、槍の穂先は地面を滑る。

この槍で動きを止めて、銀剣で振り付けるつもりだったのだろうが、全く効果がない。

ルノータは傷無の懐に飛び込んだ。

銀剣は完全に振り回れている。それどころか、まだ振りかよったままだ。

ルノータの両手の剣が、一瞬で両度の斬撃を叩き込む。

はずだった。

必殺の四連撃が通った。

——を。

傷無の体が、一瞬にして涼しいていた。

——何で？

傷無の左手の槍が砂を跳ね上げ、振り回されている。

その槍が刺った地面が、涼しい。

その時、傷無の手にした槍の正体を思い出した。

あれは、アルディアの。

——空間を歪ませる、槍。

ルノータの体を歪ませ、衝撃が貫いた。

「うおおおおおおおおおおおおおおあつ！」

鉄剣がルノーラの腕を掴み、セレスを放した。ルノーラの体は勢い出された弾丸のように吹き飛ばされ、ビルの壁に叩き付けられた。あまりの勢いに、そのままビルの壁を破壊し、転がりながら何こうへ突き抜ける。その衝撃はルノーラの肉体にも、強烈なダメージを与え、力を失ったルノーラの体は、まるで人形を転がすように道路を転がってゆく。転がっているが、不思議なほど頭の中は冷静だった。

ああ……自分は負けなんだ。

さっきの神話。あれは神話があつたんじゃない。あらかじめ用意されていた。神に血が上って勝負を怠いだ自分だ。その血にまんまと乗ってしまった。

それに、グラベルだけじゃなく、アルディアの能力まで同時に自分のものに出来るだなんて。

そうか。これが敗北。

これが、レムリアの騎士の力。

地面に倒れ、ルノーラは気を失った。

その横らに傷痕がやっていた。

「おい……生きてるか？」

ルノーラの腹事はない。しかし、呼吸はあつた。

「手当てをしてやらないか……今は——」

「腹事か。キズナ！」

その時、上空からグラベルとアルディアが降りて来た。心配そうに二人は、傷痕だらけで戻った。

「グラベルたちこそ大丈夫だったか？」

「すまん、断崖から出現するゼルタイスの守衛隊が、想像よりも数が多い。それで手回取ってしまった——」

理由を説明しようとしたグラベルを制止し、傷痕は灰が上がつっている方向を指した。

「そんなことより、あれを何とかしたか？」

灰が硬い速度で流れていき、紅蓮に輝く球体となつていた。直しい灰と熱はアタラシアの装甲を融かし、今やその殻の半分は地上を地下へと沈めていた。

アルディアは引きつった顔で冷や汗を流した。

「あまりおそろしくないわね。一体なんなの？」

「あれは……」

そう傷痕が言いかけたとき、灰の球体が突然として大粒を上げた。

「（お？）」

アタラシアの全体を揺るぶ震動が、傷痕たちを襲った。草の道路の排水溝から灰が吹き上がる。

「衛生！ ラムサめ、やりたい放題だな！」

「ラムサだぞ！」

グラベルが驚いたように叫んだ。

「ああ、あの灰の中心にラムサが——」

灰の球体を踏ました傷痕の膝元に灰の煙が迫っていた。

「うおっ？」

「まっああっ！」

「潰れ！ 二人とも！」

グラベルの叫び声で、傷痕とアルディアはスラストーを差開にした。空に飛び上がった三人は、同時に灰の津波

を避けた。

「な……なんだ、ありゃあ？」

空から見ると、ラムサの大粒から灰の津波がアタラシア全体に広がってゆくのがよく分かった。大粒の作る穴は道路にも直線を形作り、道路のようなところを駆けた灰を流し出させている。地面の下でも灰が広がっているのだから、排水溝や、マンホール、地下鉄の入り口など地下とつながっている口からは、灰が吹き上がっていた。

「くそっ！ ラムサめ、調子に乗っちゃって！」

燃える傷痕に、グラベルは叫んだ。

「あれはラムサの仕業か？」

「ああ。あの中心にラムサがいる。体から高熱の灰を放しているんだ！」

灰の球体を中心として、道路にひび割れが走った。傷痕が驚愕するように跳ね上がると、中から激しく蒸気が吹き上がる。

「灰の親いはアタラシアの土壌を無力化することだ。だが、これはそんなにレベルじゃない。土壌はあんな、アタ



ラタシアそのものが融かされる。」

地下の配管やパイプラインが死んだのは、街中に露出されているデジタルサイネージが一斉にシャットダウンした。真つ空に舞える塵埃から流れ出る炎は、瞬間が炎の様に燃え上るのにアタラシアの周囲を包み、どんどん燃え広がってゆく。

「くそっ……とばかり思っへて行く。これ以上、放っておけない！」

「ええ、ここでも焦いのだ、近付くなんて正気とは思えないわ」

文句を言いつながら、アルディアはよしと二人についていった。火球の直上につけると、足下から上がってくる炎の熱波は想像以上だった。

汗を流しながら、グラベルは離れない様子でつぶやいた。

「確かにラムザの特効能力は聞いたことがある。だが、いくら何でもこれは……どうだアルディア？ お前はラムザと、この作戦に参加したことがあったな？」

アルディアは手で顔を隠しながら、うんざりしたように答えた。

「そうね、以前、海戦でのラムザを見たことがあるけれど、ここまで規模も大きくなかったし、これはちょっと……異常ね」

太陽がプロミネンスを吹き上げるように、火球から噴射炎が吹き上がる。そして、穴の直感を広げつつ、アタラシアの中へ侵入し込んでいった。

「お前は、ラムザに何かあったのか？」

「必死で解決方法を考えてたが、何も思いつかない。しかし、ふと試してみたいことを思いついた。」

「あいつも魔導装置を着脱しているなら、適宜で話が出るんじゃないか？」

「お前はアロリーアインダウインドウを開くと、ラムザがいる場りの情報を元に、通信相手を探った。」

「解決方法ってわけじゃないが、説明することは出来るかも知れない。そめてその糸口だけでも……」

突然ウインドウに赤い髪の少女が映った。その少女は正装に整くと、声を上げた。

「うわっ！ びっくりだわ！ 誰かと思つたら、まさかレムリアの魔王からとはね」

ラムザはレムリアと話すときと同じように、明るく微笑まない話し方だった。

「ラムザ！ お前は一体何をやるつもりだ！」

「ん？ この魔導を無力化することだよ。特にあのこつに集中した」

「やっぱそうか、と魔導はうなずいた」

「このままだと、主眼を射るに足りなく、このアタラシアが沈む。そうなれば、お前の方で大勢の人たちの命が失われてしまう。それだけは俺と本気で戦ってもらえないか？」

レムリアの話によれば、過去にこの力が原因で人々に災難をもたらしている。もし、それを悔いているのであれば、或いは……

「うーん……出来れば、そうしたいんだけどね……」

ラムザは固ったように唇を寄せて微笑む。

「だってさそうしてくれ！ 頼む！」

「お前は、実はあたしもここで戦士にするつもりはなかったんだけど……」

「笑い事じゃねえ！ だってさ早く……」

「俺は暴走しちゃうって……もう、止められないんだ」

「な……」

——何だぞ？

魔導は口を開けたまま、言葉が出せなかった。

「調子が悪いと、炎が止まらなくなることがあるんだ。でも、ここまでひどいのは初めて。何だか、自分の炎に自分自身に燃えられちゃう感じがして……」

「何か、止める方法はないのか？」

ラムザは顔をかいいた。顔には汗をかいていて、ラムザ自身も熱そうに見える。

「魔導装置を解除すれば止まるけど……魔導装置も言うこと聞かなくて……コア自身も熱でおかしくなっちゃうのか？」

「あんで、悪いけど早いとこ……でも何でもしてよ。確かに人に人を殺すのは好きじゃないし」

どこか諦めきつたようなラムザの態度に、魔導は逆巻くのを覚えた。

「それで、この暴走はいつ止まるんだ？」

「分からない。でも、あたしが死んだら止まると思う」

なに？

「なんか、あたし自身が燃えそうなくらいに熱いの。このまま燃え死ぬか、魔力を使いまわして死ぬか……だから、あたしのことば、信つていいよ」

そう言うとお話が終わった。

——くそっ！ 暴走だぞ？ しかし、ラムザが死ねばいいぞ？

「偽悪！ 聞かせるか！」

「偽悪にナユタゴとの同様に復讐した。しかし貴族のみで映像はノイズだけだ。」

「嘘ちゃん！ いまラムザから真実を聞けたんぞ！ うおっ！」

それから見おろしていても、足下のアタラクシアが大きく揺れたのが分かった。地鳴りのような音が響き、そしてその音が段々大きくなってゆく。

「まさか、これは……」

こもったように巨大な爆発音が聞えて、もう一度激しくアタラクシアが揺さぶられた。そして側面から巨大な炎を吐き出した。

「あれは……主塔の燃料口のある通り……まさか……」

「そのまさかだ。たっ！ たっ！ 主塔の燃料システムが破壊された。これでもう燃料切れを撃つことは出来ない。だが、ラムザの部屋は更に上昇し、被害を及ぼしている。あと数分でアタラクシアの底に突き抜けるだろう。もはや降参を聞けることも出来んし、避難も間に合わない」

「……」

「アルディア、お前の情報だ」

「私の？ 一様、何をさそうって言うの？」

「警戒するような声で、アルディアは首をかしげた」

「塔川を降り込めた立方体建造物だ。あれを使つて、ラムザを排除してくれ」

アルディアは口の端をつり上げた。

「ふふん、なるほど、降り込めてしまえば、自身の熱で勝手に自滅するってわけね。まあ、問題は立方体建造物がラムザの高熱に耐えられるかどうか、だねと……やつてみる価値はあるわね」

「同としてでもラムザを助しろ！ 頼んぞぞ！」

フロアティンダウインドウを開いた瞬間は暗くなった。すぐに行動を起こさなければならぬのは分かっている。しかし、ルノータに聞いたラムザの生い立ちが頭をよぎる。

「どうしたの？ 行くわよ、キズナ」

アルディアが突然と冷めたまなこで無言の面をかける。

「ああ、分かっている」

アルディアは火球の作った穴に向かって降りていった。まるで火山の大口に下りてゆくような気持ちだった。

「う……結構熱いわね。でも、もうちょっとだけ待たないと、立方体建造物を組み立てられないわ」

「もう少し降りよう。穴の中へ突入するぞ」

あっさり言うグラベルに、アルディアは不満そうな顔をする。

「簡単に言ってくれるけど、面倒くさくて大層しやうぞ？」

「いいから黙れ。後で謝るでやる」

「も……絶対……」

息を止めるようにして、アルディアは穴の中へ入っていった。その後グラベルと偽悪が騒ぐ。

穴の底は深淵のように赤く輝き、どろろりと降りていく。そして行く手には溶岩がのきを丸く固めたような物体が渦を巻いている。生き物のようになどめく火球に向かって進んでいくにつれ、林檎の皮が剥くように十センチずつく度には面が上がってゆく気がした。全身から汗が流れ、頭が眩暈としてくる。

「もう、これが限界よ！」

海のような夜を流し、アルディアは泣きごとを言った。

「目標まではあと五十メートル。半死だったから、とうくに倒れ死んでいるだろう。ついにアルディアは停止し、体を支える六枚の羽を分離させた。

偽悪はアルディアの背中に向かって叫んだ。

「この瞬間で行けるのか？ アルディア」

「同とかするわね。行けっ。立方体建造物！」

アルディアの体から放射が射かれ、十字形のパーツに凝集する。全部で六個の十字が炎の球に向かって飛んでゆ

アルディアは急遽を集中させ、コントロールをした。玉のような音が胸の脇間を流れ落ち、十字形のパーツが固を構成し、立方体を作った。この立方体の中に閉じ込められたものは、瞬間不可解だ。魔導装甲セルの方を使い、空間を歪ませることで完全な事故を作る。瞬間不可解なため、熱エネルギーも立方体内部の間に閉じ込められる。アタラクシアからラムザを排除し、同時にラムザ自身を己のエネルギで融す、一石二鳥の作戦ということになる。

十字形のパーツは炎の中に沈み、姿を消した。もしや融けてしまったのではないかと、傷類は不安になった。様子を訊きたいが、アルディアは集中していて声をかけるわけにはいかない。熱さだけでなく、焦りや胸の内がじりじりと燃やされる。

「つかまえた!」

突然、アルディアが念心の先で叫んだ。

足下で燃えていた炎の球体が、「瞬」で立方体に姿を変えて。

「やった!」よくやったぞ、アルディア!」

ドラベルもガツポーズのように拳を握りしめた。

「持ち上げるわよ!」

言うやいなや、アルディアが腕を抜けて上昇してゆく。引く張られるように燃えさかる立方体が追って来た。傷類とドラベルは驚いて外へと逃げ出し、そしてそのまま一気に上空に駆け上がる。逃げた瞬間が吹き抜ける瞬間、四角形の炎の輪が浮かび上がった。

「成功、か」

上空五百メートルに浮かぶ立方体。魔導装甲を見つめ、傷類はつぶやいた。

完全に熱を遮断しているの、近くに寄ってもまったく熱くない。だが、立方体内部を構成する十字形のパーツは、表面が融けかかっていた。

傷類は立方体内部の道路の中にあるラムザに向かって連絡を送った。しかし返事は無い。だが、炎が燃えているということは、まだ生きているということだ。

「本物か、このまま燃え尽きていいのか?」

ムノイラの声が再び頭の中で聴こえた。

「ラムザはあの特殊能力のせいで、眠にも気付かれ、誰からも逃げられていた。能力が制御できず、収容された後、自ら燃やしてしまった。そしていよいよ焼死させようになったとき……ラムザを救い上げたのも、ゼルシオ……主様だ」

「ゼルシオ……ネカ……」

「大した奴だ」

「魔導だけぞな」

傷類は口元で薄い笑いを浮かべる。アルディアに向かって言った。

「……立方体内部の道路を分解してくれないか?」

意味が理解出来ないというように、アルディアはきょとんとした顔で小首を傾げた。

「どういふこと?」

「ラムザを助ける」

「はあ? 何言ってるのよ。やっと閉じ込めたのに、せっかくの苦勞が白紙にじゃない!」

ドラベルも険しい顔をした。

「それに助けようがない。一体、どうやってラムザを救い出すというのさ?」

「ラムザはさっき魔導装甲を解除すれば止まると言っていた。だから、ラムザを炎の域から引きずり出して、叔の魔導装甲を力強く引っ張ってやる!」

燃えたように言い放つ傷類は、ドラベルは拳を握すように言った。

「キズナ、助けをかけるのが悪いとは言わん。だが、再び我々が危険にさらされる恐れがある。それは分かっているか?」

「ああ、だから、俺一人でする」

傷類はムノイラを倒したときと同じように、右手に銃剣、左手に剣を振り上げた。

アルディアは、あきらめたように魔導装甲を吐いた。

「ねえ、ドラベル? もう何を言っても無駄みたいよ」

しかしドラベルは動かない様子で、胸を燃え口を不機嫌そうに結んでいた。傷類はそんなドラベルの本



うろたえるグラベル氏、傷無は力なく微笑んだ。

「喉が痛い」

「それは……ええ」

「グラベルはしばらく慣れた顔で傷無を見つめていた。やがて苦笑を浮かべると、傷無の顔をのぞき込んだ。

「本傷はそこまで酷くはないさそうだが……命に別状もなさそうだ」

「ああ、グラベルの言ったとおりだった」

「そうだが、だが……どのような事情があるにせよ、相手はバトランティスの腹筋師だ。見殺しにしても、誰も責めはしないだろう」

「傷無は子供のように驚き、胸の中のラムゼを見つめた。

「おもて……でも」

「傷無は少し照れたように微笑む。

「未来の傷が治るような気がしたんだ」

「グラベルは目を閉じるようにうなずいた。

「なら、仕方がないな」

「でもね……助けたという点と聞かされたけれど、やっていると人は『人殺し』の中で、女の子を力なくで抱き抱え、ひん死した……ってことだしねえ」

「意地の悪そうな笑顔で、アルディアが冷やかしを。

「は、バカ。言い方ってもんがあるだろうが」

「ラムゼを隠したままの傷無を胸から支え、グラベルとアルディアはアタラクシアへ降下していった。

「まずは医者に診てもらって、それからしばらく休んで。その状態ではすぐに脱獄計画は無理だ。しばらくは我々に任せておくんた。いいな？」

「グラベルは傷無に微笑すように言った。

「そうさせて欲しいのは山々なんだが……でも、セルティスに乗り込むのはこれからだぞ。休んでいる暇なんて」

突然、傷無の顔の隅にフローティンダウインドウが開いた。

「だつ、目撃！ 大慌てやがります」

「口から息を吐はしそうな勢いで、ガートルードがどアップで囁く。

「今、ロンドンまで攻め込んだんですが、で、出やがりました！ 来やがりましたよっ」

「出たって、何がだよ」

「決まってるじゃねえですか！ アレですよ」

「ウインドウの境界がぐもつと約八十度回転する。

「衝突音がした。まだ、かなり距離がある。ロンドンの代議士の建屋物であるタワーブリッジの上空にそそり立つ巨大な四角形だ。

「一体、何が出たって……」

「そニターされている映像が、衝突面にズームアップする。やや解像度が粗くなったが、人の姿が浮いているのが確認出来た。

「その映像をのぞき込んだアルディアが眉を寄せる。

「人、というか……男……」

「グラベルも映像を顔でフローティンダウインドウを見つめた。

「しかし、たった二機ということはあるまい。一体、何のつもりだよ」

「映像の隅に冷や汗が流れる。

「映像が大きな音を立てて揺らめく。

「その人影に向かって、イズガルドの機銃部隊が襲いかかった。黒着を脱ぎ捨てたような機銃部隊が、剣を振り上げ斬りかかる。だが、その剣が振り下ろされるより先に、機銃部隊の姿が青の文字と図式となって弾けて消えた。

「兩式機体」

「粗い画面に映った音が、こちらを襲み付けた。

「その顔は見覚えがあるはずがない。

「ピンクの髪、赤い瞳、白い機銃部隊を青く光る映像に背負ったその姿。

「愛憎」

「傷無は青い顔をグラベルに向けた。

「ドラベル！ 全軍撤退せよ！」

しかしドラベルも目を見開いたまま、その映像を見つめ続けていた。

「バカな……なぜゼロスがここに」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

熱いを流した瞳が、かつての自分の居場所を見つめた。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

熱いを流した瞳が、かつての自分の居場所を見つめた。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

た姿勢のまま、ゆっくりと息を吐き出す。

「報酬……」

報酬は半ば完成としたドラベルの肩をつかみ、目を凝まさせるように囁きつつ、

「早く前線を下げるんだ！ 敵の機体の前では戦艦も戦艦攻撃も役に立たない。急がないと、貴重な戦力が全滅するぞ！」

我ら退ったドラベルは、慌てて前線を下げるように指示を出す。すると愛音は驚けるようにして、戦艦が左右に

開きながら後退した。そして中央に、アタラクシアまで直ぐ近くに逃げた船が隠れた。何もない空を、愛音は前立し

——僕のせいだ。

報酬はあの夜、愛音の声を聞いた時がして、返事をした。

それ自体は、どうということではない。ただの気のせいだということも分かっている。返事をしたところで、た

だの独り言だ。

しかし今の報酬は、それが愛音の時が過ぎてしまったように思えてしうがなかった。ただの思い込みなので、

そんなことは言に出せない。だが、なぜかみんなに申し訳ないような気持ちになつていた。

報酬は決意をするようにモニターを見上げた。

「アタラクシアを取撃する」

「えっ？」

報酬は我が耳を疑った。

「アタラクシアを取撃するだって？」

「正より異世界に乗り込むとなれば、アタラクシアは無用の長物だ。今回の突入の際に破壊した後は、ここで

待機するだけの運命だった。ならば、破壊したところで大して変わるん。よって、全滅したときイズガル

ドの報酬へ貢献する」

報酬の報酬による、重宝の決定だった。

「勝手にことを言っただけだが、他に手はない。認めてくれるか？ ドラベル」

「よからう。今はそうするしかあるまい」

報酬はケイに向かって指示を出した。

「すぐに近接兵器のリーダーを集める。報酬システムが使える以上、口頭で報酬を請求命令を伝達し、同時に合

わなければ、ヘラでも報酬でも貰わん。一旦、アタラクシアを離れた後で、イズガルドの船に回収を依頼する」

その時、中央管理室にキキが駆け込んだ。

「あ、報酬くん！ 捕まってきたの報酬出来たよ！」

目を開かせながら、報酬はモニターを見せる。意外の喜びとばかりに、報酬は明るい声を上げた。

「そうか！ ナイスタイミングだ。ありがとう、報酬くん！」

「そうか！ ナイスタイミングだ。ありがとう、報酬くん！」

「感情が胸に湧かない顔で胸を組む」

「用意？ 何の準備をしていたのか？」

「準備は完璧で済んだ」

「準備と使う準備だよ」

「なに？ いや……とにかく今は準備だ。お前も準備をしな」

「みんなは退却してくれ。俺はアタラクシアで愛音を探し出す」

「退却！」

「俺は退却した所で退却しつづけた」

「アタラクシアは退却した様子で首を振る」

「無理だ。キズナ自身も言っていたではないか。俺は解体の前では、戦艦や戦艦装甲も役に立たない。私のゾロ

スもキズナのエロスも消されてしまっただけだ。近頃出る手段はない」

「しかし俺は小銃に敵意だ」

「……ある」

「アタラクシアは驚きに目を見張った」

「ただ、俺だけにアタラクシアは。技術科と戦艦科の連中の助けがいる」

「キズナはまかせとけとばかりに、ガッパポーズで応えた」

「そんなお安いご機嫌よ！ もうみんなは声はかけておいたしね」

「勝てるかどうかは分からない。でも、手段がないわけじゃない。だから、俺はそれに賭けたい！ そして――」

「俺は賭けしめた自分の拳をじっと見つめた」

「愛音を必ず取り戻す！」



愛音は久しぶりにアタラクシアの地を歩いた。

しかし、周囲の景色はあまりに異変を覚悟させた。周囲の建物がほとんどなく、多くが瓦礫の山と化している。

大気を消すことも出来ないのか、あちこちから小さな炎と煙が上がっていた。中心にはクレーターのよう巨大な穴が開き、その周りで壊滅した地盤れと地盤下が起き、ビルがなぎ倒されている。

人の姿はなく、お祭りで騒動した街並みの面影はどこにもない。空気も変えていないのか、至る所に蒸気があがっていた。デジタルサイネージも全て消え、アタラクシア自体の命の灯火が消えてしまったように感じられた。ここにあるのは、かつてアタラクシアだった場所。巨大な花園であり、周囲のものがなかった。

歩いて行くと、パトランティスとイズガルドの戦艦が倒れ、巨大な残骸となって倒れていた。戦艦共々同士の戦いの痕跡だ。だが、消滅してはいないというときは、停止してはいるものの、まだ完全な死んだわけではないらしい。愛音は指定におずかに力を込めると、その残骸を手の平で押した。すると、「轟」として戦艦共々が設計図にあたる形式へと解体される。細く文字、数字、そうしたものが空を舞って消えてゆく。

木が倒れ葉を散らすように、巨大な戦艦共々の残骸が光の粒へと変わり消えてゆくと、その後ろに人がいたことに初めて気が付いた。徐々に姿を現したその人の名も、愛音は呼んだ。

「……」

愛音が押し返めていた相手は、ハート・ハイブリッド・ギアを背負って、パイロフットスリップの姿を身につけて立っていた。

「まさかロンドンに現れるとは……愛音を出し抜いたと思っただけだ。悪いな」

戦艦共々は、まるで愛音が天の地を神の一角だったときのように、音速に駆けつけた。

「ええ、逆だ。逆だ。逆だ。イズガルドに向かっていたわ。でも……向かい戦艦に呼ばれたような気がして」一人でゼルティスに倒った。気のせいだと分かっていたのに……ね」

愛音は空を飛ぶ姿を見せる。

「もしかしら、あなたと戦いたくなくて、逃げ出したかったから、そんな言葉を聞いたのかも知れない。それが、こんなことになるなんて……運命には逆らえないのかしらね」

愛音の背後の戦艦共々が舞い上がり、回転速度が上がると

「機関、もうあなたに戦う手段はないわ。大人しく投降して」

「投降？ そんな顔をして、俺は殺しに来たんだろ？」

「え、ええ……そう。そうだったわね」

「それとも連れて帰って、向こうで処刑するつもりか？」

愛音は微笑を振りつつ嘲みしめる。

「いいえ……もしそうしたら、きつと後部を殺され方をします。そんなの、あたしには耐えられない……だから、い

ふそのこと、この手で、苦しまないようだ……あなしが」

愛音は自分の両手の平を、恨めしように見つめた。

「そうか……」

「あたしは、傷痕にとっては何や願望もないものでしょうね。でも……」

愛音の言葉を遮って、傷痕は首を振った。

「いや、そうは思わないよ。そこまで俺のことを心配してくれてたんだって感謝してる」

「えっ……」

予備外の傷痕の態度に、愛音はうろたえた。

「俺を引走っているの？ 追い詰められて、何かで俺でも見ているのかしら？」

しかし傷痕は静かかた意気込みを浮かべている。その表情を見ていると、愛音の方が不安になってきた。なぜ傷痕

はこんな顔をしていて、堂々としているのだろうか？ 自分に勝つどころか、戦う手段すらないというのに。

だがを、俺は殺されてやるわけにはいかないんだ。果たすることがある」

「やることさ？」

傷痕は自信満々で言った。

「バトランティスへ行き、鋼鉄の道社の問題を解決する。そして、新世界もこの世界も、両方の世界を同時に

救う」

あまりの大言に、愛音は開いた口がふさがらなかった。

「どうかしたの？ 状況が絶望的過ぎて、頭が空になったのかしら？」

「いや、俺は正気だ。愛音だって、実際にそうならば良いと思うだろう？」

愛音はぎゅっと拳を握りしめた。

「そんなことを出来るはずがないわ」

「何か方法があるはずだ。よく考えてみよう。俺のエロスは機械的装置で動力を生み出せるんだぞ？。そこに何かヒントがある気がするんだ。それに傷痕の師匠は自然に出来た物じゃないだろう？ 必ず通った人間がいる。通った人間がいる以上、修復の方法だってあるはずだ」

愛音は言葉をかき消すように、歯を舌で挟んだ。

「それが分かれれば苦労はないわ！ それとも何？ 傷痕はその方法を知っているの？ 彫金師でも、まだ分かんないというのに」

「出来る！ いや、やってみせる。だから俺たちに協力してくれ！」

「嫌よ。保証がなくなるだけだわ！ 轉世の師匠の死に助けじゃなく、レムリアとの戦いまで市民に知れようといふの？」

「だから力強くで攻め入るようには、とたくないんだ。頼む、愛音！」

しかし愛音は泣きそうな顔で、何言っても傷痕を黙らせないでくる。傷痕は、大きな怒息を吐いた。

「……やっぱ、その心にはまず、お前を倒さなければならぬらしいな」

「どうやってこのあたしを倒すというの？ 傷痕にはあたしと戦う手段なんて、何もないわ！」

「ある！ とっておきの手段がある！」

愛音は微笑を顔で傷痕を覗んだ。

「一休、何があるって？」

「冒険！」

そう叫んだ瞬間、傷痕の背後に全金属製の外骨格が現れた。正確を押し付け、地面から飛び出してきたフレームは、

傷痕を除きかかえるようにして、その体に装着される。そしてその上に愛音は全身が覆われてゆく。

「そ、それは……」

愛音が知っているハート・ハイブリッド・ギアとも関係ある甲冑も、まったく違う存在。それは、完全な機械の鎧

だった。全金属製のフレームに骨格を被り、その内側に電子機器とバッテリー。フレームから飛び出した大型の燃料

タンク。それにギア・ターボジェットエンジンなどが取り付けられている。

機械を総動員した形態。ハート・ハイブリッド・ギアのような洗練された感じは微塵もない。小さくまとめるこ

となど、土竹不可能と言いたげな大型の機械が、傷痕の体を一回りも二回りも大きくしている。傷痕の胸を取り囲



むような、一回り長く、太い鋼鉄の輪。数センチの直径を減らすためのごつい鉄骨のような機械の輪が、傷無の足に繋がっている。

傷無は自分の腕の最長線上にある機械の腕で、アンチマテアル・ライフル型のレールガンを握きと持ち上げるが、紐ひき装置は向けた。

「いくぞー 発言」

「な……南式解体」

背後の魔法陣が輝きを増した。発言の足下に魔法陣の魔法陣が広がり、その光が傷無を照らし込んだ。

だが傷無と身に付けた装置には影響も変化がない。

「悪いな発言、こいつには魔法解体は」

傷無は不意に微笑みを見せ、各機を駆動させるモーターとエンジンに火を入れた。

「おかしな人だよー」

魔法陣の輝きが大地を照らし、鋼鉄の輪が大粒レールガンを構える。

「そんなら」

魔法に解体できない。常識を破る出来事、発言は混乱した。傷無が引き金を引くと、音速の音速で音速が飛び出した。

「くー」

発言は地面を蹴って、弾丸をかわし、最終のスピードを誇るゼロスならではの動きだった。発言は改めて傷無の首装している物をじっと見つめた。

「そのハート・ハイブリッド・ギア……いん、壊さず、それって、まさか……」

アタラクシアで見たことがある。発言はその正体に思い当たった。

「ああ、その通りだよ、こいつは、タクニカル・ギア。一瞬間力を使用しない、百パーセント地球のデータノロジーで作り上げた装甲だ!!」

アタラクシアの戦艦の生徒が、訓練で使用する練習用のヘッドウェアだ。タロスのコアをインストールする前に、シルヴィアもこれで練習を行っていた。当然のことながら、本物のハート・ハイブリッド・ギアには性能面で大きく劣り、戦闘能力においては比較にならない。

「バカに……しているの？」

「何でだよ？ こいつは初級自衛隊」

「おさげないで！ そんな練習用の装甲が何の役に立つのよ！ そんなものが、このゼロスに適用するはずがないでしょう」

タクニカル・ギアの背後から、もう一丁のライフルがスライドして前に出る。それを片手でつかみ、発言に對い

てを付けた。

「普通にあんなに強そうだな。ゼロスの足下にも及ばないよ、でも……こいつは戦えるんだ。魔法解体でも消えやしない。だから、やめなさいだろ？」

傷無が引き金を引いた。魔法の光が弾丸が発言に照りかかると、地面が揺動したように跳ね上がり、発言が倒れたが、傷無は向かって走っていた。

その動きを感知し、タクニカル・ギアのジェットエンジンが音を吐き出す。激しい音を響き上げながら、重い巨体を上空へと躍り上げた。しかし、ゼロスはひとつ飛びで傷無に迫りつく。

「魔法解体が使えないなら、普通に殴り倒すだけよー」

ゼロスのパンチを左腕の装甲で受ける。その一撃で、腕のフレームが曲がり、装甲がはじけ飛んだ。しかし傷無は倒れずに立ち、動きの止まった発言に對し、レールガンを発射する。発言はその弾丸を夢で吐き落とし、スラストターを噴射して大きく離れた。

傷無は倒れた左腕の動作を確認し、また動くことを確認すると不意に微笑む。

「確かにこいつは魔法で作った練習用だ。武器だつて基本的にあまり大きな力だ。だけどあまり強くない方がよいぞ、これは材料の連中が、情報と信念と命をかけて開発してきたんだ、それにそこらの道具とはひと味違うぞー」

「上等よー」

発言が再び仕掛ける。傷無は距離を保つように、ジェットエンジンの出力を上げる。しかし、あまり細かい動きは出来ない。大雑把な動きなら出来るが、空中で細かい運動は出来ない。

「距離を測くなら地上でねー」

ジェットエンジンの出力を落とす。自然落下で着地する。激しい地震と同時、足が地面にめり込む。しかし脚

むような、一回り長く、太い鋼鉄の輪。数センチの直径を減らすためのごつい鉄骨のような機械の輪が、傷無の足に繋がっている。

傷無は自分の腕の最長線上にある機械の腕で、アンチマテアル・ライフル型のレールガンを握きと持ち上げるが、紐ひき装置は向けた。

「いくぞー 発言」

「な……南式解体」

背後の魔法陣が輝きを増した。発言の足下に魔法陣の魔法陣が広がり、その光が傷無を照らし込んだ。

だが傷無と身に付けた装置には影響も変化がない。

「悪いな発言、こいつには魔法解体は」

傷無は不意に微笑みを見せ、各機を駆動させるモーターとエンジンに火を入れた。

「おかしな人だよー」

魔法陣の輝きが大地を照らし、鋼鉄の輪が大粒レールガンを構える。

「そんなら」

魔法に解体できない。常識を破る出来事、発言は混乱した。傷無が引き金を引くと、音速の音速で音速が飛び出した。

「くー」

発言は地面を蹴って、弾丸をかわし、最終のスピードを誇るゼロスならではの動きだった。発言は改めて傷無の首装している物をじっと見つめた。

「そのハート・ハイブリッド・ギア……いん、壊さず、それって、まさか……」

アタラクシアで見たことがある。発言はその正体に思い当たった。

「ああ、その通りだよ、こいつは、タクニカル・ギア。一瞬間力を使用しない、百パーセント地球のデータノロジーで作り上げた装甲だ!!」

アタラクシアの戦艦の生徒が、訓練で使用する練習用のヘッドウェアだ。タロスのコアをインストールする前に、シルヴィアもこれで練習を行っていた。当然のことながら、本物のハート・ハイブリッド・ギアには性能面で大きく劣り、戦闘能力においては比較にならない。

「バカに……しているの？」

「何でだよ？ こいつは初級自衛隊」

「おさげないで！ そんな練習用の装甲が何の役に立つのよ！ そんなものが、このゼロスに適用するはずがないでしょう」

タクニカル・ギアの背後から、もう一丁のライフルがスライドして前に出る。それを片手でつかみ、発言に對い

てを付けた。

「普通にあんなに強そうだな。ゼロスの足下にも及ばないよ、でも……こいつは戦えるんだ。魔法解体でも消えやしない。だから、やめなさいだろ？」

傷無が引き金を引いた。魔法の光が弾丸が発言に照りかかると、地面が揺動したように跳ね上がり、発言が倒れたが、傷無は向かって走っていた。

その動きを感知し、タクニカル・ギアのジェットエンジンが音を吐き出す。激しい音を響き上げながら、重い巨体を上空へと躍り上げた。しかし、ゼロスはひとつ飛びで傷無に迫りつく。

「魔法解体が使えないなら、普通に殴り倒すだけよー」

ゼロスのパンチを左腕の装甲で受ける。その一撃で、腕のフレームが曲がり、装甲がはじけ飛んだ。しかし傷無は倒れずに立ち、動きの止まった発言に對し、レールガンを発射する。発言はその弾丸を夢で吐き落とし、スラストターを噴射して大きく離れた。

傷無は倒れた左腕の動作を確認し、また動くことを確認すると不意に微笑む。

「確かにこいつは魔法で作った練習用だ。武器だつて基本的にあまり大きな力だ。だけどあまり強くない方がよいぞ、これは材料の連中が、情報と信念と命をかけて開発してきたんだ、それにそこらの道具とはひと味違うぞー」

「上等よー」

発言が再び仕掛ける。傷無は距離を保つように、ジェットエンジンの出力を上げる。しかし、あまり細かい動きは出来ない。大雑把な動きなら出来るが、空中で細かい運動は出来ない。

「距離を測くなら地上でねー」

ジェットエンジンの出力を落とす。自然落下で着地する。激しい地震と同時、足が地面にめり込む。しかし脚

部のシロッタアブソーバーが、ほとんどの衝撃を吸収した。

足を引き抜き、移動を開始しようとする前に、愛音に追いつかれる。タタニカル・ギアとはスビードの次元が違う。ガードしようと思つたところ、愛音の手が撃ち込まれた。強烈なスビードが夢の間に気流の渦を作る。車にはめられたような衝撃と共に、ガードしたタタニカル・ギアの右腕が吹き飛んだ。

「くそ！」

本能と同じように、愛音の動きが止まったところをレールガンで狙いに行く。しかし、狙いを付けを前に、逆に銃口をつかまれた。

「しまった。」

「そう何度も喰らってあげるけど、サービスする気はないわ」

愛音は機銃の手から、むしり取るようにレールガンを奪い取り、思いつきで投げ捨てた。

「能く武装はなさそうだし、これでいいわ」

愛音は足を踏き、腕に手を当て機銃を腕に上げた。

「愛音、もう忘れたのか？」

機銃は地面を殴るように左腕を突き下ろす。

「忘れたって……何をよ」

タタニカル・ギアの左腕は地面にある把手を回した。すると、地面が開き金属製の網が湧き出してきた。

「それは」

忘れかけていた記憶が蘇る。それは自分がまだ機銃武装を手に入れる前、機銃と出会う前に使っていた機銃。

「機銃は軍事用の……銃火薬、燃料システム」

機銃は車庫の右手でアサルトライフル型のレールガン、そして左手でアンチマテリアル・ライフル型のレールガン「銃部」を取り出し、愛音に向かって撃ち出した。

「くっ！」

撃ち込まれた愛音は機銃の網を破った。凄まじい銃撃の嵐が地面の瓦礫を吹き飛ばし、炎と煙を巻き上げ視界を奪ってゆく。

「まさか、かつて自分が使っていた防衛システムを使われるなんて。」

レールガンが連続する砲撃のように砲りを上げる。

あのとき自分が戦っていた時、今では自分がその敵になってしまったのだと、改めて察されているような気持ちになった。頭が重くなった愛音は、反射的に右へと飛び出す。銃撃が巻き起こす煙から脱出し、機銃がタタニカルになった。

「なっ……ッ」

機銃から脱出した愛音は、タタニカル・ギアが立ち上がりはかかってきた。愛音の動きを認めたかのように、拳を引いて構えている。

「でやあああああああッ！」

腕の澄ましたような一撃。モーターと油圧で加速された機銃の拳が、愛音の体に叩き込まれた。

「……くっ！」

愛音の体が膝々と面を滑る。回転しながら半壊したビルの際に叩き付けられ、コンタリートにめり込んだ。

「やっつた。」

機銃自身が目を睜けた。

タタニカル・ギアが、最強のハート・ハイブリッド・ギア、ゼロスをおっ構はした。

「いける！」

「愛音さんえええッ！」

機銃のタイヤを高速回転させた。道路との摩擦で火花が散る。動力をモーターと音中のジェットエンジンが、タタニカル・ギアの身体を一気に加速させ、愛音に向かってダッシュした。

「次の一撃で決める！」

機銃は左腕を振りかぶる。凄まじい速度で、壁に突かれた愛音に向かってゆく。機銃のタイヤとエンジンで機銃の拳を撃ち出した。

「が……ッッ」

巨大な金属の拳が衝突したような音が響く。フレームに固定された機銃の体が、前に投げ出されそうになった。フレームが体に食い込み、筋肉と骨格が変形を上げると、自動車で壁に衝突したような衝撃だった。

機銃の腕しんとする機銃は、機銃の機銃が回転する。ぐるぐる回る機銃に遠らけ、殴りつけた拳の先を見つめた。

愛音の右手が、テクニカル・ギアの拳を離れ、逃げまわっていた。

「やっぱ……そう言ひは、ないか」

言葉だけで、傷無はこぼれた。

傷無の顔を見つめ、愛音の赤い顔が冷たくある。

「そこまでして、どうしてバトルンタイスを助けるつもりなの？ 傷無に出来る事なんて何もないのに」

傷無も言葉を吐き出した。

「確かに俺だけじゃ、何も出来ないかも知れない。でも、俺もちゃんと、研鑽科のみんなだっている！ 俺たちだって、何か力になれることはあるはずだ！」

「もう那由多博士がいるわ」

「……!!」

その名に、傷無は言葉を知らずする。

「那由多博士がやってくれたことを、どうして誰かさんや研鑽科の生徒が実現出来るの？」

「その那由多博士が！ 母さんが一番信用出来る人だからだ！」

思わず傷無は叫んだ。それに反対するように、愛音も声をあげる。

「俺にないのよ手段が！ 俺にないのよ、頼れる人が！ それに那由多博士は、研鑽科のレギュラー文字を解説するって言った。もうすぐ解説出来るって！ そうしたら、助かる手段が見つかるはずだって！ だから！」

愛音の顔がテクニカル・ギアの拳を握りつぶした。彼の動きを制御するアクチュエーターが脱落され、へし折れたピストンが背のように飛び出し、血液の代わりに油が噴き出した。

「うりやあああつ！」

腕のタイヤが回転し、テクニカル・ギアがその場でスピンターンを始める。そしてつまずきを跳ね上げ、愛音に向かって叩き付ける。テクニカル・ギアで最も重い部品である腕部に、回転エネルギーを加えた跳りを放った。

しかし、愛音は流し顔で腕を跳り上げた。巨大な重量の足も、ゼロスの細い脚が跳ね返った。

「……!!」

テクニカル・ギアの腕部パーツが粉々に砕け散った。内蔵されたモーターやケーブル、油圧システムなどの部品が

が宙を舞う。何もないゼロスの一撃が、テクニカル・ギア自身の取りま、いとも簡単に打ち砕いた。

「ここまでか！」

傷無はフレームのロケットを外すと、テクニカル・ギアから駆け落ちた。そして遠くをダッシュして、必死に逃げ、その先には高さ五メートルほどの五層の山があり、傷無はその山に登り始めた。

その行動を、愛音は舌々しい思いで見つめていた。

「正直いって、俺」

あるまでもない。愛音は五層の山に登る傷無の後を追いかけて、傷無は五層の山の頂上に着くと、一番上にある現状の地形をどけた。そして、その下へ体を送りこませる。

「……!!」

五層の山から首だけを出した傷無は遠くを望み、その思ったとき、五層の山が崩れた。美しい音と煙を上げ、五層が愛音に落ちてくる。

「愛音！ こいつはハート・ハイブリッド・ギアじゃないんだ。壊されても走り続けられ、何処でも戦えるぞ！」

五層を跳ね上げ、大型のテクニカル・ギアが姿を現した。先程の機体よりも一回り以上も大きい。全高は五メートル近くある。胸も足も大型で、その胸に装着されたレールガンも膝を抜いて大きい。

「俺も、あがりちゃん！ ぶっ倒れさせ！」

研鑽科の訓練機が動員した、全長五メートル以上の機体を持つ大型レールガン、連射「あがりちゃん」が火を噴いた。

轟く爆音と煙霧のような環境が散らばる。一発一発が爆弾のような破壊力で、炎と衝撃の嵐を巻き起こす。その威力はアタラクシアを破壊し、愛音を立てていた場所も周囲の破壊も、その下の岩山、バネもめくられ、煙が上空へ跳ね上がった。

「これでどうだ？ 愛音！」

そう叫びながらも、傷無は内心冷や汗をかいていた。

かき集めたテクニカル・ギアとあり合わせの部品で作った、こけおどしの大型マシンだ。ほとんど、レールガンの固定砲台のような役割でしかない。

「こんなものでどうにかなるほど、生半端な相手じゃないことは分かっている。

そう思った瞬間、機体の中から愛音が飛び出して来た。空中で姿勢を変え、跳び降りてテクニカル・ギアのボデ  
ィに喰らわせた。車上に降着したボディが簡単に爆発した。

「ちっ……せめて一撃！」

大型テクニカル・ギアの太い腕を振り下ろそうとする。しかし、動きが鈍すぎる。愛音はその腕を簡単に避けた。  
空振りをして地面に叩き付けられた腕に、上から手刀を振り下ろす。テクニカル・ギアの腕が真っ二つに折れた。  
手刀で、レールガンが装着された腕をへし折る。

「運あがきは止めて！」

「ちっ……！」

機体は壁にあるレバーを引いた。

一瞬にしてフレームが解除され、機体の体が上空へ打ち出される。

「機体……！」

機体の体は、空中に降着された小型のジェットエンジンにより、数回ノットを離れたところにあるビルの向こう  
へと飛ばされて行った。

愛音は悔しそうに口を開いた。

「なに……あれだけ敵を倒すことを言っておいて、逃げる気？」

愛音はフローティングインドラウを立ち上げ、機体の性能を極めようとした。しかし、ハート・ハイブリッド・ギ  
アを装着してはいない機体の反応はすぐには分からない。

愛音は舌打ちすると、機体が消えた方向に向かって駆け出した。

「あ！ 機体くん、こっちこっち！」

そそが手を振って機体に向かう。

ジェットエンジンを過剰稼働させ、機体は上空から降りて来た。着地するやいなや、背中のバツバツを抜け捨  
て、技師部のトレーラーへと向かう。その途中には、テクニカル・ギアが殺せられている。そしてその向うでは、  
数千人の技術者の生徒たちが忙しそくに動き回り、テクニカル・ギアの出現準備をしていた。

「準備は出来てるか？！」

そそは機体を立てて、笑顔を見せる。

「ええ、いつでも出せるわ！」

機体はすぐに変身すると、フレームを自分の体に合わせてロケットした。技師部の生徒が確認されていた機体の  
ケーブルを外し、腕を回す。

テクニカル・ギアは腕に電源も入れられ、瞬間運動も済んでいた。出力を上げると、腕を突いて上体を起こす。  
機体の機体と同じ形だが、こちらの方が動きが軽く、出力も大きいように感じられた。肩にはミサイルポッド、  
両腕にレールガン。背中にはより高出力のジェットエンジンに子機のレールガンと弾倉。そして尻の長い真っ直ぐな  
尻尾の線が背負われていた。

「機体くん！ そいつはかき集めたパーツの一番いいのを使って頑なんですよ！ それが壊されたら、終わりだか  
らぬ！」

口を手を当て叫ぶそそを、機体はわかつた手を出した。

「いいから早く逃げる！ 愛音が来るぞ！」

そう言い渡すと、機体は機体のタイヤを回転させ、飛び出して行った。

倒れたビルの角を曲がると、道の先に愛音がいた。

「愛音……！」

肩からミサイルを発射した。炎と煙の尾を引きながら、ミサイルが愛音に向かって飛んでゆく。機体と共に、オ  
レンジ色の太陽が立ち上がった。機体の腕を動かそうとして、愛音は機体に向かって駆け付けてくる。

機体はミサイルの攻撃を避けながら、レールガンを発射した。愛音の動きを正確に見込みして弾撃するが、ギロスの驚  
くべき運動性能は弾丸の全てを体さばきでかわしてゆく。

「機体あるあるっ！」

あつという音が弾幕を破れて、愛音が飛び上がった。体を回転させ、機体と向き合おうと走り出す。機体はガ  
イドした瞬間に、ギロスの腕が突き刺さった。

「くうお……！」

腕のフレームが歪み、テクニカル・ギアのボディが歪み、ほどの威力で振り飛ばされる。その機体は、乗って  
いる機体の体を震動なく壊した。テクニカル・ギアは、ハート・ハイブリッド・ギアのように、バイロットの肉體

をすつてはくれない。受けた衝撃は、パイロットにダイレクトに伝く。

機体の前方にどが入り、全身の骨が軋む。しかし、機体パイプは沈没を誘はしめながらも、何とか耐えとどまつた。

「だ」

攻撃をしようとした機を向けたタタニカル・ギアの胸を、愛音に刺された。

「穴が開ける」

そう思ったとき、此、体は宙を舞んでいた。そして、百練の散らばる道路の上に叩き付けられた。百練の上をサイコロのように転がってゆく。

「か……けだ」

回転が収まると、傷痕は口から血を吐いた。

「く……そ……」

血をぬぐう間もなく、倒れて機体のチエックプログラムを過らせる。立ち上がらせようとしたが、タタニカル・ギアの胸が動かない。

チエックプログラムがエラーを起こし、途中で停止した。

「何だよ！ 畜生」

機にあるコンソールを降りつけるようにして、足元に盲探を切った。すかさず、もう一度のNにしてシステムを再起動させる。

その時、顔の横で機体が始動した。コンタリートの破片が顔に飛んで切り傷を作る。

「く……あ、愛音」

機体と繋がったのは、愛音の足だった。傷痕の顔の横を踏みつぶすように、機体を踏み抜いていた。

「何で、そんなに抵抗するのよ、畜生！ 死なせてあげたいのに、これじゃ、あたしが傷痕を治しめてあげただけじゃな」

今でも吹き出しそうなお顔で、傷痕を見おろしている。

「別に……これくらい大したことねえよ」

傷痕は血の滴じつたつばを吐いた。

「そりゃ怪すりすりや痛いわ。でも、愛音だって怪我を負っているからな、お互い様だ」

「何を言ってるの？ あたしは機体なんて一つもしていないわ。そんな機体の攻撃で、あたしにダメージを負わせることなんて……機体よ」

愛音は悲しそうに言った。

「体にじやない。心にだ」

まよとして、愛音は傷痕の顔をじつと見つめた。

「お前は助けを求めていたのに、俺はそれに応えられなかった。そしてお前を傷つけ、苦しめてきた。それに比べれば、これくらいどうってことねえよ。耐えなさいななんだ」

「な……ば、バカにやないの？」

愛音は涙でたように怒鳴った。

「傷痕は今、殺されかけているのよ。このあたしに、分かってるの？」

「ああ……そりまでして、この俺を守ろうとしてくれている」

「……だ」

「バトランティスには、相当俺は憎まれていたらしいからな。俺を機体の方まで追いつけたら、俺がいたんだぞ」

「……そうよ」

愛音は傷痕と目を合わせられず、視線をさ迷わせる。

「仲間をその手にかけるなんて、つらくないはずがない。愛音はそれだけのつらさを持負ってでも、俺に機体の苦しみを味わわせないように、守ろうとしてくれている」

「そんなの……考え過ぎよ。あたしは、ただ……」

「そこまで俺のことを考えてくれて、ありがたうな」

愛音は顔に涙を溜めて、頭を振った。

「どんな理由だって、あなたを救えようとしていることに変わりはないわ。あたしは——」

「俺もお前に負けない男になりたい。たとえ死んだとしても、仲間を守るために戦い続けよう。胸を刺さってそう言えるようになるんだ」

「もう、やめて！」

そのとき内務省の「家」を知らざる電音音が鳴った。

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

「エコー」

タタニカル・ギアの剣のキークターが限界を超えて高温を発した。逃げない奥の奥が傷の奥を刺さる。洞のような穴を流しながら、傷は叫ぶ。

「痛は！ 敵を打ち倒し、敵を殺し、敵を踏みこみ、勝ち誇るために戦うわけじゃない！ 戦いを終わらせるために敵は戦うんだ！ そのための手段は利だっていい！ それがたとえ、歌ったり踊ったりして敵を楽しませることだとしても！」

愛音の足のスラストーが光の粒子を放った。足が跳ね上がり、タタニカル・ギアの剣を握り解つ。特殊鋼材の剣がたまたま折られ、歯を回転して地面に刺さった。

まっすぐ伸ばされた愛音のかかとから、光の剣が生えている。かかとのスラストーから光の粒子を強く放出し、ナイフのような刃物を作り上げていた。

タタニカル・ギアは愛音から離れ、しばらく走ってからスピニングをして止まった。折れた剣を投げ捨て、傷が次第に腫らえられていたときに、お前が言ったんだ、バトランタイスを助けてくれて。二つの世界がともに集めるようにしたいって」

愛音は心の中を吐き出すように叫んだ。

「そうよ！ 間違、あるとき聴えてくれなかったのさ」

愛音の腕から、止めどなく涙がこぼれ落ちる。



「すまなかった……」

傷はうつむきかけた顔を、上げた。まっすぐ愛音を見つめる。

「だけど、俺はすれ違ったままは嫌だ」

愛音でも目をそらさない。絶対だ、逃げない。あんなら――

「僕たちは、いつだってやり直せる。問題は、今このときからどう生きるかだ」

「無常……」

愛音は微笑んだ。

それは懐かしむような、悲しむような、切ない微笑みだった。

「そうね……それに、無常。あたしを助けてみて」

ゼロスの全身は魔力の光が高速で循環する。背中、リンダとそこから展開する魔法陣が輝きを増す。

「でも、あたしも全力で行く」

「誓ひとこゝろだ」

二人は見つめ合った。

瞬間となったアタタシアは静かだった。

風が静しく二人の髪をなびかせる。

お互いの呼吸が、心臓の音が聞こえようとする気がした。

愛音の足下から煙が上がった。

タタニカル・ギアの脚が火を燃やす。

「瞬」にして、二人が交戦の陣合に入る。

愛音の手は無常の心臓を。

そして無常は、

この戦いで初めて、本当の強いに闘争を定めた。

「いけええええっ！」

タタニカル・ギアの右腕が凄まじい速度で突き出される。しかし、タイピングが早すぎた。愛音まで届かない距離で腕が伸びる。

その瞬間、肘は止まった場所、ギルトが竹裂した。その爆発の衝撃と、腕に内蔵されたわずか一分のジェット

燃料が拳をロケットのように撃ち出した。

「ロウ」

さすがに愛音も息を突かれた。しかし、

「ロウ」

さすがに愛音も息を突かれた。しかし、

タタニカル・ギアの拳は愛音の首筋に突き通り、

作戦は破れたかった。

しかし、無常が懸念する。

十分に無常性を学んだこの手は、愛音の体を大きく外れた。

愛音は絶望を込めて、己の拳を無常に向かって打ち出した。

無常は目をそらす。まっすぐ愛音を見つめている。

見つめているのは愛音の先。

無常の腕が見つめるタタニカル・ギアの拳は、

「無……」

——和いどおり、南の陣地の魔法陣を打ち砕いた。

「な……」

愛音は背後で響く鈍い金属音で、何が起こったか悟った。

無常とジェム・エンジンで撃ち出されたタタニカル・ギアの拳が、愛音の背後に浮かぶゼロスのリングにめり込

んだ。

リングは机、ヒビが入り、折れ曲がる。

そしてその瞬間、魔法陣の魔法陣が消滅した。

「エロス……」

同時に無常の体に無常のハート、ハイブリッド・ギアが着せられる。直後、愛音の全身の一帯が無常に吸き

込まれた。その衝撃は、無常の体をタタニカル・ギアに固定していたフレームを、力強く引き裂く。タタニ

カル・ギアは無常の体から離れ、バラバラの部品となって吹き飛んだ。

だが、エロスを着脱した無常はその衝撃に耐え抜いた。胸の奥にめり込んだ愛音の拳。エロスの表甲は砕け、

陥没したが、愛音の拳は無常の心臓を貫くことはなかった。

愛音は拳が無常の胸にめり込ませたまふ、驚きの表情で固まっていた。

「そんな……」

「そんな……」



自分に負ける運命は、無情だったのに、負けるはずのない、絶望的な戦いだったのに、それなのに、この運命無情という男は、

「無情の男だ」

愛音は、この世ならざるものに化かされたような気分だった。

両手を広げた無情が、その手を愛音に向け、

そのまじ事を受身出そうが、手刀でめざしおうが、何でもいい。どこまで無情無情な状態では、運命が出来るい。いや、既知する気力も、もうなかった。

きいてみれば、かつて無情に飲まれた命だった。

だから無情に飲まれるのなら、それでいい。

無情の両手が、両側から愛音に覆いかかった。愛音は運命を決め、口をつぶす。

だが、その運命したのには、自分の体を優しく包む腕の運命だった。

「……………」

無情は愛音の体を優しく抱きしめていた。

「運命を語るゼロスも、つかまえてしまえば何も出来ないな」

口を開くと、無情の笑顔がすぐそこにあった。

突然とした愛音の瞳は、まだ現実を見据えることが出来ずに閉まっている。

「……………」無情、あなたを最初から、テタニカル・ギアであたしを倒すつもりなんて、なかったのね……魔法陣を発生させる時のリングだ。それだけを盗って……………」

愛音は強かしい声でつぶやいた。その声を聞き、無情は顔を歪ませて微笑んだ。

「当たり前だろ？ テタニカル・ギアで対面して勝てるわけないだろうが」

愛音の口元が、ふっと緩んだ。

「すっかり騙されたわ」

あきれたように、愛音がうめく。

「テタニカル・ギアまで持ち出して……………」命をかけて……………」して、そこまでのたの？」

「……………」許いおれたが、アトラシティを救う以外に、もう一つ案にはやることがあるんだ。その案だったら、どん

な手段だって使うさ」

「まだ何かあるの？」

「それは……………」

無情の顔がわずかに赤くなった。

「愛音、お前を取り戻すことだ」

「言葉の意味が理解出来ないかのように、愛音はしばらく黙っていた。そして、少しずつ顔が赤くなってゆく、

しまいに口まで赤くなった。

無情は口元に微笑みを浮かべ、しかし視線をまた下して、愛音に話しかけた。

「無情の男だ。愛音」

頬を染めた愛音が、目を細めて微笑む。

それは全ての運命から解放された、勝利で事すそめた愛音だった。

「ふふっ、そうね。あたしの……負け、ね」

その笑顔は美しく、それでいて無情な可愛らしさを醸込んでいた。今まさに生まれ変わったような新鮮さを持った笑顔だった。

その微笑みは無情の心を癒え、引き寄せる。

「……………」

無情の顔が赤づく。今まで、こんな近くで無情の顔を見ることがあったのだろうか？ 頬が紅潮し、瞳が勝手に潤んでくる。胸の鼓動が勝手に聞こえてくるようなほど大きくなったゆくの音が騒々かしい。でも目を離したくない。自分の名前を呼んでくれた、無情の口。寂しい間も、ずっと自分に耳が響いてくれていた。その唇から目が離せない。

「……………」

無情も愛音の顔から目が離せなかった。羨しみては、喜びと希望の光を照らす赤い瞳は、実物のように美しい。

そして、自分の名前を呼ぶその唇は、濡れたように光るピンク色。そのまじ事を知って自分の名前を呼ばれると、魔法にかかったように目が離せなくなり、心が揺れやすくなる。

おどろきに引き寄せられるようにして、どちらからともなく唇が近づいてゆく。

そして……………」

そして……………」

そして……………」

そして……………」

そして……………」

そして……………」

そして……………」

そして……………」

二人は、初めてのキスをした。



唇に感じるほらかく、愛しい感触。

今まで種族改良と絶頂改良を通して、色々な行為をしてきた。しかし、口づけのこの感覚は、他では決して得ら

れないものだった。

唇から相手の愛情が伝わってくる。相手がいかに自分のことを大切に、大事に思っているかが自然と伝わってくる。二人の心が暖かいものに満たされていった。

心の機転が通たされ、力が通いてくるような気がする。

この人がいれば、何でも出来る。

そんな勇気が湧いてくる。

愛憎の種から光る雫が流れ落ちた。

——大好き。

その瞬間、二人の体から光だかつてない、凄まじい魔力の輝きが放たれた。



創世の御柱の足下で、摩由多の研究室があった。

傾き始めた創世の御柱に近づく者はいない。地面に倒された、腐敗と地獄底下を繰り回した者が種々しい。しかし摩由多の研究室だけは神秘的に禁断を免れていた。

誰も近付かぬはずのその研究室で、実験者があった。黒漆色の制服を着た、両手で護身棒を身なりをしたその人物は、断りもなく研究室へ入り、中にある文書や機材を調べ始めた。

「これは……か」

机の上にあった書類を読み進める内に、驚きの表情に変わった。

「奴め……一様何を盗んでいる」

部屋の間から影がゆらりと起き上がる。実体のない影だけの存在が、侵入者に近付いていた。

「H」

影の中から鋼鉄の爪が露いから。

鋭い金風音と火花が弾けた。

侵入者の持つ鋼が、鋼鉄の爪を受け止めていた。返す刃で逆に斬りかかる。

影は部屋の隅まで飛び出ると、再び輪を鋭く突き出した。その輪の射から光が消えた。消えた輪の光は、数メートル離れた侵入者の腕元に出ていた。

空間を飛び移る、直線制手の肉体を攻撃する能力。その力を使い、鋼鉄の爪で侵入者の胸に突き刺さるはずだった。

しかし爪は侵入者の胸元で止まっていった。

侵入者の手には、いつの間にか刺ではなく輪が握られていた。そして輪の先は影の体を繰り上げている。

侵入者の輪が光る。その明きの中に鋼鉄の爪が浮かんでいた。

「いい加減止まれな、ヴァルデ」

その言葉が放たれた瞬間、影が消えた。そして闇に絞られていたヴァルデが姿を現す。

「ゼルシオーナ……さあ」

侵入者、灰色の服を着た身に付けたゼルシオーナは、金器の鍔のみでヴァルデに話の着った。

「ヴァルデ、ナユタはどこで何をしているのだ？」

「な、まだ……もうあんまり……」

「しかし、そこにある遺物を見ると、とてもそうとは思えない。何か盗うことを目的にしているようにも見える」

ヴァルデは心算していたように、目を見開いた。

「え、そんなこと……ない、はず。遺物とかは、見たことないけれど」

ゼルシオーナは笑ったように顔でヴァルデを睨む。

「ナユタの故め、まるで遺物の人心を掴み取りだな……いいか、ヴァルデ。ここにある物を見る限り、ナユタは――」

「あら、お客様がいらしていたのですわ」

廊下から明るい声が聞こえた。高く透き通った感じの声で、明らかに子供のものだった。ばたばたと大きなスリッパを踏んでいるような音が近づき、声の主がドアから姿を現した。

ゼルシオーナが注視を向ける。

「……誰だ、君は」

ヴァルデも大きく目を見開いた。驚いたというより、若い顔をしている。頭を覆った、部屋に入ってきた人物

を見つめた。

それは、小さな女の子だった。

年の頃は七歳前後、長い黒髪で、長い白衣を着ると引きずっている。

「誰だとは判別ですが、ゼルシオーナ様、おっかく、朝夜の御用が全て解決したというのだ」

ゼルシオーナの頬に汗や汗が流れた。

「……まさか、ナユタ……なのかい？」

女の子は小首を振り、にっこりと微笑んだ。

「はい、勿論です」

その笑顔は完璧のようだ。

しかしゼルシオーナには、その笑顔の裏に闇と恐怖が潜んでいるように感じられた。ゼルシオーナは警戒心を露わにして、ナユタと名乗る少女に叫んだ。

「誰様……その名は何か？」

「はい。レリリアの文字の横読み読みましたので、変換を行ったのですが……」

少女の唇をした山手は、同じのないう顔で答えた。

「神様になつてしまいました」

これからの體を担っているのは、間違ひなく澤田多です。彼女は何を考へ、何をするのか。それによつて、幾時にも世界も全ての運命が左右されることでしょう。そして、最愛の姉に肩するダレイヌの望は、どこへ向かうのか。

か？ 次の七巻では異世界の妖怪も徐々に明かされてゆくのではないかと思っています。

そう！ 七巻と云えば、前巻あとがきに書いた「ドラマCD付き同梱版」ですが、次の七巻で実現することになりまして！ 今回の脚本は自分が書いていて、実は収録も済んでいます。内容については……今回の「ラッドファンブック」が掲載される……とだけ言っておこう！ そして、ラッドファンブックを魔装学園H×Hらしい「工夫が、今回のドラマCDではなされています。ぜひお楽しみに！

それでは謝辞を、最高ですHーヒーさん！ そしてノカデザインの須崎さん、スニーカー編集陣の相川編集のさん。そして、いつもいつも応援してくれる読者の皆さん。本当にありがとうございます！

次回、魔装学園H×H第1巻、必ずご期待！

あ、そうそう。

『魔装学園H×H』アニメ化企画進行中らしいです。

カバール・口絵・本文イラスト／**三浦**  
 /カバール・口絵・本文イラスト／**三浦**

(6巻) 新装メカデザイン／久保ササム  
 カバール・口絵・本文イラスト／**三浦**



電子特許イテズト  
 魔装学園 H × H 6 【電子特許版】

久松マサムネ

---



平成27年 10月1日 発行

© 2015 Matsuoka Masamune

本電子書籍は下22ページについて特許を申請した。

特許スニーク一太郎「魔装学園H×H6」  
 平成27年10月1日発行

発行所 久松マサムネ  
 〒100-0011 東京都千代田区千代田 3-12-3  
 03-3288-0321 (スカイパーズライン)

<http://www.kobikawase.co.jp/>



久慈マサムネ

Kuji Masamune

イラスト◆Hisasi

メカデザイン◆黒銀

06

# 魔装学園

ハイブリッド

×

ハート

Hybrid×Heart  
Magias Academy  
Ataraxia

# 魔装

Hybrid×Heart  
Magias Academy  
Alaruxia

# 学園

ハイブリッド

06

アイネス  
・シンクラヴィア

[あいねす・しんくらヴィア]

「——これが、本当のあたしなの？」



偵察ミッション START!

「何だよ、その笑いは」

「とっても可愛いでが、うりますよ」

飛弾傷無??  
[016-6577]

ガートルード  
・ヘアード  
つるぺたなマステース部員。

コミカライズ・イラスト  
魔カケーブルで連結改義ON!!

「こんな恰好……はずかしいわ」

「それだめ……同時になんて感じ過ぎる……！」



「もうあなたに戦う手段はないわ。」

大人しく投降して」

「投降？ 俺を殺しに来たんだろ？」



Gertrude



# No.1 KIZUNA HIDA

飛弾傷無 [ひだ・きずな]

特殊能力・接続改装で女の子をパワーアップさせる力を持つ。



# No.2 AINE CHIDORIGAFUCHI

千鳥ヶ淵愛音 [ちどりがふち・あいね]

近接戦闘が得意な魔導装甲ゼロスの使い手。  
昔の記憶を失っている。



# No.3 YURISHIA FARANDOLE

ユリシア・ファランドール

魔導装甲クロスを操る世界的なエース。  
遠距離からの攻撃が得意。



# No.4 HAYURU HIMEKAWA

姫川ハユル [ひめかわ・はゆる]

ハレンチなことが苦手な女の子。  
中近両方の攻撃が可能な魔導装甲ネロスを操る。



# No.5 REIRI HIDA

飛弾伶俐 [ひだ・れいり]

厳しくも優しいアタラクシアの総司令官。



# No.6 SYLVIA SILKCUT

シルヴィア・シルクカット

アタラクシア中等部に通う女の子。  
傷無を隊長と呼んで慕っている。





























魔装

学園

ハルカ

Next Mission!

妾の姉様にあんなことをするとは！  
レムリアの魔王、許すまじ……

あ、あたしは別に何とも思っていないけど

こうなったら、妾が  
じきじきに戦うぞ！

COMING  
SOON!!!

